主の働かれる時

１９９１年新年聖会記録

1990.12.30礼拝

1日10時	1日14時	1日19時
2日10時	2日14時	2日19時
3日10時	3日14時	3日19時
4日10時	4日14時	4日19時
5日10時	5日14時	5日19時

1991.1.6礼拝

〈講師〉基督伝道隊戸畑教会・牧師　伊規須太郎

基督伝道隊 戸畑教会

一九九一年標語

㊨ 今は主のはたらかれる時です

（詩篇一一九の一二六）

㊥ キリストのうちには　知恵と知識との宝が
いっさい隠されている

（コロサイ　二の三）

㊧ 苦い根がはえ出て　あなたがたを悩まし
それによって多くの人が　汚されることの
ないようにしなさい

（ヘブル一二の一五）

１９９１年新年聖会記録
目　次

第０回＝準備（1990.12.30礼拝）（イザヤ書64:1/5）　ページ
主を待ち望む者のさいわい……………………　７
（震われぬ国を受けるために）
・憐れみにすがる祈り 9　・あだとは私達自身11
・暗闇の後に与えられた契約12　・新しい使命に遣わされるために13
・疑い恐れののちに14　・震われぬ国を受けた私達15
・あなたは我々のお父さんではありませんか16　・悩みを見るに忍びない17
・新年聖会を待ち望む17

以上　１９９０年　年末
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
以下　１９９１年　新年

第１回＝1991.1.1. 10時（詩篇119:126/127 ）　ページ
今は主の働かれる時 ……………………………　１９
（時は満ちようとしている）
・あくまでも私が主である21　・今の世から救われるように祈る21
・悪の栄えは短い（アサフの体験）22　・主によって望みをいだく23
・時のしるしを見分けられぬか23　・ヨナのしるしの意味24
・「今」の周辺25　・満ちようとして忍ばれている時26
・地を震われる聖別の神27　・手を握られて書道を習うように27
・重大契約に細心の注意を28

第２回＝1991.1.1　14時（詩篇119:126 ）　ページ
今は恵みの時 ……………………………………　３１
（悔いを残さぬように直ちに従う）
・正しく裁かれる公平の神33　・人の骨折りは加える所がない34
・手の出し過ぎと引き過ぎ〈地球環境問題〉〈正しく従えば〉35
・私が地の基を据えた時どこにいたか37　・私の時は今しかない38
・話せる時代、聞ける時代39
・その通りにすぐ実行した人々〈アブラハム〉〈サムエル〉〈エリヤ〉40
・恵みの機会を失った人々42　・受けるには準備が必要43

第３回＝1991.1.1　19時（エペソ1:10/11 ）　ページ
この時代に生を受けた使命…………………　４５
（時を自分のものとする）
・頌栄者となる為の選び47　・日々使命の為に生かされている48
・捨てられていた者が育てられた！　49
・この時の為でなかったと誰が知るか（エステルの場合）50
・エジプトの栄華を捨てて神の報いを望む（モーセの場合）53
・私はこの為にこの時に至ったのです（イエス様の場合）57
・キリストの愛に迫られて（パウロの場合）58
・朝毎に生かされて（私の場合）58
・時と季節を変じるとは〈時間を伸ばすこと〉〈時間を縮められた話〉59
・神様の道は単純明快61　・聖書を自分のものとする62

第４回＝1991.1.2　10時（コロサイ2:3）　ページ
栄光と望みの奥義キリスト ………………… ６３
（一つも欠ける事はない）
・「最も勝った信仰」のかなめ65　・世々隠され今や明らかにされた奥義66
・栄光と望みの奥義キリスト67　・死は望みの門となる68
・日々に尽くす満足と望み70
・キリストのうちにある宝〈ほかには救いがない〉〈欠けた所がない〉71
・「知る」＝「領る」72　・主を知ろうとすれば必ず開かれる73
・生ける神を恐れる事が知識のもと73　・異端に対する警戒75

第５回＝1991.1.2　14時（１ペテロ2:21）　ページ
私に倣う者になってほしい………………… ７７
（私のおる所におらせよう）
・この人を見よ79　・異邦社会に生きる者の手引書79　・七重の謙遜80
・倣うのは直接イエス様に80　・エリヤの賜物を受け継ぎたいなら81
・神様の右に座らせて下さる！　82　・苦難を通して全うされる栄光の道83
・白紙生涯を通して栄光を現される85

第６回＝1991.1.2　19時（申命記29:18）　ページ
苦い根の源 ……………………………………… ８７
（エジプトを慕う心）
・民族存立の基盤89　・救いは引き上げではなく落ち残り89
・約束の国に入る備え89　・苦い根は古い生活を慕う所から91
・怖いもの見たさ91　・エサウの俗悪92
・軽んじる気持ちがあればサッと奪われる93
・恐らくは私を忘れるであろう95
・神様との隙間がなければ苦い根は伸びられない96
・安全の為に反復警告97　・神様に対する深入りは徹底的に98
・死んでいた者に栄光の務め！　99

第７回＝1991.1.3　10時（ヘブル12:15）　ページ
苦い根の果実 ……………………………… １０１
（自ら清くなるように努めよ）
・真理のひながた103　・信仰の導き手、完成者104
・弱い者を正しく歩ませるために105　・苦い根のはえる所105
・神様は悪魔をも支配される107　・栽培植物と雑草の力関係108
・悪の根の例（金銭）109　・エサウ（の子孫）の末路110
・罪も義もそれぞれ一粒から111　・清さと汚れの伝播方向111
・神様にご迷惑はかけていない？　112
・小声の感謝は悪魔の標的113　・優しい言葉を厳しく聞く113
・繰り返し語られている間に114

第８回＝1991.1.3　14時（ヘブル12:15 ）　ページ
苦い根を伸ばさない為に ……………… １１７
（宿主の死は寄生根の死）
・先頭に立つ個人コーチ119　・懲らしめの鞭は愚かを追い出す120
・苦い根を防ぐ方法があるだろうか121　・宿主の死は寄生根の死123
・毒果は後世まで汚す125　・お金を儲けるのは悪い事ではない126
・世界を痛めるかも知れない127　・神様を求めない事がなぜ悪い？ 127

第９回＝1991.1.3　19時（イザヤ53:4/6）　ページ
苦い根のために砕かれた主 ……… １２９
（主のまなざしによる癒しと慰め）
・私達の病を負われた主131　・悪魔の光←→聖なる光132
・弱いペテロを生かす主の目差し132　・愛の目差しがリバイバルを起す134
・慈しみ深い弱者の友134　・あなたのためにこの事をした135
・お任せすると主が戦って下さる136
・幾重にも包んでおいてどうして捨てられよう136

第１０回＝1991.1.4　10時（ハバクク3:2 ）　ページ
怒る時にも憐れみを忘れないで下さい …… １３９
（一人の魂も滅びないように祈る）
・ハバクク書の位置141　・神様と対話した預言者142
・神様のご性質を引き出したモーセ144　・憐れみにすがる執り成しの祈り145
・時間、タイミング、命、使命148
・あなたがこの国に迎えられたのはこの時のため149
・祈りに答えて働かれる神151　・待つ者が答えを聞き取る152
・心砕けた者の悩みを見過ごされない152　・この時代に遣わされた使命153
・施し散らしてかえって富む154

第１１回＝1991.1.4　14時（詩篇33:6）　ページ
万物を生かす主の息 ……………………… １５７
（信仰に始まり信仰に至らせる）
・神が言われた事はその通りになる159　・主の口の息によって生かされる159
・創造の始めに与えられた使命161　・影絵の舞台裏を見るように161
・神様のご職業？ 162　・主の名によって注がれる命の息（聖霊）162
・神様の賜物をわたくししたら164　・信じたとおりになるように165
・信じ仰ぎ、ただ頼る166　・いつも神様の息吹を感じながら167

第１２回＝1991.1.4　19時（エペソ3:18/19 ）　ページ
神のすべてをもって満たされるように……… １６９
（　　　　　　　　　　）
・神のすべてをもって満たされるように171　・「知る」は「領る」172
・神様にお仕えすると自分がはっきりする173
・全体を満たす方が満ちている！ 174　・明け渡すと楽になり強くなる175
・己が死ぬと苦い根も死ぬ176　・想像を絶する神様のわざ178
・神に栄光があるように179

第１３回＝1991.1.5　10時（歴代志下16:9）　ページ
心を全うする者の為に力をあらわす …………　１８１
（祭司の祈りを求められる）
・神様の目からは愚かなこと183　・心を全うする者の為に力を表す184
・アサ王に臨んだ戦争とは184　・当たり前であるかないか185
・主の足跡に倣ってほしい186　・最もすぐれた大祭司187
・主に倣う事の第一は執り成しの祈り188
・他の神を選ぶ者は悲しみを増す189　・お祈りに必要なこと190
・人の祈りと神様の働きの関係191　・多くの人の命を預けられている193

第１４回＝1991.1.5　14時（１テモテ4:7/9）　ページ
自ら敬虔を修行せよ …………………………　１９７
（自覚と任命の関係）
・自ら敬虔を修行せよ199　・修行（訓練）の益199　・永遠の命の約束200
・主は自分の者たちを知る200　・主に倣うとき苦い根は除かれる201
・つもりと本番は大違い201　・英国の影の内閣202
・今置かれている本番とは？　203　・背水の陣205
・自分の責任で歩くほかはない205
・神様はタバコをやめさせて下さるでしょうか206
・あなたの信じた通りになる206　・神様の訓練を進んで受ける207
・神様から叱られるように努力している？　208
・自分を清めるとは？（尊い器になる方法）208

第１５回＝1991.1.5　19時（黙示録12:11）　ページ
小羊の血とあかしの言葉 ……………　２１１
（悪魔の要塞を破壊する）
・勝利宣言213　・現像したら定着するように213
・悪魔の要塞を破壊する214　・内なる人が強くされて214
・どこをつかまえればよいか214

聖会後の礼拝＝1991.1.6　10時（詩篇91:4）　ページ
主の真実こそ盾 ……………………………………　２１９
（生ける神の陰に宿る幸い）
・よく見定めて積極的に221　・この平安の舞台裏は？　222
・災いとなるべきものが益となる222　・自らが傷付いて隠れたものを守る223
・一度言われた事を二度聞くように224
・主が働かれる時＝私達が御用に与る時224
・盾の守りを体験する法225

ページ
※戸畑教会について ……………………　２２８

ーーーーー準備ーーーーー

〈１９９０年１２月３０日　午前１０時　日曜礼拝〉

主を待ち望む者のさいわい

（震われぬ国を受けるために）

（聖書＝イザヤ書６４章１／５節）

【憐れみにすがる祈り】　９

【あだとは私たち自身】　１１

【暗闇の後に与えられた契約】　１２

【新しい使命に遣わされるために】　１３

【疑い恐れののちに】　１４

【震われぬ国を受けた私たち】　１５

【あなたは我々の
お父さんではありませんか】　１６

【悩みを見るにしのびない】　１７

【新年聖会を待ち望む】　１７

「どうか、あなたが天を裂いて下り、あなたの前に山々が震い動くように。火が柴木を燃やし、火が水を沸かすときのごとく下られるように。そして、み名をあなたのあだにあらわし、もろもろの国をあなたの前に震えおののかせられるように。あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事をなされた時に下られたので、山々は震い動いた。いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない。あなたは喜んで義を行い、あなたの道にあって、あなたを記念する者を迎えられる」（イザヤ64:1/5A)

◆これは63章7節から始まり、64章12節（終り）まで続く長いお祈りの一部分です。これはイザヤ書の締め括りの始まりであって、このあと65章の初めから神様のお答えがあります。それは新天新地の祝福です。

恵みの施される所には裁きも行われます。イザヤ書の66章は、旧・新約聖書の66巻に対応していると言われ、この付近は黙示録の最後とよく似ております。そういう中でイザヤは、「あなたはわれわれのお父さんではありませんか」と憐れみに縋って悔い改めの祈りをしております。

神様の前に今、私たちはどんな時に置かれているでしょうか。ある人は、「神様に信頼したからって、別にどうと言うことはない―――」などと考えますが、神様の時は「終りを指して急いでいる」とあります。切迫している訳です。今は救の道が立てられていますが、いつ閉ざされるか分かりません。神様は「千年を一日のごとく、一日を千年のごとく待っておられる」とあり、終りは必ず来ます。「主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響を立てて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされる」とあります(2ペテロ３章）。

このイザヤの祈りは、そのような切迫した時に、「もはや神様が働いて下さらなければどうにもなりません」という大胆なお祈りです。

※どうか、あなたが天を裂いて下ってください

※あなたの前に山々が震い動くように

※火が柴木を燃やし、水を沸かすときのように下られるように

これらを見るとき、天地創造の神様、シナイ山を震わせてイスラエルに十戒を与えられた神様、また預言者エリヤが、バアルとアシラの預言者たちと戦って、天から火を呼び下したことなどを思い出します。

イザヤも恐らくそれらの事を念頭において、「神様、どうぞあの時のようにして頂きたい。あなたの御旨に逆らう仇がたくさんおります。もろもろの国は騒ぎ立って、まことに空しいことを企てておりますから、どうか、そういうものに対してあなたの生けることを現して下さい―――あなたは俄然たる事を行って山々を震い動かされたではありませんか。あなたは待ち望む者に対して新しい事を行われる神様です。あなたはそれが出来る方でございます」と祈っている訳です。

４節には、「いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない」とあり、そのあと「あなたは喜んで義を行い、あなたの道にあって、あなたを記念する者を迎えられる」とあります。

神様が私たちに義を行われたというのは、イエス・キリストの十字架を立てて、私たちを義とする道を開かれたことであり、私たちがその道にあって神様を記念するならば、喜んで迎えて下さいます。その時には、考えることもできない程の新しい事が行われる訳です。

「タイムトンネル」などと言います。これは架空の話ですが、そのトンネルを通って、昔の人が今パッと現れたり、逆に現在の人がそれを通って江戸時代の町並みを歩いたりする―――そんなものです。

なぜそんな事を思い出したかと言いますと、先日、北朝鮮に抑留されていた漁船の機関長が福岡の自宅に帰って、「何もかも世界が変ってしまったように見えた」と言われているのを聞いたからです。僅か数年間、遠いと言っても日本海をはさんで向い側であり、情報も全く閉ざされていた訳ではないでしょう。しかし実際に家に帰って見ると、まるで違った世界から来たような気がすると言われていました。

もし私たちが、何十年か何百年か後の世に行ってそれを見る事ができるならば、

どんなに驚くか分かりません。神様が私たちの待ち望みに答えて、驚天動地の救を行われた所へ、私たちが行って見ることが出来るならば、どんなに素晴らしいでしょうか。人は小さな考えによって、神様のわざを予測することは全く出来ないのであります。

私たちが神様を信じて待ち望むーーーすると神様は喜んで、「そうだ、わたしはそのような神である」と義を行い（十字架によって罪を許し）、私たちを迎えると言われるのです。

◆イスラエルの罪は私たちのひながたです。これには

※あだが聖書を踏みにじる(63:18) とか

※慕った所が荒れ果て、宮が火で焼かれる(64:11)

という目に見えるものもありますが

※主に背いて聖霊を憂えさせ(63:10)

※主の道から離れ迷い(63:17)

※心をかたくなにし（同）

※神様を恐れない（同）

※主によって治められない者のようになり(63:19)

※主の名をもってとなえられない者のようになる（同）

※罪、汚れ、不義とは、主の名を呼ばないこと(64:7)

※〃　〃　　〃　〃　、自ら励んで寄りすがらないこと（同）

です。また前記の

※聖なる都の荒廃や、聖なる宮の消失は、私たちの心に神様に対する初々しさがなくなった事を示しています。つまり神様は、「神様の呼び掛けを人ごとのように考え、自ら励んで寄りすがる事のなくなったマンネリ」を問題にしておられるのです。ですから私たちが目覚めて、「これは大変だ。神様が働こうとしていらっしゃる。どうぞ神様、あなたの御旨が行われますように」と待ち望んで行くと、神様が天を裂いて下り、山々を震い動かされるような俄然たるわざが行われるのです。

したがって「み名をあなたのあだにあらわし、もろもろの国を主の前に震えおののかせられる」とある「あだ」「もろもろの国」とは、よその誰かではなくて、私たち自身のことです。魂が眠り込み、神様が見えなくなり、自分も見えなくなっている時に、大きなショックを与えて下さる———すると私たちは目が覚めて自分の姿を知り、今の時を知ります。こうして私たちは俄然引き上げられるのです。

イエス様は伝道第一声で、「時は満ちた、神の国はちかづいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マルコ１章）と言われました。「イエス様はご愛だから、私たちを救って下さる。有り難うございました」ではなくて、それまでの罪を悔い改め、「こんな者をも救って下さる方がある」とイエス様を信じて救われるのです。これが神様の道筋です。

ロマ11章に、「すべての人をあわれむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込められた」とあります。神様の知恵と知識は何と深いことでしょうか。人の救は、良いものを選んで磨き上げ、ある水準に達した時に「これで良し」となりますが、神様はむしろ真っ暗な罪の底に落ちている者を引き上げ、私たちを憐れみにあずからせて下さいます。幾つかの例を読みましょう。

◆創世記15章7/19節、朗読。ここに「日の入るころ、アブラムが深い眠りにおそわれた時、大きな恐ろしい暗やみが彼に臨んだ。時に主はアブラムに言われた、『あなたはよく心にとめておきなさい。あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その人々に仕え、その人々は彼らを４百年の間、悩ますでしょう。しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう。あなたは安らかに先祖のもとに行きます。そして高齢に達して葬られるでしょう。４代目になって彼らはここに帰って来るでしょう。アモリびとの悪がまだ満ちないからです』。やがて日は入り、暗やみになった時、煙の立つかまど、炎の出るたいまつが、裂いたものの間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた、『わたしはこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユフラテまで。すなわちケニびと、ケニジびと、カド

モニびと、ヘテびと、ペリジびと、レパイムびと、アモリびと、カナンびと、ギルガシびと、エブスびとの地を与える』」

これはアブラハムの体験であり、彼に対する神様の契約です。神様はアブラ（ハ）ムの信仰を義と認めて、「わたしはこの地をあなたに与えて、これを継がせようと、カルデヤのウルから導き出した主である」と言われました。アブラムは、「父なる神よ、わたしがこれを継ぐのをどうして知ることができますか」と問いますと、神様は、雌牛、雌山羊、雄羊、山ばと、家ばとのひなを取って２つに裂き、向かい合わせて置くように命じられました。

お言葉通りにすると、猛禽がこれを食べに来ますから、アブラムはこれを追い払っていました。日の暮れ方、アブラムが深い眠りにおそわれた時、彼は大きな恐ろしい暗闇を見ました。その中で主は、「あなたの子孫は他の国に旅びととなって、400 年の間、悩まされる。しかし、わたしはその国民をさばき、その後かれらは多くの財産を携えて出て来る――」と約束を与えられました。やがて日はすっかり入り暗闇になった時、煙の立つかまどと炎の出るたいまつ（神様の臨在＝雲の柱、火の柱に相当？）が、裂いたものの間を通り過ぎられました。暗闇の後に、恐るべき契約が与えられる――これも神様の道筋です。

◆イザヤ６章 1/8節、「ウジヤ王の死んだ年、わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た。その上にセラピムが立ち、おのおの６つの翼をもっていた。その２つをもって顔をおおい、２つをもって足をおおい、２つをもって飛びかけり、互に呼びかわして言った。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ』。その呼ばわっている者の声によって敷居の基が震い動き、神殿の中に煙が満ちた。その時わたしは言った、『わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから』。この時セラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った燃えている炭を手に携え、わたしのところに飛んできて、わたしの口に触れて言った、『見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなた

の悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた』。わたしはまた主の言われる声を聞いた、『わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか』。その時わたしは言った、『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしください』」

イザヤは若くして神様から召され、それまでも預言者としての働きをしていました。しかしウジヤ王が、神様の厳かな裁きによって亡くなった年（列王下15章、歴代下26章、参照）、イザヤは神殿で主の臨在に触れ、セラピムが迅速に仕えている姿を見ているうちに、汚れているのは人ではなくて、自分である事に気づき、恐れました。彼は、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは罪人であるのに、主を見た」と恐れおののきました。

その時セラピムが祭壇の火をイザヤの口に触れ、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」と言われました。イザヤはそこから新しい使命に遣わされました。

彼が（その後）恵まれた御用に用いられるためには、自分の醜さを知ることが必要でした。これも神様の道筋です。

【疑い恐れののちに】

◆その他にもたくさんの例がありますが、使徒行伝 1/2章、弟子たちが聖霊に満たされる時もそうであったと思います。

彼らはイエス様の遺命、「エルサレムを離れないで、父の約束を待っているがよい―――あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」に従って祈り始めましたが、一部の人は疑い恐れ、信じて待つことができません。そのためどんどん人は離れて行きました。「 120名ばかりの人々が、一団となっていた」とありますから、イエス様の昇天を見送った 500人以上の人々はたちまち４分の１になった訳です。

しかし（昇天から）僅か10日後にペンテコステ（五旬節）を迎え、彼らは俄然聖霊に満たされました。これも神様の道筋であった訳です。

イエス様が「悔い改めて福音を信ぜよ」と言われたのもそれで、自らの罪を認め、悔い改めて福音を信ずることによって、地底から天上に引き上げられるもの

です。

◆ヘブル12章 18/29節。朗読。 18/21節は、シナイ山その他における神様の現れですが、今、私たちが近づいているのは目に見えない

※シオンの山

※生ける神の都

※天にあるエルサレム

※無数の天使の祝会

※天に登録されている長子たちの教会

※万民の審判者なる神

※全うされた義人の霊

※新しい契約の仲保者イエス

※アベルの血よりも力強く語る血

などです。これらはいずれも目に見えないものですが、ヘブル１章に、「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである」とあります。つまり「昔は、目に見え、手で触れる形で神様はご自分を現されたが、今は御子によって、御霊が私たちに語って下さっている―――だからそれを聞き過ごさないように―――もしそれを無駄にしてしまうならば、どうして報いをのがれることができようか」と言われています。

今は神様のみ声が何とおっしゃっているか―――12章26節、「しかし今は、約束して言われた、『わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう』」とあります。これは、震われないものを残すために、震われるべきものを取り除くと言われる訳です。27節は文語訳によると、「震わるるもの、すなわち、造られたるものの取り除かるることを表す」とあります。

「ふるい」とは、物を分けるために使うもので、小さい物が下に落ちて大きい物が残ります。そのように、震われないものを残すために、震われるものを落として行く―――そのために神様はもう一度私たちを震うとおっしゃるのです。天

を裂いて下り、地を震わされる神様が、今はみ言葉により、御霊によって私たちを震われるのです。

私たちはもう一度、神様の前に恐れおののきたいと思います。そしてそんな者のためにイエス様が十字架にかかり、私たちが震われぬものとなった事を感謝したいと思います。

かつて神様が火をもって下られたのは、さばきのためでしたが、今は恵みのためであり、真に震われない国を受けるためである訳です。

春になると山火事の防止のため平尾台などの野焼きをします。すると新しい草が目立ちます。そのように、神様は私たちのうちに新しい事を行おうと、古いものを震われるのです。

明後日は1991年元旦で、その日から５日間の新年聖会が始まります。神様が俄然たるわざを行われて、私たちが聖別され、震われぬ国を受けるように、ひたすら待ち望みたいと願います。

◆イザヤ64章にかえる。 3/5節、「あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事をなされた時に下られたので、山々は震い動いた。いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない。あなたは喜んで義を行い、あなたの道にあって、あなたを記念する者を迎えられる」

私たちは、「自ら励んで寄りすがる者はなく、神様の名を呼ぶ者がない」と言われる状態であったかも知れません。しかし神様は私たちを打ち叩いて、「そんな事ではいけない」と叱られる方ではなく、「天を裂いて下り、山々を震い動かし、恐るべき事を行おうとしているわたしを、待ち望みなさい」と迫っておられます。

私たちが小さな頭で知ることは出来ませんが、神様は「事を行い、事をなしてこれを遂げる主」とおっしゃいます。全く見たことも、聞いたことも、考えたこともない事を行われる方です。ですからイザヤが信頼しているように、「されど主よ、あなたはわれわれの父ではありませんか」と憐れみを求めたいと願います

たとえ自らの状態がどんな者であったとしても、「主よ、これらの事があってもなお、あなたはみずからをおさえ、黙して、われわれをいたく苦しめられるのですか」と信頼するならば、神様は必ず答えて下さいます。答えなければおられない方です。

◆士師記10章 15/16節、「イスラエルの人々は主に言った、『わたしたちは罪を犯しました。なんでもあなたが良いと思われることをしてください』。そうして彼らは自分たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた。それで主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなった」とあります。

イスラエルの民が、しばらく事がないと馴れ侮り、眠り込んで神様から離れますから、神様はこれを目覚めさせようと近隣の国々を招かれます。すると、敵軍が攻め込んで来て圧迫を加えますから、目が覚めて、「ああ神様、私たちは罪を犯しました。御免なさい、助けて下さい」と祈ります。すると神様は士師（さばきつかさ）を起して救って下さる———こういう事の繰り返しの記録です。

これは私たちの魂の状態をそのまま現していると思います。そのひとこま、イスラエルの人々は悔い改めて、「わたしたちは罪を犯しました。あなたの前に悪い事を行いました。どうぞ神様、あなたの良いと思われることをして頂きとうございます。しかしどうぞ、私たちを救って下さい」———そう言って自分たちのうちから偶像の神々を取り除きますと、神様はそれを見て、「悩みを見るにしのびなくなった」と言われています。すぐあと11章では、ギレアデびとエフタを起してイスラエルを救われました。

【悩みを見るにしのびない】

◆このイスラエルの歴史は、私たちのひながたです。確かに私たちの魂はいつのまにか眠り込んではパタンと倒れます。ですから神様は、私たちの目を絶えず覚まそうとして、ご自分の栄光を現して下さいます。すると私たちはハッと目覚めますから、自ら励んで寄りすがる———すると神様はまた、私たちに対してご自分を現して下さるのです。

これは人間関係でも同じだと思います。相手の人に心を開いて近付いて行くと、相手もまた心を開いて下さる———すると新しいことが見えて来ます。逆に自分が心を閉じて遠ざかって行くと、相手も心を閉じますからどんどん疎遠になってしまいます。

私たちは今日、ここでもう一度神様の前に目覚めて待ち望みたいと思います。むかし山々を震い動かされた神様は、私たちを「もう一度震う」とおっしゃいます。裁きのためではなく恵むために、震われないものを残すために、私共の心をノックし、あるいは揺り動かされている訳です。

「喜んで義を行い、道にあって、あなたを記念する者を迎えられる」と書いてあります。神様は決して私たちを倒すようなことはなさらない、必ず守って下さる方です。

この世にはいろいろ恐ろしいものが渦巻いて、私たちを犯そうとしてまいりますが、神様はその中で私たちを包んで下さいます。詩篇91篇には、「親鳥が翼の陰にひなを守るように、私たちを守って下さる」と書いてあります。すべての災から守り、すべての責任をもって下さいます。

間もなく新年を迎えようとする今、もう一度、神様を待ち望みたいと願います。もう一度 1/5節を読みます。

「どうか、あなたが天を裂いて下り、あなたの前に山々が震い動くように。火が柴木を燃やし、火が水を沸かすときのごとく下られるように。そして、み名をあなたのあだにあらわし、もろもろの国をあなたの前に震えおののかせられるように。あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事をなされた時に下られたので、山々は震い動いた。いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない。あなたは喜んで義を行い、あなたの道にあって、あなたを記念する者を迎えられる」、ではご一緒にお祈りしましょう。

（礼拝番号 318－1990.12.30　戸畑教会礼拝記録を1991新年聖会の準備会として収録したものです）

第１回〈1991年1月1日、午前１０時新年礼拝〉

今は主の働かれる時

（時は満ちようとしている）

（聖書＝詩篇１１９篇１２６／１２７節）

【あくまでも私が主である】	２１
【今の世から救われるように祈る】	２１
【悪の栄は短い（アサフの体験）】	２２
【主によって望みをいだく】	２３
【時のしるしを見分けられぬか】	２３
【ヨナのしるしの意味】	２４
【「今」の周辺】	２５
【満ちようとして忍ばれている時】	２６
【地を震われる聖別の神】	２７
【手を握られて書道を習うように】	２７
【重大契約に細心の注意を】	２８

「彼らはあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です。それゆえ、わたしは金よりも、純金よりもまさってあなたの戒めを愛します」
（詩篇119:126/127）

【あくまでも私が主である】

◆今日ここに1991年の新年聖会を迎えました。このためのお祈りは、早くからささげて来ましたが、具体的に祈り、教えられた事を書きとめるなどは 3,4か月前から始めました。

いろいろな事を教えられると、「ああ、これは良かった。こういうふうにお話ししたらよいのではないか」と考えるのですが、神様はどうしてもそれを許されませんでした。「あくまでもわたしが主である」と迫られる———神様が最後の決を握っていらっしゃる訳です。

どなたがどういう問題をお持ちか、私には細かい事は分かりませんが、神様はそのすべてをご存知であって、どなたにとっても最も素晴らしい事をしようとされていると思います。ですから、神様のお言葉を聞くことをまず第１にしたいものです。これがすべてですから。

さて、私が個別に教えられて来たこともいろいろとありますが、その全体は神様が全うされるところであって、私は導きに従ってひとつひとつ進んで行くだけです。目の前のことはいくらか分かりますが、少し先の方になりますと、もう分かりません。

私が「全部分かりました。何もかも準備が出来ました。」ということは許されません。神様に全部を明け渡して、「あなたは聖会の主であり、また今年１年の主人公です。今の時代の主であり、全人類の主人公でもあります」と申し上げている訳です。

宇宙の果から、私共の体の細胞の中まで、すべて神様のご支配のもとにあるという事がはっきりして、今は大変気持がゆったりとしております。

【今の世から救われるように祈る】

◆今私たちが置かれているのは決して良い時代ではありません。作者が歌っているように、「しえたげる者に（わたしを）ゆだねないで下さい」とある通りで

す。「しえたげ」と言うと、暴力で人をしえたげる事もありますが、私たちの望みを失わせようとする悪（サタン）の働きがそうです。その力は非常に強く、しかもいつもどこにも働いて来ます。地球上にあるすべてのものが重力で引かれているようなものです。

また、「高ぶる者にわたしを、しえたげさせないでください」とあります。悪魔はある時はおだてておいてストンと落す事もあり、脅して来ることもありますですからそういうものから守って頂きたいと祈っている訳です。

まことの神様は、信頼する者に対して、ご自分が決して曖昧な方でない事を現して下さいます。

◆詩篇73:1/2節、「神は正しい者にむかい、心の清い者にむかって、まことに恵みふかい。しかし、わたしは、わたしの足がつまずくばかり、わたしの歩みがすべるばかりであった」―――これは、この作者アサフが、悪い者たちが栄えるのを見て苦しんだ体験を歌った詩です。

１節は、「正しい者は恵まれる」という信仰の建て前であって、アサフもよく分っていました。しかし現実を見る時、彼の足はすべったり、つまずいたりするばかりでした。なぜかと言うと、悪い事をしている人が何の苦しみもなく全く順調で、高慢にふるまっているからです。彼は疑いました。「神様は一体生きていらっしゃるのだろうか。こんな事が通っていいのだろうか」と。

彼は、神様に清くお仕えしたいと願いますから、常に手を洗うように一生懸命に身を慎みます。しかしそれが馬鹿らしいような気がして仕方がない。「もしこんなことを話したら、子供たちが躓くだろうから、話す事もできない」と苦しんだのです。

ところがある時、神様の聖所（教会）に行ってお祈りをしているうちに、真相が分かりました。それは今、彼らは順調なようであるが、それはなめらかな所に置かれているからで、やがてツルリと滑って転んでしまう―――すると彼らはまたたく間に滅ぼされて消え失せてしまうという事です。

そこでアサフは、「ああ、わたしは何と愚か者でしたでしょうか。獣のように

悟りがありませんでした。しかし今、本当のことが分かりました。神様は見ておられないのではなくて、全部知っておられる、そして最後の裁きをなさる方です」――「わたしはあなたのほかに、慕うものはありません。わたしの身も心もいずれは衰えます。しかしあなたは永遠にわたしの心の力、わたしの最高の財産です」と歌っています。

【主によって望みをいだく】

◆詩篇 119篇の場合も同じで、「彼ら（しえたげる者、高ぶる者）はあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です」と歌っています。この人は自分の周囲を見ると、しえたげる者、あるいは高ぶる者が勝手なふるまいをしているように見えますから、こんな時代が一体どうなるだろうかと失望します。しかしただ一つ望みを持ったのは、「今は主のはたらかれる時である」という事です。神様は決して眠っておられる方ではありません。悪いものを見過ごしにされる方ではありません。現に私たちが神様の命によって時々刻々生かされているように、神様はすべてのものを見ておられ、ご支配になっておられます。

世の人は、「神様なんかあるものか。宗教は心の問題で、この世の具体的な問題とは関係がない。自分の心の慰めにすぎないのだ」と言いますが、決してそうではありません。

【時のしるしを見分けられぬか】

◆マタイ16章1/4 節、「パリサイ人とサドカイ人とが近寄ってきて、イエスを試み、天からのしるしを見せてもらいたいと言った。イエスは彼らに言われた、『あなたがたは夕方になると、「空がまっかだから、晴だ」と言い、また明け方には「空が曇ってまっかだから、きょうは荒れだ」と言う。あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのか。邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう』。そして、イエスは彼らをあとに残して立ち去られた」

イエス様を陥れようとするパリサイ人（偽善者）とサドカイ人（合理主義者）が近寄って来てイエス様を試みました。「あなたが救主というなら、そのしるし

を見せてもらいたい」という訳です。イエス様は、今が悔い改めの時である事を知らない彼らを嘆かれて、「あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのか」と言われました。「人が神様を試そうとしてしるしを求めても、決してしるしは与えられない」と言われたのです。

◆人が神様を探ろうとしても、しるしは与えられませんが、神様から与えられたただ一つのしるしがありました。それは４節、「ヨナのしるし」です。

旧約聖書の終りの方に、短い預言書「ヨナ書」があります。預言者ヨナは、「ニネベの町に行って、彼らの悪を責めよ」と命ぜられましたが、彼はこれを喜ばず、ご命令に背いてタルシシにのがれようとしてヨッパ港に行きました。すると丁度タルシシへ行く船があったので、大勢の乗客と共にその船に乗り込みました。

神様は激しい暴風を起されましたので、船は航行の自由を失い、積み荷を海に投げ捨てるような事態になりました。しかしヨナは船の奥に下って眠り込んでいました。船長が来て、「みんながめいめいの神に祈っている時に、どうして寝ているのか。あなたもあなたの神に呼ばわりなさい」と言いました。

しかし一向に嵐はおさまりませんので、「誰のせいでこの災が臨んだのかくじを引こう」という事になり、くじを引いて見るとヨナが当りました。彼は問い詰められて、「わたしは海と陸をお造りになった天の神を恐れる者です――わたしはこういう事情で神様の前から離れて逃げようとしている」と言ったので、一同は「あなたをどうしたらよいか」と言います。ヨナは「わたしを海に投げ入れたら、海は静まるでしょう。こうなった理由はよく分かっています。わたしのせいですから」と言いましたが、人々はなお努力して船を漕ぎ戻そうと努めました

しかし海はいよいよ激しく荒れるので、遂にヨナを海に投げ入れました。すると、海はすぐ静かになりました。丁度その海には大きな魚がいてヨナを飲み込みました。３日３夜、腹の中にいたヨナは、その中から主に祈りました。はじめは絶望的な祈りでしたが、やがて神様に心が向いて、「わたしは感謝の声をもってあなたに犠牲をささげ、わたしの誓いをはたす。救は主にある」と結んだ時、神

様は大魚に命じられたので、魚はヨナを陸地に吐き出しました。悔い改めた彼は最初の使命であるニネベに行って伝道したところ、ヨナの予測に反して、町全体が救われたという事がありました。

このお話には教えられる所がいろいろありますが、イエス様が「今の時代に与えられるしるし」とおっしゃったのは、そのヨナが、魚の腹の中に３日３晩とどまり、３日目に吐き出されたことが、イエス・キリストが（十字架につけられ）墓に葬られて、３日目に甦えられることを示しているとおっしゃったのです。

今は悪い時代であり、泥沼に落ちて、動けば動くほど沈んで行くような状態です。しかしイエス様が十字架にかかって３日目に甦られたことによって、この時代に神様の救が与えられることをはっきり約束されたのです。

◆詩篇 119篇にかえり、126 節、「今は主のはたらかれる時です」――私はこのみ言葉を与えられた時、「今」というお言葉を深く味わわせて頂きました。「今」とは、現在、存在するすべてのものを含むものであると思います。また「今」とは、過去の全体の結果です。そして将来のすべてのものの土台です。

神様は「わたしはアルパでありオメガである」とおっしゃいました。これは英語で言えば「ＡからＺまで」――「初めであり終りである」ということです。神様は「過去、現在、未来」全体の主人公です。時間とは永遠から永遠に向かってただ流れて行くものではなくて、神様がその時間をもお造りになったのです。こんにち流に言いますと、神様がすべてのシステムをお造りになったのであり、時間もお造りになった（定められた）のです。

人間が（経過）時間を計る時は、まずストップウオッチを押してスタートさせ、再びそれを押します。すると針が止まって経過時間が分かります。そのように神様は「ここ」という時に「時」の初めを定められ、「ここまで」と時の終りを定められます。ですから勿論、神様は時の初めよりも前からおられ、時の終りよりも後までおられる方です。そしてそれぞれの時に存在するすべては神様の手の中にあります。

◆今という時代は、すでに満ちた時が、いよいよ満ちてしまおうとしている時であると思います。ヨナのしるしが与えられ、その預言に従ってイエス・キリストは私たちのために来て下さいました。私たちのすべての罪を負って十字架の上に死んで下さったイエス様は、3日目に甦って救の完成をあかしされました。

罪とは、この世の約束事を破ることと考えますが、その源は万物の造り主である神様を認めないことです。人が現に向かい合っている人を無視することは、最も失礼なことですが、私たちが自分の命を支えて下さっている方を無視する――「私は生れたから生きている。当り前のことだ。神様なんかの世話にはなっていない」と考えれば、これ程失礼なことはありません。それが聖書で言われる罪です。

人が人に対して失礼なことをしても、あとがなかなか大変ですが、神様を無視する罪を犯せばただではすみません。その罪のためにイエス・キリストが十字架にかかって、私たちのすべての罪を負って下さいました。

イエス様が伝道の第1声で、「時は満ちた。悔い改めて福音を信ぜよ」と言われたのは、今からおよそ2000年前ですが、3年後にはイエス様は現実に十字架にかかって死んで甦り、救の時が満ちました。それは「わたしはこの日、この時のために来たのだ」と言われた時でした。

しかしその後、私たちは長い年月を経て今ここにおります。それは神様がずるずると時間を伸ばされたのではなくて、私たちを忍耐しておられる訳です。

神様の救は裁きと同時に行われます。私たちが何事かを処理しようとする時、目的にかなわないものを取り除きます。たとえば食事の準備をしようとすれば、食べられない部分を切り捨てて、食べられる所を選り分けます。神様の時が満ちて救を与えて下さる時には、信じない者を裁かれます。神様は（終りの時を来たらせるという）約束の実行を遅くしておられるのではなく、ただ一人も滅びる事がなく、すべての者が悔い改めに至ることを望んで長く忍耐しておられるのです（2ペテロ3章、参照）。

ですから、ある人々があざけるように、このまま何事も無いということはありません。必ず終りが来ます。ストップウオッチを押された方は必ずもう一度押さ

れて終りが来る訳です。その時がいよいよ近付いています。「今は主のはたらかれる時」というのは、そういう重大な時であると教えられました。

◆日本列島は世界でも有数の火山地帯であって、地図の上に火山の場所をしるしますと、たくさんの点が集まります。

プレートテクトニクスという理論によりますと、太平洋の遥か東、アメリカ大陸に近い部分に地球の割れ目があって、そこから地球の内部のものが盛り上がって来ているそうです。盛り上がったものは、そこで左右に分かれ一方はアメリカ大陸に押し寄せ、もう一方ははるか太平洋を押しながら日本に近付き、日本列島の下に潜り込んで、地中にかえって行くそうです。潜り込む時に日本列島のふちを引き摺り込んで、これ以上引き込めない所まで行くとトンと盛り上がる———すると大地震が起るという訳です。またゴリゴリと潜り込む時に熱が発生して、それが火山になると言われます。

丁度それと同じように、神様の時は、いよいよ満ち終ろうとしており、「もうこれまで」という時にドンと地を震われ、天を裂いて臨まれる———するとどんな恐るべき事が起るか分かりません。一面において裁きが行われ、一面において（見たことも聞いたことも思ったこともない）救が与えられる訳です。

新年聖会の主人公は神様であって、いよいよその時を満たし、私たちのうちに新しい事を行おうとされています。これまで自分で悪い事と分かっていても、どうしても離れられなかったものを、神様が取り除いて、そこへ新しいものを注いで下さる———おいしいものを器に入れる時、古いものや汚いものが入っていれば必ずこれを捨てて、新しいものを注ぎます。それが神様の聖会です。聖会の「聖」は「聖別」する意味で、汚いものを清める———痛くても手術をして取り除け、すっかり綺麗にするという意味です。

◆今年の聖会は５日の夜まで行われます。私は全く神様に降参してしまったのですから、あとは主人公である神様がどういう事を行われるか、私には分かりません。お委ねした時、すでにこうして導いておられる訳です。神様のなさるわざ

に、私たちが身を委ねるとは、聖書のお言葉に委ねることです。この詩篇の作者は、「金よりも、純金よりもまさってあなたの戒めを愛します」と言っています。古来、金は人間を魅了して来ましたが、どんな美しい金よりも、純金よりもまさって神様のお言葉を大切にして聞く———そうすると、神様がご自由にわざを行われる訳です。

書道を習う時に、先生が生徒の手を上から握って、動かし方を教えてくれる事があります。先生は「力を抜きなさい」と言われます。生徒が力を入れて突っ張っていると、先生は教えられません。力を抜きますが、自分で書いているつもりで習う訳です。

「先生が書いてくれるのなら、勝手にして下さい」と言っては練習になりません。自分が書くのですが力を抜いて習う訳です。同じように神様が、「今は主のはたらかれる時」とおっしゃるのですから、全くそのお言葉に身を委ねて行く———しかし力んで、「さあ、これを守って行かなければ」というのではありません。何よりも大事にして聞き従いますが、自分の力を抜いて、「神様、どうぞお言葉どおりこの身になさって下さい」———受胎告知の時マリヤが、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と言った態度です。投げ出すのではありません。ケセラセラというのではありません。私が歩くのです。しかし「神様がなさるように、私はついて行きます。私はあなたの手からあなたのおきてを学びます」それがこの詩篇です。

【重大契約に細心の注意を】

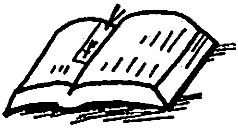
◆詩篇 119:128、「わたしは、あなたのもろもろのさとしにしたがって、正しき道に歩み、すべての偽りの道を憎みます」———偽りの道は魅惑的に見えますから甚だ危険です。このことについてはまた後に教えられると思いますが、そのような危険がたくさんあるのですから、いよいよ神様のお言葉によく聞き従うことが肝心です。

大切な文章を読む時には、よくよく味わいます。テニヲハから、句読点の付け方一つまで、よく注意をします。点の位置が少し変ることによって意味が大いに違う事もありますから。

聖書のお言葉はそれ程に気をつけて、偽りの道に誘われないように読むことです。仕事上の契約書など、大きな利害に関係しますから、細心の注意を払いますが、聖書のお言葉は、それ以上に重大な私たちの命に係わる契約ですから、それ以上に注意を払って読まなければならないと思います。

テモテの手紙に、「敬虔を修行することは、今のいのちと後の世のいのちとが約束されてあるので、万事に益となる」とあります。この利益は、自分の事だけではなく、私たちの周囲にある多くの人々、この時代、この世界に係わる大きな恵みです。神様は私たちに大変なことを委ねておられる訳です。力を尽くしてこの戒めを愛し、聞き従う者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

（1991.1.1.10:00 新年礼拝　聖会１）



第２回〈１９９１年１月１日、午後２時〉

今は恵みの時

（悔いを残さぬよう直ちに従う）
（聖書＝詩篇１１９篇１２６節）

【正しく裁かれる公平の神】　３３
【人の骨折りは加える所がない】　３４
【手の出し過ぎと引き過ぎ】　３５
〈出し過ぎの例、地球環境問題〉　３６
〈正しく従えば〉　３７
【私が地の基を据えた時、どこにいたか】　３７
【私の時は今しかない】　３８
【話せる時代、聞ける時代】　３９
【その通りにすぐ実行した人々】　４０
〈アブラハム〉　４０
〈サムエル〉〈エリヤ〉　４１
【恵みの機会を失った人々】　４２
【受けるには準備が必要】　４３

「彼らはあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です」

（詩篇119:126）

◆ここに今年の標語が3つ掲げてありますが、右側の標語はこの詩篇から与えられたものです。「今は主のはたらかれる時です」―――この新年聖会のために具体的なお祈りを始めたのは 3,4か月前で、それ以来いろいろな事を教えられて来ましたが、いま迫られていることは、「わたしが主人公である」ということです。聖会は人が組み立てた話を聞く会ではありません。神様が働かれ、神様のお言葉を聞く時です。

いま私たちの生きている時代は、決して良い時代ではありません。むしろ「しえたげる者」が私たちをしえたげる―――拳銃を突き付けて脅すことはないかも知れませんが、悪魔は絶えず私たちをしえたげ、あるいは訴えて、「お前はこんな人間ではないか。教会、教会と言っているが、そんなことで救われるものか」と言って来るかも知れません。あるいは高ぶって私たちを脅す―――「お前はそんなにしていたら死ぬぞ」という訳です。この世は神様抜きの考え方に従って非常な勢いで流れて行きます。

そんな中にあって、私たちは「こんな世の中に神様が本当にいらっしゃるだろうか。時には悪い人が捕まる事もあるが、大部分はうまい事をやって隠れおおせてしまい、真面目にやっている人が損ばかりしてちっともうだつが上がらない」と思いがちですが、神様は決して眠っておられる方でもなく、何も言えない方でもありません。必ずそれに対して裁きを行われます。

このことは詩篇73篇にもあります。同様の疑問を感じて苦しんでいたアサフに、神様は真相を見せられました。悪いことをして栄えている者たちは、滑らかな所に置かれており、たちまち転んで滅びてしまう―――全く一掃されて跡形がなくなると知らされました。

その時アサフは目覚めて、「ああ、御免なさい。神様を疑っていろいろな事を言いました。しかし今は神様だけが頼りです。あなたを心の拠り所にいたします」と悔い改めた訳です。

今も神様はすべての主人公であり、生ける神様です。すべてのものを裁き、必ず決着をつけられます。人が憎んだり訴えたりするからではなくて、神様のみ心に従って決着をつけられます。私が間違っていれば、そのように正されますし、ほかの人が間違っていれば、その人も正されます。

【人の骨折りは加える所がない】

◆時代が進んで、人間もなかなか大した事が出来るようになったと思いますが、神様の知恵と力に比べれば、まことに小さなものです。

箴言に、「主の働きは人を富ます。人の骨折りはこれに加えるところがない」（箴言 10:22、文語訳）とあります。ここで「富」と言われているのは、お金だけではありません。知恵も力も、事情、境遇もすべてそうです。神様の祝福が人間の一切を整えて下さいますが、人がこれに介入することは出来ません。「神様、もう少しここを追加して下さい」という事も出来ません。あるいは、「ここがちょっと具合が悪いからやめて下さい」、これも出来ません。神様が100%なさるのであって、人の介入する余地は全くありません。その事についていろいろ教えられましたが、一つだけ読みましょう。

イザヤ43:10/13、「『わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にもない。ただわたしのみ主である。わたしのほかに救う者はいない。わたしはさきに告げ、かつ救い、かつ聞かせた。あなたがたのうちには、ほかの神はなかった。あなたがたはわが証人である』と主は言われる。わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」とあります。

神様はすべてのものの主であって、ただおひとりの方です。「全知、全能、全在」と言いますが、人の言葉に尽くせない偉大な方です。

「わたしのみ主である。わたしのほかに救う者はいない」と言われています。神様が行われている時に、誰もほかの人が、「私もちょっと加勢してあげましょう」と言えない。また逆に神様をとどめて、「ちょっと神様、待って下さい。それはやり過ぎです。このくらいにして下さい、今の時代ですから」と言っても、それとは関係なくご自分のみ心を遂げられます。

◆ルカ1章には、バプテスマのヨハネの誕生の記事があります。父ザカリヤは祭司であり、すでに夫婦共に年老いていました。しかしある日、当番にあたって神殿の中で務についていた時、御使が現れてヨハネの誕生することを告げられました。しかし彼は、「どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」と答えました。つまり「とてもそんな事はないでしょう」と言った訳です。

すると御使が、「わたしは神のみまえに立つ御使であって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである。時が来れば成就する神様のお言葉を信じなかったから、あなたは口がきけなくなり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」と宣告されました。これは口がきけないのは勿論、神様について何も言う事ができない、考える事ができないということです。

神殿の外で待っている民が、暇どるのを不思議に思っていると、退出して来たザカリヤは手真似をするだけで口がきけません。「これは何かあったにちがいない」と思っているうちに、翌年その老人の家庭に子供が産まれました。8日目に、幼な子に割礼をほどこし名前をつける事になり、親戚が集まって、「ザカリヤという名前にしよう」としますと、父親は書板を求めて、「その名はヨハネ」と書きました。これは誕生の予告を受けた時に、御使が指示された名前でした。彼は「神様のお言葉は必ずそのとおりになるお言葉で、わたしは至らぬ事を言ってすみませんでした」と悔い改めた訳です。

その途端に彼の口がパッととけて、「わー、神様はおっしゃったとおりになさった。私はまことに罪を犯したが、憐れみによってもう一度口を開いて頂いた」と言いましたから、一同は驚いて、「いったいこの子は、どんな人になるだろう」と言いました。それがイエス様の半年前に生れて、福音の先駆者となったバプテスマのヨハネでした。

神様が行おうとされる事を、もし人が妨げれば、神様はその人の上に手を置いて黙らせ、ご自分のみ心を遂げられます。ある人々は、「それなら神様勝手にして下さい。私は寝ておきます」と言いますが、それは違います。神様が「こうするぞ」とおっしゃったら、「はい、有り難うございます。どうぞお言葉どおりに

なさって下さい」とお受けすると、そのとおりになりますから、神様をあがめることが出来ます。

人間が手を出し過ぎるのも、あるいは引っ込め過ぎるのもいけません。手を引いてしまって、「神様、あなたが主人公で勝手になさるなら、私は知りません。どうせ何を言っても無駄ですから」と言うのも間違いです。また手を出し過ぎて、「そんなこと！神様、困ります」と言うこともまたいけません。

書道を習う時、筆を持った手の上から、先生の手を添えて頂くように、投げ出す訳でもなく力む訳でもなく、自分が書くのですが、先生のなさる通りに任せて、その道を学びとって行く姿勢———それが聖書のお言葉に従う時の態度であると教えられました。

〈出し過ぎの例、地球環境問題〉

人間が不遜になって、神様に手出しをしすぎるとどうなるか———たとえば、地球環境問題がそうであると思います。人間のすみかとして地球が造られましたが、その中で節度を越えて貪り楽しみ、あるいはもっと効率よく、もっともっととやりますと、神様からとどめられます。「そんな事を言われても、一旦上がった生活水準を落とすなんて言う事が出来るだろうか」と言いますが、神様の手を越える事は出来ません。神様が「せよ」と言われたらしなければなりません。

生命科学の分野でも同じですが、人間が生命の神秘に手出しをする———手出しと言ってもほとんど何も分かっていないのに、つついてみたり繋ぎかえてみたりいろいろな事をしています。しかしこれもきっと後から大きな報いを刈り取らねばならないと思います。

原子力の問題も環境の中に含まれるかも知れませんが、最初に原子力発電が始まった時には、夢のような事ばかり言われていました。「燃料はたったこれだけしかいらない。補給する手間はいらない、単価がとても安い」などと言っていました。しかし最近ではどうでしょうか、大きな事故が起りますから徹底した安全対策をとらなければなりませんし、廃棄物がたくさん出ても持って行く所がありません。大きな穴を掘ったり、住民に補償費を出したりで、実際の発電そのものよりも、それ以外の事にお金がかかっていって、結局発電単価は安くはならない。

しかも地球は放射能の灰だらけになってしまって、人間が住めなくなるのではないかと心配されています。確かに人間は神様の手を越えて生きる事はできません。

〈正しく従えば〉

人間が神様の手を越えて生きようとすれば「いけない」ととどめられます。丁度、天地創造のとき、海の高波を「これまで」ととどめられたようなものです。

しかし、「御免なさい。あなたが主人公です。今は主のはたらかれる時です」と謙遜になると、「そのとおりだ。わたしはこのような力を持ち、このような祝福を与える神である」とご自分を現して下さいます。神様の祝福は実に恐るべきものです。

【私が地の基を据えた時、どこにいたか】

◆人が自分の立場を誤るのは、神様に対する謙虚さを失うからです。「神様なんて、そんな事を言わないでも―――私たちが地球を開発して生活を便利にして、こうして、ああして―――」とやると、神様からストップがかけられます。

ヨブ記38章1/15節、朗読。これは神様がつむじ風の中からヨブに答えて、ご自分の力を現されたところです。このあとにもずっと記されています。

ヨブ記は、私たちに苦難の意味を教えて下さるものですが、ヨブは神様のみ心が分かりませんでしたから、「神様、なぜこんな目に合わせるのですか。私は悪い事をしていないのに、どうしてこんなに苦しめられるのですか」と問いました。

立派な10人の子供は、竜巻のために家の下敷きになり、多くの家畜の群は敵に奪われ、災害で焼かれました。その後、彼自身の体に悪性の皮膚病ができ、灰の中に座って全身を掻き続けるという事になりました。

３人の友人が来て、「お前は何か悪い事をしたのだろう。そうでなければ神様がそんな目に合わせる筈はない。だからよく思い出して悔い改めなさい」と言います。ヨブは「そんなことはない。私は悪い事はしていない」と反論します。とうとう最後にヨブは、「ああ、私は生れないほうがよかった。神様、なぜこんな目に合わせるのですか。なぜですか、なぜですか。私はあなたと談判したい」と言って呻きます。長い論争の末に、神様はご自分の力を現されました。

「お前は私と談判したいのか、それでは聞くが、私が地の基を据えた時にお前

はどこにいたか。海の水が溢れようとした時に、誰がこれを閉じ込めたか」ーー次々に問い掛けられた時、ヨブは頭を抱えてしまいました。「わー私は何といたらん事を申し上げたことでしょうか。恥ずかしくてたまりません。手を口に当てて何も言えません。御免なさい」とヨブは降参してしまいました。「あなたはすべての事をなすことができ、いかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはありません。わたしはみずから悟らない事を言い、みずから知らない、測り難い事を述べました。わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします。わたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」と申し上げました。

すると神様は、「分かればよろしい」と彼を許されました。友人たちのために執り成しを命ぜられました。死んだ子供たちの代りに、新しい10人の子供が生れました。失った家畜は2倍に増えました。

神様はこれによって、苦難の意味が刑罰ではなくて訓練であり、恵みであることを教えられたのです。

【私の時は今しかない】

◆神様はヨブに対して、目に見えるものをもってご自分を現されましたが、神様は見えないものの主人公でもあります。神様は「わたしは初めであり終りである」と言われ、時間の創造者である事を宣言しておられます。

人は過去のことをどうする事も出来ません。ほんの1時間前と思っても、過ぎてしまったものはどうする事もできません。またのちのことも何とも言えません。今3時ですが、「4時に私はこうしよう」と言っても、それはどうなるか分かりません。3時半ごろにウーンと言って死んでしまえば4時には私というものはありません。自分に任せられた時は、「今」しかないのです。

ある人々は、「死んだら生れ変ってほかのものになるかも知れない」と言うそうです。今の世で悪いことをしていると、次に生れて来る時には動物になって虐待されたりするかも知れない。おとぎ話などにありますが、魔法使から鞭で触れられると石になったり鳥になったりする。そんな話の土台にあるのは、いわゆる輪廻（りんね）という考え方でしょう。

しかし神様は決してそうではないとおっしゃいます。神様は時間の支配者であって、すべてのものを過ぎ去らせられます。一旦過ぎ去れば再び帰ることは出来ません。ですから人間がその定めの中で、終りまで行かないで、行ったり帰ったりぐるぐる回るという事は決して出来ません。人間は生れて地上の使命を果し、それが終った時には神様の前に立って（一度）裁かれてそれで終りです。そのことはヘブル９章に、「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっている」と記されています。

これは人間だけではなく、万物がその通りです。地球も例外ではありません。始まりがあり終りがあります。宇宙もそうです、すべてのものは始まりがあって終りがあります。神様のご支配から逃れてチョコチョコ動き回る事は出来ません。

ですから私たちは、委ねられた「今」という時に神様のお言葉に従うことで、後からと言っていれば追い付かないのです。

◆私たちが今どんなに、恵みの時代に置かれているかと言うことについて。

ヨハネ16章 23/24節、「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい。そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」とあります。

私はこの24節のお言葉が気にかかりました。「今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった」という所です。かつて私は誤解していました。「お前は不信仰で駄目な人間だ。まともなお祈りをした事はないだろう。今後はお祈りしなさい」――そういう意味かと思っていました。

ところがそうではないと分かりました。イエス様が来て下さって、私たちに恵みの時代が開かれるまでは、律法（旧約）の時代です。自分の熱心とか努力が求められます。献げ物の動物が大きいとか小さいとか、そういうことで測られていましたから、神様に向かって、「信仰をもって必ず聞かれる」という喜びのお祈りは出来なかった訳です。

しかしイエス様が来られ、私たちのために死んで下さった事によって、すべての罪が許され、イエス様のお名前をとおして祈ると、必ず聞かれる時代になりました。「だから求めなさい。そうすれば与えられて、あなたがたの喜びが満ちあふれる」と言われているのです。これは最後の晩餐の席で弟子たちに語られた遺言のようなお話ですから、非常に大切なことです。

この恵みの時代が来ましたが、私たちが聖書のお言葉を信頼すると必ずその通りにして下さるのです。聖書が世界のベストセラーであったとしても、かつての私とは関係がないものでした。しかし今は、私にあてて下さった親展書として読むことが出来ます。ですからかつてのような事を考えないで、大切に読み、すぐそれを実行する――それが私たちにとって非常に大切になると教えられました。

【その通りにすぐ実行した人々】

◆聖書にはたくさんの人物が登場しますが、神様の祝福を受けた人は、お言葉を聞いた時に、すぐ実行しています。すぐ実行するかどうかは、相手に対する信用の程度によると思います。「あの方が今私の前にいてこう言って下さっている」と分かれば、すぐ返事をするのは当り前です。「お早うございます」と言われれば、すぐ「ああお早うございます」と答えます。これは当り前です。

神様が私の前におられて「こうだよ」とおっしゃったら、「ああ、そうですか。有り難うございます」と申し上げる――実際に目の前にいらっしゃると思えば必ずそうなります。「だから、そういうふうに従おうではないか」と言われているのです。

〈アブラハム〉

アブラハムの例を読みましょう。創世記12章です。彼は75歳でした。そのとき神様は、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と言われました。アブラハムは神様を全面的に信用して従って出ました。人間的に不安はあったでしょうが、「神様は真実な方だから、『従ってこい』と言われれば、必ず責任を持って下さる」と信頼したのです。神様はアブラハムを導いて祝福の基として下さいました。「基」とは、彼個人が最もうまいことをしたというのではありません。すべての人が、彼のように従えば、彼のように恵

まれるという見本となったのです。

〈サムエル〉

王国時代の幕を開いた預言者サムエルは、幼い時にエリ先生の所で修養していました。ある晩、神様から「サムエルよ」と呼ばれた時、すぐ起きて先生の所に飛んで行きました。「先生、呼んだでしょう。わたしは来ました」「いや、呼ばないから帰って寝なさい」、また神様が「サムエルよ」と呼ばれましたので、「先生、また呼んだでしょう」「いや、違う」―――もう一度呼ばれました。また先生の所へ走って行くと、エリ先生は気がついて、「それは神様が呼ばれたのだから、今度呼ばれたらわたしの所に走って来ないで、座って『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言ってごらん」と教えてくれました。

サムエルが言われたとおりにすると、神様は待ち兼ねていたように、迸る思いを小さな子供に注ぎ出されました。それは自分が養ってもらっているエリ先生の家族が、神様の前に罪を犯した結果捨てられるという恐ろしいお言葉でした。

こうしてエリの家庭は捨てられ、サムエルはやがてイスラエルの預言者として、主の大きな御用を果しました。幼い子供の時に、呼ばれてすぐ従ったその態度が、やがて祝福を受け用いられる元になったのです。神様は「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられる」（サムエル上２章）と言われています。

私たちは今、神様のお言葉に従って祈れば答えられる時代にいます。ですからすぐ従うことです。人間でもそうでしょう、「はい」とすぐ従う人は頼みやすいから、「ああ来てくれたか。それじゃこうして下さい。ああして下さい」と言います。しかし、「私はちょっと忙しい。私ばかり呼ばなくてもあの人がいるでしょう」と言えば、「困ったなあ、あの人には気安く頼めない」となります。従う人には頼みやすいばかりか、普通では教えられないような事までいろいろと話すようになるでしょう。神様もそういう方です。

〈エリヤ〉

預言者エリヤも神様のお言葉に素直に従った人です。列王上17章18章にあります。彼は整えられて、大きな御用のために用いられました。（北イスラエル）王

国全体に信仰復興が起りました（詳細、略）。

神様から呼ばれても、「ちょっと待って下さい。今忙しいから後から聞きましょう」と言っていると時期を失するかも知れません。「あと」という時が来れば良いのですが、神様はそれを待たれないかも知れません。「あなたには頼まない」となってチャンスがどこかに行ってしまうかも知れません。そうなると、私たちの人生は大変です。商売の機会が無くなるぐらいなら大したことではありませんが、神様の祝福を失うことは大変な損失です。

◆２か所読みましょう。最初は、マタイ25章1/13節です。ここに「そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言った。しかし彼は答えて、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った。だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである」とあります。

これは天国の譬のひとつです。婚宴の時に、花婿を迎えに行く10人のおとめがありました。そのうち５人は賢く、５人は愚かであったとあります。５人は補給用の灯油を用意していませんでした。花婿の来るのが遅れたので、彼らはみな居眠りをしてしまいました。「さあ、迎えに出なさい」という声に飛び起きてあかりを用意しましたが、油が足りません。店に買いに行っている間に花婿が到着して戸は閉められてしまいました。後から駆け付けた５人に向かって主人が冷たく言い放ったのです。

宴会の役を一つ失敗したぐらいなら大した事はありませんが、これは天国の譬です。いよいよ神様の前に迎えられようとする時に、間に合わずに戸が閉められれば、すべては終りです。天国の扉は一度閉められたら開かれる事がありません。

「何とか近道をして、どこかから入りたい」と言ってもそれは出来ません。神様のお言葉に、今従うか従わないかは、ちょっとした事のようですが、とまどっているうちに恵みの機会が閉ざされると取り返しがつきません。

雅歌５章にも、失敗した人の例があります。ある人が床にはいって半ば覚めている状態の時に、イエス様が尋ねて来られました。その時、「ああ、起きたらい

いのだがなあ。しかし私はもう着物を脱いでしまったし、また起き上がれば足を洗わなければならない」とためらっているうちに、掛けがねがガチャガチャと鳴ったので、ハッと起きて扉を開けようとすると、すでに帰り去られたあとでした。これも重大な機会を失った人です。

◆「今は主のはたらかれる時です」と言われて、「有り難うございます」とお受けしますが、受けるにはそれなりの準備がいります。飛んで来るボールを受けようとすれば、ミットを構えなければなりません。お祈りに答えられるのでも、お言葉に従って神様に働いて頂くのもそのとおりです。すると神様は答えをして下さいます。

新年聖会についてもそうだと思います。私たちがきちっと受け止めて行く、すると神様はご自分がなさろうとする事を100%、私たちのうちに行って下さいます。神様の祝福は1%でも2%でも幸いですが、折角なさろうとする事をほんの少しだけしか受けられないならば、私たちにとっても不幸ですし、神様のお痛みにもなります。

「今は主のはたらかれる時です」――神様は今はたらこうとしておられます。私たちが今、「はい、有り難うございます」と受け止めればサッとそのとおりになります。「今はたらくぞ」と言われて、 2,3日してから「はい」と言えば間が抜けてしまいます。「それ」と言われた時に、「はい」と受け止める――これが秘訣です。すると神様はご自分のみ心を行うために、その人をお用いになるかも知れません。これは大変素晴らしい尊いことです。

恵みの機会ですから、神様が働かれるように、サッとお答えして、私たちも待ち望む者でありたいと思います。受け取るには手を出さなければなりません。何かを入れて頂く時には器を用意しなければなりません。それをサッとすることです。

昔、預言者エリシャが、ある預言者の未亡人から訴えられた事があります。「借金取りが来てどうする事もできないので助けて下さい」と言って来ました。エリシャは「あなたの家に何があるか」と問いました。「油のビンに少し油が残

っています」と言います。「では今から帰って、近所から器をたくさん借りなさい。それを部屋に並べて端からビンの油をついで行きなさい。いっぱいになった時、ひとつづつそれを取り除けておきなさい」と命じました。やもめさんがそのとおりにすると、油はなかなかとまりません。ひとつひとつ満たして行きましたが、とうとう全部いっぱいになりそうですから、子供に「もっと器を借りてきなさい」と言いましたが、子供が「もうありません」と言ったので、油はとまりました。

神様の祝福はこのようなものです。神様が恵みを注がれる時、私たちが器をサッと用意すると、器のあるかぎり注いで下さいます。神様は無限、無量の方です。

ですからいま私たちは、「主が働かれるなら、どうぞ働いて下さい」と言うだけではなくて、「それでは受け取る用意をしましょう」という姿勢をもって行くと、神様は喜んで働いて下さいます。

受け取る用意をしないで知らん顔をしていると、無駄になるから注ぐことが出来ません。私たちに注がれる恵みは、イエス・キリストの血によってあがなわれたものであって、決して無駄にはされませんから、私たちが用意するまで待たれるでしょう。

あるいは、「もうお前はよい、次の人」と言われるかも知れません。あくまでも自分が用意することです。「聖会で皆さんが恵まれたら、誰かが用意されるだろう。私は端の方にいておこぼれを頂戴しよう」という訳にはいきません。ひとりひとりが自分の責任において器を用意し、「はい」と従うと、満たして下さいます。そのような備えをして一回々々の集会を待ち望みたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　　　(1991.1.1.14.00 新年聖会２)

第３回〈１９９１年１月１日、午後７時〉

この時代に生を受けた使命

（時を自分のものとする）
（聖書＝エペソ人への手紙第１章１０／１１節）

【頌栄者となる為の選び】 ４７

【日々使命の為に生かされている】 ４８

【捨てられていた者が育てられた！】 ４９

【この時の為でなかったと誰が知るか（エステルの場合）】 ５０

【エジプトの栄華を捨てて神の報いを望む（モーセの場合）】 ５３

【私はこの為にこの時に至ったのです（イエス様の場合）】 ５７

【キリストの愛に迫られて（パウロの場合）】 ５８

【朝毎に生かされて（私の場合）】 ５８

【時と季節を変じるとは】 ５９

〈時間を伸ばすこと〉〈時間を縮められた話〉 ５９

【神様の道は単純・明快】 ６１

【聖書を自分のものとする】 ６２

「それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。わたしたちは、御旨の欲するままにすべての事をなさるかたの目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである」(エペソ1:10/11)

◆この章の前半には、素晴らしい神様の救のご計画が記されています。

3/6 節は、父なる神によるご計画です。神様は私たちに神の子としての身分を授け、神様のみ前においてきよく傷のない者とするために、天地の造られる前から選ばれていたことです。それは私たちが、イエス様によって与えられた輝かしい恵みを、ほめたたえるためであると記されています。

7/12節は、御子による計画の実現で、イエス様が地上に下って私共のために尊い血を流し、私たちはすべての罪を許されて、イエス・キリストのものとなりました。これも私たちが神様の栄光をほめたたえる者となるためでした。

13/14 節は、聖霊なる神による保証で、これによって私たちが天国の資産を受け継ぐ者となり、神の栄光をほめたたえるようになるのです。

私たちが今ここに存在するのは、「たまたまある時に生れたから当然だ」とは言えません。ある(知識人と言われる)人は、「人間とは進化の果てに出来てしまったへんてこなもので、生れて来た目的なんてある筈がありません」と言っていましたが、決してそうではありません。

私たちが今ここにあるのは、神様のみ心に従い、世の初めの先からの選びによって、時至ってこの救を受け、ここに置かれているのです。

今年、右側の標語に「今は主のはたらかれる時です」とありますが、「今」とはそういう時です。現在は過去を受け継いだ「今」ですし、また将来の基となる「今」であって、そのすべてを神様がご支配になっていらっしゃいます。神様は「アルパでありオメガである」と言われる方で、その方から使命を受けて私たちは「今」ここに置かれているのです。自分の立場がはっきりするという事は、大変感謝なことです。

ですから、自分の立場を自覚して、使命を忠実に果し、神様をほめたたえる生涯を送りますと、それが終った時には、「やあご苦労様」と迎えられます。それは生れて来る時に、「おめでとう」と迎えられたようなものです。そして神様から喜ばれ、覚えられて永遠の栄光の生涯に入る―――これが人間の生きる目的です。

誰かの言うように、人間は（生物進化により）下から生れ出て、何となく地上に存在し、やがてどこかに落ちて行って消滅する―――これは下から出て下に落ちる生涯です。しかし私たちの生涯は、上から出て地上の使命を果し、元の所に帰って行く――上から出て上に帰る―――これがはっきりすると、人は神様をほめたたえるものとなるのです。

◆私は毎朝目覚めると、自分が今生かされている厳かさに感謝します。誰が命を支えている訳でもありません。心臓は何億回も動いて来ましたが、分解掃除したり、油を差したり、電池を入れ替えたりしたことはありません。全く神様の憐れみによって生かされているのです。私は夜中に目覚めて心臓の鼓動を感じると、非常におごそかな感じがします。

私は寒い時に「あんか」を入れて寝ると、生かされている事をしみじみと感じます。私がもし死んでいたらお腹を暖かくするなどはとんでもない事で、「お腹がまず腐敗を始めるから、しっかりドライアイスを入れよう」という事になる筈です。しかし生きているからこそ、暖めても腐敗することはありません。「暖かくて気持がよい」と言ってゆっくり眠る訳です。

このように、神様の憐れみと恵み、知恵と力によって一刻一刻を生かされていると知る時、「私に与えられたこの使命を果すことが出来るならば、今夜死んでも悔いはない」と思うのです。中国の思想家が、「あしたに道を聞かば、ゆうべに死すとも可なり」と言いましたが、私個人が満足だからではなくて、神様に喜ばれるから満ち足りるのです。

◆神様から生かされている身分であることについて。エゼキエル書16章 1/7節、

「主の言葉が再びわたしに臨んだ、『人の子よ、エルサレムにその憎むべき事どもを示して、言え。主なる神はエルサレムにこう言われる、あなたの起り、あなたの生れはカナンびとの地である。あなたの父はアモリびと、あなたの母はヘテびとである。あなたの生れについていえば、その生れた日に、へその緒は切られず、水で洗い清められず、塩でこすられず、また布で包まれなかった。ひとりもあなたをあわれみ見る者なく、情をもってこれらのことの一つをも、あなたにしてやる者もなく、あなたの生れた日に、あなたはきらわれて、野原に捨てられた。わたしはあなたのかたわらを通り、あなたが血の中にころがりまわっているのを見た時、わたしは血の中にいるあなたに言った、「生きよ、野の木のように育て」と。すなわちあなたは成長して大きくなり、一人前の女になり、その乳ぶさは形が整い、髪は長くなったが、着物がなく、裸であった』」

これはエルサレムの起りと生れを、一人の婦人をひながたとして語られています。彼女は異教の地に生れ、神様を抜きにした社会の中で育ちました。その生れた日に誰も世話する者もなく、捨てられて血の中にころがりまわっていたというのです。これは私たちの救われる前の姿です。

生れた子供がそのまま放置されたら決して生きて行くことは出来ません。その時、神様はかたわらを通ってこれを憐れみ、「生きよ、野の木のように育て」と拾って下さいました。

こうして成長したこの女性は、成長して一人前になりましたが裸であったので、神様は衣の裾で彼女をおおい、様々の衣服や飾りをもって飾られたのです。「着物の裾でおおう」ということは結婚を意味しますから、自ら娶って下さったという事でしょう。

これらは神様が私たちをどのように扱って下さったかという事です。もし神様の憐れみがなければ、決して生きることが出来ない筈のものでした。「生れたから生きているのは当り前だ」というのは自分を知らない高慢者です。神様は私たちの生涯に必要なすべてのものを満たして下さいました。このことが14節までに書いてあります。

ところが彼らは自分が美しくなり、名声が上がって来たのをよいことに、他の

人の所へ行ってみだらな行いをしました。「こんなことはあってはならないことである」と言われています。これは当然です。

神様によって生かされた者が、他のものに心を移して行く―――これは最もお嫌いになることです。十戒の前文に、「わたしはあなたがたをエジプトの地から導き出した者である」とあり、第１項は、「わたしのほかに、なにものをも神とすべからず」でした。

ところが、この譬の女性は、野原にころがって、そのまま死んでしまうか、野獣の餌食になっていた筈の者が、憐れみによって拾われ育てられ、大きくされ飾られると、拾って育てて下さった方を捨てて、ほかの人に行く―――それは神様の前に最も大きな罪ではないかと言われている訳です。

私たちはこの女性と同じで、罪のもとに生れ育ちましたから、そのまま放置され滅びても仕方のない者であったのですが、神様が憐れんで私たちのために神の子を十字架につけ、それによってすべての恵みを満たして下さいました。

ですから、私たちは元来罪のもとに生れてそのまま滅びるべき者が、憐みで滅びなかったこと、命の主である神様を捨てるという大きな罪を許されたこと、この二重の憐れみのうちにおかれているのです。それが今という時です。私たちはこの事を自覚しなければならないと教えられました。

◆エステル記４章 10/17節、朗読。ここに

「エステルの言葉をモルデカイに告げたので、モルデカイは命じてエステルに答えさせて言った、『あなたは王宮にいるゆえ、すべてのユダヤ人と異なり、難を免れるだろうと思ってはならない。あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救がユダヤ人のために起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう』。そこでエステルは命じてモルデカイに答えさせた、『あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。３日のあいだ夜も昼も食い飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは

法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます』。モルデカイは行って、エステルがすべて自分に命じたとおりに行った」とあります。

聖書の中で女性の名前のつけられた書物は、ルツ記とエステル記です。ルツは異邦の女性ですが、エステルはユダヤ人です。ユダ（王国）は滅びて民は捕らえ移されて他国に住んでいました。ペルシャの王アハシュエロス時代の物語です。ペルシャはインドからエチオピヤまで 127州を治めた大帝国でしたがその頃、王妃ワシテが王を尊ばないとされた一つの事件が起り、彼女が王妃の位を追われました。そのあと全国から王妃を選ぶことになって、寄留の外国人であったエステルが選ばれました。

ところが悪い大臣が起り、ユダヤ人をみな殺しにしようという計画を立てて、「彼らの法律は他の民と異なり、また王の法律を守りませんから、彼らを許しておくことは王のためになりません」と申し出て許され、一斉にユダヤ人を滅ぼす日取りも定められました。

その時エステルの養父（実際はいとこですが養父となったもの）モルデカイから伝言がまいりました。「実はこういう事情でユダヤ人はみな殺しにされる事になった。そこで王のもとに行って民のために憐れみを請い、王様に願い求めるように」ということでした。しかしエステルは答えさせました。「すべて召されないのに、内庭に入って王のもとに行く者は必ず殺されなければならない事になっています。わたしはこのところ、王様の所に行く召しをこうむっていません」と。

しかし再びモルデカイから伝言がありました。それが13/14 節です。

「あなたは王宮の中にいる身であるから、一般のユダヤ人と違って殺されないと思ってはならない。あなたがもし今黙っているならば、神様はどのような所からでも助けと救を起すことがお出来になる。しかしその時、あなたとあなたの父の家は滅びるでしょう。あなたが不思議な導きによって王妃として迎えられたのは、このような時のためでなかったと誰が知り得るか」というものでした。

そこでエステルは決心をしました。「あなたは首都スサにいるすべてのユダヤ人を集めて、わたしのために断食祈祷してください。わたしとわたしの侍女たち

もそうします。そしてわたしは王のもとへ行きます。もしわたしが死なねばならない死にます」と。

こうして、彼女が王宮に入ると、王はそれを見て、手に持っていた金の笏を伸べて、「王妃エステルよ、何の用か。あなたがそれ程までにしてわたしの所に来ようとするには、余程の願いがあるにちがいない。その願いとか何か、国の半ばであっても与えよう」と言いました。

結局エステルの訴えは王に聞かれて、首謀者であった悪い大臣ハマンは取り除かれ、ユダヤ人が滅ぼされる筈になっていたその日に、首謀者たちとその一味が滅ぼされることになりました。実に目が覚めるような大逆転が起ったのでした。この書に「神様」という文字は出てまいりませんが、すべての下に神様の摂理のみ手があった訳です。

この一連の出来事の要（かなめ）は、養父モルデカイの「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう」という言葉にハッと自覚して、「はい分かりました。わたしは今ここにあるのは、この時のためであったと信じます。ですから死ぬのなら死んでもよろしい、わたしは王様に訴えます」と言って踏み出したことでした。

もし彼女が、「この時ののためなんて言われても困ります。わたしが王妃として選ばれたのは、これこれの事情があったから、それとこれとは関係がありません」と断れば、断ることが出来たでしょう。しかし彼女はそうしませんでした。「いや、わたしはこのため、この時に来ました」と彼女が踏み出した時、その時は彼女のものとなりました。そしてそれが神様によって祝福され、大逆転が起って多くの民が救われました。

神様は今年、「今は主のはたらかれる時です」と言われます。私たちがもし、「ああ、そうですか。神様が働かれるのですか。それじゃあどうぞご勝手に。私はここで寝ていましょう。何か良いことがあったら教えて下さい」という態度であるならば、「時」はただ流れ去って、私たちは神様の祝福とは係わりのないものになるでしょう。神様は祝福を与えることが出来ません。手を出さない人に何かを投げたらガチャンと割れるだけです。せっかくイエス様の血によってあがな

われた尊い恵みが無駄になってしまいます。

しかしもし私たちが待ち望んで、「今がその時です。私はこの時、このために遣わされました。神様、あなたが働かれる時とおっしゃったんですから、私にその時を下さい」と手を出すならば、神様は恵みの時をその人に預けて下さいます。これは人間同士の関係でも同じであると思います。

聖書には、「わたしはその時、そのために来ました」と踏み出して、流れ去るべき時を自分のものとした人がありますので、それらを読みたいと思います。

◆一つは、神の人モーセです。

出エジプト記２章 11/14節、「モーセが成長して後、ある日のこと、同胞の所に出て行って、そのはげしい労役を見た。彼はひとりのエジプトびとが、同胞のひとりであるヘブルびとを打つのを見たので、左右を見まわし、人のいないのを見て、そのエジプトびとを打ち殺し、これを砂の中に隠した。次の日また出て行って、ふたりのヘブルびとが互に争っているのを見、悪い方の男に言った、『あなたはなぜ、あなたの友を打つのですか』。彼は言った、『だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのですか。エジプトびとを殺したように、あなたはわたしを殺そうと思うのですか』。モーセは恐れた。そしてあの事がきっと知れたのだと思った」

モーセは神様から召されて大きな働きをした人です。イスラエル民族は 430年の間、エジプトで奴隷生活を送りました。迫害されればされるほど神様の祝福によって増え増しましたから、総数は 250万(?) にもなっていたと思われます。その人たちを連れて紀元前1200年(?) 頃にエジプトを脱出しました。そしてこれを神様の約束のカナンの地の直前まで導きました。

この人は大変不思議な運命を辿った人です。そもそもイスラエル民族がエジプトに住むようになったのは、アブラハムの孫ヤコブが飢饉を避けて、その家族70人と共にエジプトに下ったことに始まります。これより前、すでにヤコブの子ヨセフはエジプトにあり、まことに不思議な神様の手によってエジプトの総理大臣になっていました（創世記 37/50節、参照）。

ヨセフは少年時代、兄たちから妬まれ、奴隷としてエジプトに売られたものでしたが、ある時、王の夢を解き、７年連続の大豊作ののちに、７年の大飢饉が来ることを知り、豊作年の間に、食料を備蓄して、不作年に備えるよう進言したことから、パロ王は、彼を上げて自分に継ぐ地位を与え、国の一切を任せました。

果して大豊作が７年続きましたが、彼は浪費を戒めひたすら備蓄に努めました。その後７年の飢饉が始まり、彼はエジプト全国をはじめ、近隣諸国の食料難民をも救いました。その中にカナンから移動して来た父の家族があった訳です。

そういうことですから、ヤコブの一家は、大功労者の親族として大切に受け入れられましたが、ヨセフも死に兄弟たちも、その時代の人々もみな死に、ヨセフのことを知らない新しい王が起って、勢力を増す異民族を恐れて、まず激しい労役を加えてこれを圧迫しました。しかしイスラエルの民は苦しめられるに従っていよいよ増え広がるので、王はいよいよ恐れをなし、遂には助産婦（の責任者）に命じて、「イスラエル（ヘブル）の女のために助産をする時、もし男の子が生れたら殺せ」と命じました。しかし助産婦たちは神様を恐れ、「ヘブルの女は健やかで、私たちが行く前に産んでしまいます」と王の命令に従がわなかったので、遂にパロは「ヘブル人の男の子が産まれたらナイル川に投げ込め」と命じました。

その頃レビ族の家に生れたモーセは、両親によって３か月の間隠されていましたが、泣き声が大きくなったのでしょう、隠しきれなくなったのでパピルスで籠を編み、ピッチを塗って防水し、その中にモーセを入れてナイル川の岸の葦の中に置きました。

たまたまパロ王の娘が、水浴をしようとお供の者を連れて近くに来て、パピルスの籠を見付け、開けて見ると幼な子が泣いていました。彼女がかわいそうに思ってじっと見ていると、物陰から走り出たモーセの姉（ミリヤム）が、「私が乳母を呼んで来てあげましょうか」と言って、自分の母を連れて来ました。王女は「私に代って乳を飲ませて下さい。報酬は上げます」と言って、頼みました。そこでモーセは王女の子供として、実の母を乳母として、成長したのです。そして後には、王宮において王子として育ちました。

彼が40歳になった頃、自分はこの国において奴隷として圧迫されているイスラ

エル民族の出である事を悟り、これを救おうと、まず行って同胞を虐待している一人のエジプト人を見て、これを打ち殺し砂の中に隠しました。次の日に出て行くと、ヘブル人同士が争っていましたから、悪い方の男に、「あなたはなぜそんな事をするのだ」と言うと、彼は「誰があなたをわれわれの裁判人としたのか。昨日エジプト人を殺したように、私も殺すつもりか」と言いましたから、彼は昨日のことが発覚したと思い、王の顔を避けて遠くミデヤンの土地まで逃げました。

その土地の祭司リウエル（エテロ）の娘チッポラと結婚して、そこでしゅうとの羊を飼い、80歳になったある時、羊の群を導いて荒野の奥に行き、神の山ホレブに近付きました。その時に彼が見ると、柴が火に燃えているのに、いつまでも燃え尽きません。不思議に思ってそこに近付こうとした時に、神様が「モーセよ、モーセよ」と呼ばれました。「ここに近づいてはいけない。足から靴を脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」と言われてご自分を現されました。

彼が言われたとおりに靴を脱ぎひれ伏しておりますと、「エジプトにいるわたしの民の叫ぶのを聞いた。わたしは彼らを導き上ってカナンの地に至らせようとしている。さあ、あなたをエジプト王パロに遣わして、わたしの民を導き出させよう」と言われました。

モーセは散々遠慮をしましたが、「お前がそれ程に言うならば、あなたの兄アロンと共に遣わす。あなたは彼に語って、わたしの言葉を授けなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなたがたのなすべき事を教えよう。つまり彼はあなたの口となり、あなたは彼のために神に代りなさい」と命ぜられました。兄アロンは３歳年上ですから83歳でした。

しかし彼らが行ってパロ王に交渉しても、たやすく聞き入れられません。そこで神様は次々にエジプトに災を送って、パロの頑なな心に圧迫を加え、最後には、エジプト中の初子という初子ーーー人間の子供から家畜の子供に至るまでーーーを一晩のうちに打ち殺される中で、イスラエル人は神様の高らかな手によってエジプトを出ました。

その夜は、家の入り口の柱と鴨居に小羊の血を塗り、家の内ではその小羊を火

で焼いて食べました。腰を引きからげ杖を手に持ち、荷物をかついで立食です。そしてサッと一同はエジプトを脱出したのです。その後、40年間、荒野の旅をしてカナンの地に入る訳ですが、モーセはその直前に山の上で約束の土地を望みながら召されました。

彼はそのような偉大な主の御用にあずかった訳ですが、その転機は、彼が自分の身分を知ったとき、現在の立場を投げ出して、「わたしはこのために、この時に来たのだ」と決断をして踏み出したことです。

新約聖書にもこの事が書いてありますので読みましょう。ヘブル11:24/27、「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。信仰によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、見えないかたを見ているようにして、忍びとおした」とあります。

その後にも少し記述がありますが、モーセは成人した時（40歳の時）、パロの娘の子と言われることを拒みました。黙っていればずっと王子として生活を続け、王位につくことが出来たかも知れません。栄耀栄華にあずかったでしょうが、彼はそれを自ら捨てました。「いや、わたしはこんな事をしているよりも、むしろ神の民と共に虐待されたほうがよい。キリストのゆえに受けるそしりは、エジプトの宝にまさる富である」と考えました。それは彼が最も大きな報いが何であるかを悟ったからです。

彼は、現在置かれている自分の時を知り、「わたしはこの時に、このために来たのです」と大きく踏み出しました。一旦は腕力で救おうとして失敗しましたが、神様は再びこれを召して遣わされましたから、（戦いの多い生涯ではありましたが）神様の大きな御用を果して、御国に迎えられたのです。彼が「わたしはこの時のために来ました」と踏み出したとき、「時」は彼のものとなり、神様の働かれる「時」となってイスラエル民族は出エジプトを果しました。

◆ヨハネ12章 27/28節、「『今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか、父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。父よ、み名があがめられますように』。すると天から声があった、『わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう』」とあります。

「わたし」と言われているのはイエス様です。ゲッセマネの園で十字架につけられる前の晩、同じようにお祈りをされました（マタイ26章36/46 節、など）。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」と。３度同じ言葉で、しかも血の汗をしたたらせるように祈られたとあります。それ程真剣にお祈りなさいましたが、その答えは「沈黙」でした。それによって、ご自分が十字架にかかることが神様の御旨であることを確認されて、捕らえに来た人たちの前に進み出られました。暗闇の中に大勢の人がいるのですから、誰がだれか分かりません。しかしイエス様は、「だれを尋ねているのか」と尋ねられ、「ナザレのイエスを」と言うと、「わたしがそれだ」と前に出られました。

暗闇に紛れて逃げれば見付からなかったでしょう。また父なる神様にお祈りして天の12軍を遣わして頂くこともできた筈です。しかしイエス様は自分が、「この時に、このために来た」と自覚されていましたから、進んでその「時」を自分の「時」として前に出られたのです。捕らえられたイエス様は翌朝にかけて引き回され、不法な裁判にかけられて、午前９時には十字架につけられました。12時からは陽も暗くなり、３時には息絶えられました。

人間的に見ますと、イエス様は無残な死を遂げられたと思いますが、神様は、イエス様の「時」を決して無にされず、３日目に墓から甦らせてこれをご自分の右に上げられました。すべてのものの名にまさる尊い名を与えられたために、私たちは今、イエス様を救主として頂くことが出来るようになりました。

モーセもそうですし、エステルもそうでした。黙っていればそのまま過ぎて行く時でした。しかしイエス様は、「そうです。わたしはこのために、この時に来

たのです。神様がわたしを遣わして、万民を救われるというわざのために、わたしは十字架にかからなければならないのでしたら、かかります」と決断をされました。すると天からの声が、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」と言われました。ご自分の救のわざを完成され、イエス様を死人の中から甦らせて、天の右に上げ、これによってご自分の栄光をあらわすとお答えになったのです。

【キリストの愛に迫られて（パウロの場合）】

◆次は聖徒パウロです。パウロも「わたしはそんなに熱心には従えない」と言っていればそれですんだかも知れませんが、彼はどうしてもそうする事が出来ませんでした。非常に積極的に、人間的に見るならば最も分（ぶ）がわるい生涯を送りました。しかしそれは彼が「損だけれども仕方がない」と我慢して生きたのではなく、そうしなければおられない、「わたしはこのために、今生かされています」と進んで踏み出し、神様は彼を異邦人の使徒として、最も大きな働きのために用いられました。

パウロは１世紀最大の使徒であると言われます。ある人々は、「彼は12使徒の１人ではない（イエス様から選ばれ、イエス様と寝食を共にして訓練を受けた人ではないということ）、本当に使徒かどうか分からない」などと言いますが、私はそうでないと思います。12使徒の１人であるユダが欠けたことによって、そこに加えられるべき使徒はパウロであったと思うのです。

【朝毎に生かされて（私の場合）】

◆パウロにしても、そのあとに従った多くの聖徒たちも、みな「わたしはこの時に、このために来たのです」と自分の時として従いました。黙っていればそのまま過ぎて行く時を、一歩前に踏み出して自分の時としました。そのために殉教した人もたくさんあります。

昔の聖徒たちに比べることは出来ませんが、私もまたそうです。「神様の前に知らん顔をして、安楽に暮らしたらいいじゃないか」と人は言うかも知れません。しかし私にはそれが出来ません。神様が私を生かして、日毎に使命を与えて、「この日、この時のために」と言って遣わして下さいます。ですから、私は「こ

の日、この時のために来たのです」、あるいは「ここで皆さんのために命をささげても少しも惜しくありません」という気持で踏み出して行くと、神様は次の日も力を与えて生かして下さいます。「今日も生きなさい」と言われます。そして一日一日を支えられて来ました。

この世の考え方によれば、「その日暮らしの毎日々々、そんな緊張した生活をしたら大変だ」と言いますが、私は緊張でも何でもありません。私にとって耐えられないようなことではなく、むしろ毎日喜んで力を尽させて頂いています。これは実に素晴らしいものです。

【時と季節を変じるとは】

◆ダニエル書２章に、「神は時と季節とを変じ、王を廃し、王を立て、知者に知恵を与え、賢者に知識を授けられる」とあります。神様は時間の支配者であって、ある時には、これを引き伸ばされ、ある時は、縮められます。人間の常識によれば、時間とは一定の速さで流れて行くものと思いますが、神様は万物のご支配者であって、時間を定めることが出来る方であり、始めることも、終らせることも、あるいは中断することもお出来になる方ですから、どうして伸ばしたり縮めたり出来ないでしょうか。

〈時間を伸ばすこと〉

神の人ヨシュアが、神様のご命令に従って戦争に出ました。勝ちいくさで敵を追撃するようになりましたが、追撃戦（退却戦）というのは非常に大変で、逃げるほうも追いかけるほうも大変です。「もうひとおし、もうひとおし」と追い掛けて行くうちに、日が暮れそうになりました。その時に一番欲しいのは「時間」です。そこでヨシュアが、「神様、どうぞ時間を下さい」とお祈りしますと、夕日がおよそ一日の間急いで沈まなかったとあります。時間がゆっくり伸ばされました。そのためにヨシュアは敵を追撃して大勝利をおさめました。

〈時間を縮められた話〉

ある時は、時間を縮めることが行われました。ヨハネ２章に、カナの婚宴のお話があります。その席にはイエス様も招かれていました。

料理がしらが「ぶどう酒がなくなって困ったと」と大騒ぎをしていました。イ

エス様の母マリヤがそこに来て、「この人（イエス様）の言うとおりにしてやって下さい」と僕たちに言いました。イエス様はそこに置いてある4,5 斗いりの水がめ６つを指さして彼らに、「このかめに水をいっぱい入れなさい」と言われました。彼らは遠い所から水を運んで、そのかめいっぱいにしますと、「さあ汲んで料理がしらの所に持って行きなさい」と言われました。彼らは、料理がしらの所へ持って行きました。料理がしらはぶどう酒になった水をなめてみたが、それがどこからきたのか分からなかったので（水を汲んだ僕たちは知っていた）、花婿を呼んで、「誰でも、初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったころにわるいのを出すものだ。それなのに、あなたはよいぶどう酒を今までとっておかれました」と驚きました。このときイエス様の言葉に従順に従った僕たちだけがその秘密を知っていたのです。

ここでイエス様は、神の子であって、時間を伸ばす事も縮めることも出来る全能者であるとご自分を現された訳です。

雨が降ってその水がぶどうの木に吸い上げられ、実の中にぶどう液が溜まり、収穫してしぼられ、これが発酵する。この工程は通常であれば数か月か１年かかる訳ですが、神様はそれを僅か何分かに縮めることが出来る方です。大祭司アロンの杖が、一晩のうちに芽をふき、蕾を出し、花が咲いてあめんどうの実を結んだ（民数記17章）―――そういう事もありました。神様が「時と季節とを変じる」とは、そのようなことです。

更に、絶対的な時間の延長、短縮だけでなく、そのタイミングも、個人との係わりで変えることが出来る方であると教えられました。

私たちの目の前を過ぎて行く時間は、私たちが知らん顔をしていればそのままで終ります。しかし、「いや、わたしはこのために、この時に来たのです」と自分から進み出ると、その時は私のものとなります。神様が、時と季節を変じて下さいます。今まで述べました何人かの生涯を見る時に、何でもないと思われる時が、「わたしの時です」と踏み出すことによって、それぞれが自分の時となり、神様の時となり、大きなことが行われました。

◆信仰は非常に単純・明快なものであると思います。神様（のお言葉）を恐れ敬う時に、神様がそのとおりにして下さる――「こうしなさい」と言われた時、「はい」と従うと神様の祝福がやって来ます。

サムエル上２章には、「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう」とあります。またサムエル上15章には、「従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」と言われています。神様は鏡のような方であって、こちらがその通りに従うと、神様もまた働いて下さいます。それは出鱈目に何かをやってみるという事ではなく、はっきりとしたみ言葉という道に従って、私たちが「そうです。今は主のはたらかれる時です。わたしの上に神様のみ心が行われるとおっしゃるのですから、どうぞあなたのお言葉どおりに」と従って行くと、そのとおりになります。

ルカ１章に、マリヤの受胎告知の場面がありますが、マリヤは、「そんな事はわたしには分かりません。まだ夫がありませんのに。そんな事になったら、わたしは淫らな者として石で打ち殺されるでしょう。そんなことはいやです」と言えば、それまでであったと思います。しかしマリヤは御使のお話を聞いた時、「そうです。私は神様によって命を与えられて生かされている者です。神様のお言葉でしたら、どうぞそのとおりこの身になりますように」と踏み出しましたから、それが彼女の「時」となりました。イエス様の御誕生の「時」が決まり、救の「時」が定まりました。私共にとっても非常に重大な「時」であった訳です。

ある人は信仰を非常にむつかしいもののように考えます。聖書を十二分に研究して、サッサと聖書を開くことが出来、何でも分かっていなければ――と思いますが、それは人間の知識です。私たちが神様を尊ぶのは、神様のお言葉を――世の中の話を聞き、あるいは本を読むような感覚ではなくて――神様が今わたしに語って下さっている、今わたしを生かして、今わたしにこうしようとしておられます。「はい、それでは私をどうぞ、あなたのみ心のままに」と従う時に、神様は恐るべき事を（私たちを通して）なさって下さいます。その時に私たちはたちまちその当事者になっている事が分かるのです。

私は重大な交通事故を起した経験がありますが、それまでかなり長い間、車を

運転していましたが、死亡事故の加害者（法的に過失があった訳ではありませんが、相手が死亡すると加害者と見られます）になるなど考えもしませんでしたが、ある日、ある晩、「あっ、おかしいぞ」と思うほんの2,3 秒で私は大変な事故の関係者として、その真ん中に立たせられてしまったのです。私たちが神様から召され選ばれたことを自覚して、「私のような者でも、そのようにして下さるのですか」と踏み出すと、たちまち私たちは救の歴史の中で非常に重要な当事者の立場に立ち、神様から用いられるかも知れません。交通事故は困りますが、神様がお用い下さるなら、こんな幸いはありません。

◆エペソ１章 10/12節にかえる。「それは、早くからキリストに望みをおいているわたしたちが、神の栄光をほめたたえる者となるためである」―――この地上で、喜びに溢れるということはなかなかありません。一時的にニコニコすることは出来ても、そのためにまた頭を抱えなければならないというような事は、よくあります。

しかし神様にお仕えして、「神様の選びのもとに、今わたしはそういう目的のために置かれています。有り難うございました」とほめたたえる生涯は、感謝・賛美の連続です。６節にも、「愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえる」とありますし、12節、「早くからキリストに望みをおいているわたしたちが、神の栄光をほめたたえる者となるため」ともあります。更に14節、「やがて神につける者が全くあがなわれ、神の栄光をほめたたえるに至るため」とあります。

エペソ人への手紙は、このような大変素晴らしい栄光の望みを与える書物です。これを私たちが自分のこととし、「わたしは今このために」と踏み出して行く時、聖書はことごとく私のものとなります。大変素晴らしいことです。これはこの時代に生を受けた私たちの使命ではないでしょうか。マリヤのように、「あなたのお言葉どおり、この身になさって下さい」と踏み出して行く、それによって神様が直接私に働いて下さる―――そういう生涯を体験させて頂きたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　（1991.1.1.19:00 新年聖会３）

第４回〈１９９１年１月２日、午前１０時〉

栄光と望みの奥義キリスト
（一つも欠ける事はない）
（聖書＝コロサイ人への手紙第２章３節）

【「最もまさった信仰」のかなめ】　６５

【世々隠され、今や明らかにされた奥義】　６６

【栄光と望みの奥義キリスト】　６７

【死は望みの門となる】　６８

【日々に尽くす満足と望み】　７０

【キリストのうちにある宝】　７１

〈ほかには（救が）ない〉－〈欠けた所がない〉　７１

【「知る」＝「領る（しる）」】　７２

【主を知ろうとすれば必ず開かれる】　７３

【生ける神を恐れる事が知識のもと】　７３

【異端に対する警戒】　７５

「神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」（コロサイ1:27）「それは彼らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」（コロサイ2:2/3）

◆今年与えられた中央の標語がこのコロサイ 2:3です。「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」です。只今お読みしました１章24節から２章５節までは、コロサイ教会に対する使徒の使命について記されています。神様はパウロを召されて、コロサイ教会のためにご自分の御旨を開いて下さいました。これは、こんにちの私たちに対する神様の戒めでもあります。ただの戒めではなく、「最もまさった信仰」のかなめです。

パウロは当時の一流の知識人でしたから、人の頭を喜ばせるような話をしようと思えばいくらでも出来た訳ですが、彼はそれらを捨ててしまいました。

もし彼が世の人と同じように誇ろうとするならば、誇ることはたくさんありました。すなわち、８日目に割礼を受けた者、イスラエル民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者―――とあります。しかし彼はキリストのゆえにこれらのものを損と思うようになりました。イエス・キリストを知る知識の絶大な価値のゆえに、彼はそれらのものをいらないと言うのではなく、むしろあってはわざわいであると、あたかも汚い物を捨てるように捨ててしまいました。そしてただ一つイエス・キリストと、彼が死人のうちから甦られたこと、それだけを伝えたと書いてあります。

それは彼が考えて確信したものという訳ではありません。彼自身が主から受けたことでした。１コリント15章に、「わたしの福音―――わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そ

して葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、3日目によみがえったこと―――」と言っています。

あまりに単純・明解な福音を伝えたので、ある人々は、「なんだ、パウロは馬鹿のひとつ覚えのように―――大体あの人はイエス様に直接従った人ではない」などと言いました。しかし神様は、彼を異邦人の使徒としてお立てになりました。パウロもまた、「あなたがたにキリストの奥義を伝えるために、わたしはどんな苦難もしのぶし、また力もつくします」と言っています。「キリストの苦しみの足りない所を補う」とは、十字架のあがないが不完全であるという意味ではなく、イエス様と同じ痛みを持って多くの人々のために労するということです。これによって、あなたがたが全き者として立つようにと祈っている訳です。これは神様がコロサイ教会に送られた御旨であります。

【世々隠され、今や明らかにされた奥義】

◆コロサイ1:26に、「その言の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たちに明らかにされたのである」とあります。この奥義は、長い間神様のお心の中にあったものです。旧約のはじめ、創世記を読むと、そのはじめからすでに神様のお心に中には救が見えています。それがやがていろいろな場合に預言として現れて来ます。たとえば創世記3章、「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と言われています。「おまえ(へび)のすえ」とは悪魔です。「女のすえ」とはイエス・キリストです。

そのあとにもたくさんありますが、たとえばノアの洪水のあと、ノアたちが主に祭壇を築いて燔祭をささげた時、「わたしはもはや2度と人のゆえに地をのろわない。人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである」と言われ永遠の契約のしるしとして空に虹をかけられました。それゆえに今は、「種まき時も、刈入れ時も、暑さ寒さも、夏冬も、昼も夜もやむことはない」と言われます。私は季節の変化を感じる度に、この所を思い出して、「ああ神様は真実な方でいらっしゃる。決して季節をたがえない、とおっしゃったように、また季節が動いて行く」と感謝する訳です。

神様は、「人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである」と言われ、一方で「もはや2度と人のゆえに地をのろわない―――すべて肉なる者はもはや洪水によって滅ぼされることはない」と言われるのですから、そこにはすでに「罪の無い方が、罪人の罪を負われる」という福音が見えています。

はっきりとイエス様のご誕生を預言したのは、イザヤ書あたりからですが、そのあとにもたくさんあります。

やがて時が満ちてイエス様がお生れになり、それによってすべてのことがはっきりしました。イエス様は人の子として33年間の地上の生涯を送り、十字架にかかって私たちのすべての罪を負って下さいました。

これ程はっきりされているのに、なお福音を隠されている人があります。マタイ11章に、「天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます。これらの事（福音）を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました。父よ、これはまことにみこころにかなった事でした」とあります。幼な子に奥義を開かれる一方、「そんな事があるものか。私は何でも分かっている。イエス・キリストが昔十字架にかかったことが、今の私と何の関係があるか」と言っている大人心の人には奥義が開かれません。

しかし素直に喜び受ける人に向かっては、この奥義が開かれます。召された者にとっては、「有り難うございます。私のためにイエス様が十字架にかかって、罪を許して下さいました」―――そう感謝する者は喜び踊るような感激を体験させて下さいます。たとえ体も心も衰え果てるような中にあっても、日毎に支えられ健やかにされるのです。

これは「私たち異邦人の受くべき奥義」です。大体私たちは救とは関係のない者でした。それがイエス様によって、アブラハムの受けた祝福を受け、神の民に約束された特別の恵みが与えられるのです。

◆「この奥義は、あなたがたのうちにいますキリスト」とありますが、イエス・キリストが私たちに福音を与えられると言うよりも、イエス様自身が私たちに対する福音です。聖徒パウロは、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよ

みがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」(2テモテ2:8)と言っています。

私たちがイエス様を信頼する———すなわち、私のために死んで下さった主があると知る時に、私たちに栄光の望みが出来ます。それまでは暗黒の恐れです。どんなに自分が努め励んでも、何かしら後ろめたいものがあります。何か神様が指さされているように感じる、とてもこれでは神様の前に立つことは出来ないと思います。どんなに行い正しく努めようとしても、心の奥底にひっかかるものがありますから、「一体どうなるのだろうか。私は駄目なのだろうか。あの人、この人はよいかも知れないが、私はそうはいかないのではないか」と言う恐ればかりがあった訳です。

しかし「イエス・キリストが私のために十字架にかかって下さった」ということの一事がはっきりしますと、イエス様を通して与えられる救と清め望みは、私たちに最も偉大な栄光の望みを与えて下さいます。

【死は望みの門となる】

◆そうすると私たちは死ぬことが怖くなくなります。「死」は、私たちがどうかなってしまう時ではなくて、神様の所に帰って、「ご苦労であった」と迎えられる時です。私たちの罪は、すでにイエス様が背負って下さいましたから、最早私たちは罪を責められることがありません。

乗り物の定期券は、あらかじめ纏めてお金を払ってありますから、一日に何回乗ってもフリーパスです。切符を買うことも、切ってもらうこともいりません、自由に通ってしまいます。そのように、私たちが神様の前に立たされた時に、天国の定期券を見せますと、そのために「イエス・キリストの血」という代価が払われていますから、それを見て、「あなたはもうよろしい」とフリーパスさせて下さいます。

昔「戸塚運平さん」と言う国鉄出身の伝道者の方がありました。その人の作で「天国行きの列車」という子供の歌がありました。それに「切符はいらない、主の救がある、それでみな行く」とありました。確かに私たちは、この栄光の望みが与えられる時に、死の恐れから解放されて、むしろ死は望みの門、栄光の門と

なって、地上の一切の苦しみ、痛み、様々なものから離れて、神様の所へ帰り永遠に休む素晴らしい時となります。

私が子供の時、はじめて自宅以外で寝たのは、小学校６年生の時の修学旅行だったと思います。当時、横浜に住んでいて、伊勢に参りました。その時、家に帰って早く寝たいと思ったことを覚えています。

それと同じように、私たちは地上に派遣されて使命を果し、やがて神様の所へ迎えられます。あそこが本来自分のおるべき所であって、この地上は派遣先であり仮の宿です。

ところが、神様抜きの人はそうではありません。神様の前に立った時の恐れのために、またその結果自分がどうなるか分からない不安のために、恐れおののきます。

（上から出て上に帰る生涯。下から出て下に落ちて行く生涯───省略）

人間はどんなに勇ましい事を言っていても、いよいよの時になれば死を恐れます。（1944年末、レイテ沖海戦の体験について───省略）。しかしそんな私が、やがて戦争から帰って、神様の憐れみによってイエス・キリストを信じた時、死の恐れがすっかりなくなりました。「もう戦争がないから大きな事を言っている」と言われるかも知れませんが、戦争がなくても、別な意味でいろいろな恐れはたくさんありますが、その中にあっても、神様が私を迎えて下さる───生れて来る時に「おめでとう」と迎えられたように、使命を終って神様の所に帰る時、「ご苦労であった」と迎えられる───これは最も素晴らしいことです。

人間のなすすべてのわざは消えてなくなります。ある人々は自分がこの世に生きたあかしを残そうと、いろいろなことをします。しかしそれらはいずれ無くなってしまうものです。石は紙や木よりも長持ちしますし、金属のような腐食をすることはありません。しかしこれもいつかは風化します。聖書に、「よく言っておく。その石ひとつでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」（マタイ24章）と言われています。

すべてのものは崩れ去ってしまいますが、神様の約束は決して変ることがありません。私たちを許すと言われたら必ず許して下さいます。「主のはたらかれる

時」と言われるのですから、「すべてのものは私の手のうちにある。私がすると言ったら必ずする。時が来たと言えば来たのである。あなたの使命が終れば私は責任をもって迎える」と言われるのですから、何よりも大きな望みです。

◆私は毎日、自分の生涯を感謝して生きています。目覚めて、命が与えられていることを知ると、それだけで感謝します。この一日に大きな使命があると感じるからです。神様は「生きよ」、「行け」とおっしゃいます。ですから神様のお言葉に従って力を尽くします。その日いちにちが終って、それで私の使命が終るならば、それでも結構です。その時は、「神様、私は小さい者でして、出来ないながら、何とかしてと力を尽くしてまいりました。イエス様の血によって今迎えて頂きますから、有り難うございます」と帰ります。それは私にとって最高のものです。

聖徒パウロも、「わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実はそのほうがはるかに望ましい。しかし肉体にとどまっていることは、あなたがたのためには更に必要である――わたしはあなたがたの魂のためには大いに喜んで費用を使い、またわたし自身をも使い尽くそう」と言っています。

彼は（はじめ）自分自身の生活のために、天幕作りをして働きながら伝道しました。のちには、プリスキラ、アクラがパウロの生活を支えましたから、天幕を作ることはなくなり、また出来なくなりましたが、彼は、「わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇にはならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわいである――それはわたしにゆだねられた務なのである。それでは、その報酬はなんであるか。福音を宣べ伝えるのにそれを無代価で提供し、わたしが宣教者として持つ権利を利用しないことである」（1コリント９章）と言っています。なぜなら、神様の所に帰った時に、何ものよりも勝った豊かな報いをもって報われると確信していたからです。

◆コロサイ２章３節、「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」ーーーこの宝についていろいろな点から教えられました。

〈ほかには（救が）ない〉

第１に、ほかに救がないことです。このことを申しますと、「信仰はいろいろあるのに、キリスト教は狭いことを言う」と思われるかも知れませんが、神様はただお一人の方です。私たちが何か纏まったことをしようとすれば、その責任者は必ず一人です。万物の創造者、支配者はお一人であり、その方が救の道をお立てになりました。これはイエス・キリストというただ一つの道です。使徒行伝４章に、「この人（キリスト）による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」とあります。

〈欠けた所がない〉

この福音には欠けた所が一つもありません。

イザヤ 40:26、「主は数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大いなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない」とあります。イザヤ書には、神様の主権がどんなに素晴らしいものであるかが記されています。その主権者が、イエス・キリストという救の道を立てて、「ここに救がある」と宣言して下さいました。「イエス様は私を愛して下さったから有り難うございます」だけでなく、その背景があります。１階を造らないで２階建ての家を建てることは出来ないように、まずご自分が全権者である事をはっきりされた上で、その方がイエス・キリストを立てて、「ここに救がある」と宣言して下さった訳です。

あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか」と言われています。木や石を刻まなくても、人間は様々なものを神（ではないか）とします。しかしどんなものがあったとしても、そのすべてを創造されたのはただお一人の方です。

（生物遺伝情報の基となる４種類の塩基について。ある人は生物進化のしるしと言い、他の人は、お一人による創造のしるしと言うーーー省略）

（熱力学第２法則についてーーー省略）

その神様がお立てになった救の道ですから、イエス・キリストはあらゆる意味において完全無欠な方です。

【「知る」＝「領る（しる）」】

◆神様は私たちに対して、「そのイエス・キリストを知ってほしい」と切に願っておられます。「知る」ことは「領有する」という意味です。字引にもありますが、領土の「領」という字は「知る」という意味で、「知＝領」―――知ることは、自分がそれを持つことであり、自分と一つになることであります。

昔の封建領主は自分の領地に着任すると、まず領内を検分します。「ここまでが私の領地であり、この範囲から年貢米が幾らはいって―――」と見回りをします。

それと同じように、すべての宝が隠されている完全な方を知ることは、私たちがそのすべてを自分のものとする事です。頭で考えても分かりませんが、イエス様のお言葉を守る時、イエス様も私たちを愛して自分を現して下さいます（ヨハネ14章、参照）。

罪のために苦しんでいる時、「こんな者のためにイエス様が十字架にかかって下さった」と罪の許しを体験しますが、次に何か失敗した時に、「こんな大きな罪はもう許されないに違いない」と思います。ところが神様が光を与えて下さると、「イエス・キリストの血は、すべての罪からわたしたちをきよめる」と、スコップを深くさして植物の根を起してしまうように、「この深い罪をも完全に許して下さる―――イエス様の十字架はこんなに力があるのだ」と分って、大きな感謝が沸き上がって来ます。

神様は、「その勢いの大になるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることがない」と言われます。私たちがたとえどんな恐ろしい罪を犯したとしても―――ある所には、「人の子（イエス様）に対して言い逆らう者は、ゆるされる」（マタイ12章）と言われています。御霊に従う限り、どんな罪であっても許されると言われるのです。ただし聖霊に対して言い逆らう、つまり「イエス・キリストの血は、すべての罪からあなたをきよめるのだよ」と言う呼び掛けを拒絶すると、最早救われる道はありません。

【主を知ろうとすれば必ず開かれる】

◆ホセア6章 1/3節、「さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、三日目にわたしたちを立たせられる。わたしたちはみ前で生きる。わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」とあります。

これは大変幸いな約束です。神様は私たちに対して、すべての宝の隠されている奥義キリストを知ってほしいと求めておられます。神様のほうからそうおっしゃるのですから、必ず開いて下さいます。世の中の何かの選考試験のように、むつかしい問題を出して、出来ないものを落すのが目的ではありません。

私たちは一人々々信仰体験も違い、神様の知り方も違っていますが、その人でなければならない知り方をさせて下さいます。ですから、求めないでおいて、「神様が分かりません」と言っても見当違いです。切に主を求めるならば、朝の光のように必ずはっきりご自分を現し、冬の雨のように激しく、あるいは春の雨のようにしっとりと潤すように私たちに主を知らせて下さいます。

神様は、私たちが神様を知ることを一番喜ばれます。神様を知らせて頂いた私たちが喜び、それを神様も喜んで下さるという素晴らしいお約束です。

【生ける神を恐れる事が知識のもと】

◆箴言1章に、「主を恐れることは知識のはじめである」とあります。すなわち神様は確かに生きたもう方であって、いま私の前におられます———と認めることがすべての知恵のもとであると言われます。旧約と新約の関係は、まず主権者が主権を宣言されて、その上で救の道を立てられたと申しましたが、「いのちと信心（敬虔）とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかた（神様）を知る知識によるのである」(2ペテロ1章）とあります。

私は胸に手を当てると、いつも厳かな思いがします。私は心臓のためにペースメーカーを入れて、電池を入れ替えている訳ではありません。心臓の分解掃除をしたこともないし油をさしたこともありません。しかし心臓は何億回と打ち続け

ています。ですから神様が私を生かして下さっている事を疑うことは出来ません。

その上に神様の知恵を注いで下さるのです。先程のペテロの手紙には、「それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さった」とあります。また「それらのものによって、尊く大いなる約束がわたしたちに与えられている。それは、あなたがたが世にある欲のために滅びることを免がれ、神の性質にあずかる者となるためである」とあります。実に驚いたことです。人間はよく冗談に、「神様のような人だ」などと言いますが、本当に神様のご性質にあずかる者となり、神様が私の内にあって主人公となって下さるのです。

「神様が主人公となって下さる」などと言うと、全く主体性のない、人形のような生活かと言うと、そうでありません。自分というものがはっきりあります。しかし自分の主人がおられますから、そのお声に従い、御旨を伺います。こうして常に生きた交わりを持たせて頂くのです。

これは素晴らしい個人コーチということも出来るでしょう。スポーツの選手など、世界の一流の選手になると、個人コーチがついて寝食を共にして指導して世界のレコードに挑戦します。

それと同じように、イエス様が私たちの主人公となって、私たちの内に住み、共におられて助けて下さる———これは実に素晴らしい生涯です。

そのような素晴らしい宝を与えて下さいますが、そのためには私たちが自ら行動しなければなりません。それは頑張って何かをする意味ではなくて、神様が語って下さるときに、「私に語って下さいますか！では、あなたのおっしゃったとおりにして頂きとうござうます」と受け取ることです。それがないと、神様は投げて下さいません。野球でも捕手がかまえない所に投げると、球を逃してしまい、相手方が走って点数を取られてしまいます。ですから必ず相手が待っている所へ投げる訳です。それと同じように、私たちが「神様がそうおっしゃっても私は関係がありません」と言っている所へ投げられれば、せっかくイエス様の血によってあがなわれた尊い恵みが無駄になってしまいます。ですから神様は決してそう

いうことはなさいません。

◆もう一つ教えられたのは、「このほか別に救あることなし」（使徒行伝４章）と言われる点です。神様ははっきりおっしゃっているのですが、人間の目には、いろいろなものが魅力的に映ります。「神様の真理については、なかなか理解出来ない」と言っていても、偽り者の言うことには、「成るほどよく分かった。これは面白い」と引かれて行きます。本物によく似た偽者は最も危険です。

ではコロサイ人への手紙、最初に読んだ所のすぐ後を読みましょう。コロサイ２章8/23節（終り）まで朗読。コロサイの教会には異端が入り込んで来ました。これは純粋な福音に背いて分裂を起し、自分たちの仲間に引き込もうとして来る大変な働きです。

ユダヤ教的な律法主義、あるいはグノーシスと言われた異端など、ここに４つの異端が戒められています。一部ユダヤ教とグノーシスが入り交じって複雑な形になっております。

※８節、むなしいだましごとの哲学。要するに人間の学問で頭を喜ばせて、「成るほど分かった」と言うものに迷わされてはならないということです

※16節、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や安息日などについての言い伝え。それらは救とは関係がない

※18節、わざとらしい謙遜と天使礼拝。偽りの謙遜や、神と主イエス以外のものに対する礼拝

※ 21/23節、さわるな、味わうな、触れるな、などと言う規定（禁欲主義）です。

努力して立派な人になろうとすることは、多くの人の目に知恵のあるしわざのように見えますが、人が外から改良を企てても新しくなることは出来ません。ただ奥義であるイエス・キリストによって、私たちの命の元が変らなければなりません。私たちが自分で生きているのではなく、「神様の憐れみによって今生かされています」とならなければ、外から枠をはめ、戒めをどんなに叩き込んでも変わることは出来ません。一時的なメッキは出来るかも知れませんが、すぐ剥げて

しまいます。「だからあなたがたは、そういうものに決して迷わされないように」と警告されている訳です。

コロサイ2:3「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」―――それに対して前記のような様々なものが侵入しようとしています。ですからよくよく警戒しなければなりません―――左の標語「苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」―――これも同様な警告です。私たちは一筋にイエス様を知る方向に進めばよいのですが、私共の周囲にあまりに危険が大きいために、消極的なようですが、繰り返し警告されていると教えられました。

神様は、いっさいの宝が隠されている、このイエス・キリストを知るようにと求めておられます。そして、あしたの光のように必ず現そうとしておられるのですから、いよいよお言葉に耳を傾け、待ち望んで行きたいと願います。その時に神様がみ言葉に従って私たちの内に大きなわざを行って下さると信頼しています。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　(1991.1.2.10:00 聖会4)

第５回〈１９９１年1月2日、午後2時〉

私に倣う者になってほしい

（私のおる所におらせよう）
（聖書＝ペテロの第１の手紙第２章２１節）

【この人を見よ】 ７９

【異邦社会に生きる者の手引き書】 ７９

【七重の謙遜】 ８０

【倣うのは直接イエス様に】 ８０

【エリヤの賜物を受け継ぎたいなら】 ８１

【神様の右に座らせて下さる！】 ８２

【苦難をとおして全うされる栄光の道】 ８３

【白紙生涯を通して栄光を現される】 ８５

「善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(1ペテロ2:20/21)

【この人を見よ】

◆これは私たちのために残されたイエス様の模範です。ヨハネ19章、イエス様が捕えられた朝、総督ピラトは、イエス様を民衆の前に引き出したとき、「見よ、この人だ」と言いました。これはピラトの口から出た言葉ですが、神様は私たちに対して、「この人を見よ―――イエス・キリストこそあなたがたの模範である」と語っておられると教えられました。

イエス様は罪を知らない方であったのに、私たちのために苦しみを受け、ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねてご自分の身をささげられました。

「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」と首を垂れられた時に、私たちのあがないが完成されました。墓に葬られ、3日目に甦られたことによってあがないは保証され、動かないものとなりました。イエス様が私たちのために死んで下さった―――善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ばれたように、私たちもそうしなさいと勧められている訳です。

【異邦社会に生きる者の手引き書】

◆18節に「僕たる者」とありますが、私たちが神の僕としていかに歩むべきか、この前後に異邦人社会におけるクリスチャンの在り方が記されています。

※11節から、異邦人社会におけるクリスチャンの一般的在り方

※13節から、主権者との関係

※18節から、神の僕として異邦社会でいかに生きるべきか

※3章1節から、夫婦関係

※3章8節から、クリスチャン同士の関係

です。わが日本国は、殊に異邦人社会であって、神様を敬うことがありません。こういう中で私たちがいかに生きるべきか、イエス様のご生涯をとおして教えら

れています。

【七重の謙遜】

◆ピリピ２章6/11節、「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰するためである」

ここにはイエス様の謙遜なご生涯が具体的に書いてあります。

※神のかたち（本質の真の姿）である方が、神と等しくあることを固守すべき事とは思われなかった

※おのれをむなしくされた

※僕のかたちをとられた

※人間の姿になられた

※おのれを低くされた

※死に至るまで従順であられた

※十字架の死に至るまで従順であられた

です。ここまで従順に従われたイエス様を、神様は黄泉に捨ておかれず、ご自分の右に引き上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

【倣うのは直接イエス様に】

◆このイエス様の足跡に倣うならば、イエス様と同じように神様が報いて下さいます。

３章17節、「兄弟たちよ。どうか、わたしにならう者となってほしい。また、あなたがたの模範にされているわたしたちにならって歩く人たちに、目をとめなさい」とあります。パウロは自信過剰で、「わたしは絶対に間違いないから、わたしにならいなさい」と言っている訳ではなく、イエス様に倣うように言ってい

る訳です。パウロもイエス様に倣っています。パウロに倣って歩く人たちも、パウロに倣う訳ではなく、イエス様に倣っているのです。更にそのあとに従う私たちは、直接イエス様に倣うのです。人間的先輩から指導を受け継ぐには違いありませんが、倣うのは直接イエス様に倣うのです。

私たちの先輩のT先生の働きは非常に大きかったと言われます。ですからそれを慕う人たちがたくさんいて、「あの先生の時代は良かった、恵まれていた。何とかあの時のように、もう一度なりたいものだ」と言われます。しかしT先生はイエス様ではない訳で、あとに従う私たちもまた直接イエス様に目をとめて倣うべきです。

その点が間違うと、形だけ真似をしようとして、結局脇道にそれてしまいます。いつの時代も同じことで、パウロの時代もそうであったと思います。

◆旧約聖書、列王紀下２章に、エリヤとエリシャの記事があります。エリヤが召されて地上を去ろうとする時、エリシャと共に歩きながら、「わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい」と言うと、エリシャは「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」と言いました。「聖霊に満たされ、預言者としてあなたのあとを継ぎたい」と願った訳です。

ところがエリヤはすぐに返事をしませんでした。「あなたはむずかしい事を求める」と言いました。人間的に言うなら、死の淵までも従って来たエリシャですから、「あなたのほかにはない、あなたによろしく頼もう」と言う所でしょう。しかしエリヤはそう言わずに、「むずかしい事を求める」と言ったのです。それは自分が何かを持っていて、これを相手に渡せばよいというものではなかったからです。

信仰はあくまでも神様と個人との係わりですから、エリヤは「わたしが御霊に満たされ、使命を受けて立っているのは、神様から直接頂いたものであって、あなたがもしそうなりたいのなら、神様に目をとめなさい。わたしが何かを渡せばよいというものではない。そこで、あなたがもし、わたしが取られて、あなたを

離れるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見ないならば、そうならない」と言いました。

彼らが共にしばらく行くうちに、火の車と火の馬があらわれて、エリヤを囲み、エリヤはつむじ風に乗って天に上って行きました。エリシャはそれを見て、「わが父よ」と叫びましたがすぐに見えなくなりました。エリシャはエリヤの言葉のとおりに、彼が離れて行くのを見ましたから、エリシャは聖霊に満たされてエリヤの後継者となりました。

私たちは彼のように大預言者になる訳ではないとしても、神様の恵みの法則は変りません。人間が人間に何かを伝えることは出来ませんし、人から何かを貰うことも出来ません。一人々々が神様に目をとめ、倣って行く時、それぞれのために開いて下さった道筋に従って、賜物が注がれるのです。

イエス様は「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と言われました。私たちがイエス様に目をつけ、イエス様に倣って行く時、同じ恵みにあずかるのです。イエス様のお名前をとおして、「助け主、真理の御霊」が注がれて、すべての真理を悟らせて下さるのです。

◆私たちが、イエス様に直接倣い従って行く時、イエス様がお受けになった報いと同じ報いを受けます。

ピリピ２章９節に、「神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった」とありましたが、そのほかにも幾つかの記事があります。

ヨハネ14:2/3、「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」とあります。イエス様に従う者のために、イエス様は場所を用意して下さいます。それは「ご自分のおる所に私たちをおらせるためである」と言われます。

イエス様が、父なる神の御旨に従い、最後まで謙遜をもって従われた時、神様はご自分の右に引き上げられたように、私たちもイエス様のおられる所へ引き上げられます。まことに恐ろしいことですが、神様の右に座らせて頂けると言うのです。

ヘブル 1:3、「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである」とあります。

イエス様は、神様の御旨に従い尽くされ、使命を終えられました。それが罪のきよめのわざです。そしてイエス様は、「いと高き所にいます大能者の右に、座につかれた」とあります。私たちはイエス様と共にそこにおらせて頂けるのです。

２テモテ２章には、「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」とあります。私たちがイエス様と共に死に至るまで従って行くならば、イエス様が甦られた所で、私たちも甦りにあずかることが出来ます。これは聖徒パウロが切に求めたところでした。

彼はイエス様に従って苦難にあずかり、死の様と等しくなり、何とかして死人のうちからの復活に達したいと言いました。私たちが同じように従って行く時、イエス様の甦りの命にあずかることが出来る――これは大変素晴らしいことです。

◆大変素晴らしい道ですが、この道は決してなまやさしい道ではありません。何事もなく楽しく浮き浮きするような道ではなくて、いろいろな苦難があると記されています。しかし、そのあとに驚くべき栄光が与えられるのです。

ヨハネ 16:33、「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」とあります。これはイエス様が最後の晩餐の席でなさった説教の最後の部分です。イエス様はその時、悩みのうちにおられました。十字架が苦しいという意味ではなく、全く孤独になられていました。弟子たちもイエス様に従うことが出来ません。このすぐあとでは、ばらばら

になって逃げてしまいます。

「わたしをひとりだけ残す時がきた。しかし、わたしはひとりだけではない、父がわたしと一緒におられる―――あなたがたはわたしの話したことをよく覚えて、わたしのあとにならいなさい。あなたがたもまた、同じように世にあってなやみをとおらなければならない。しかし、わたしはすでに世に勝っている。わたしはあなたがたに何ものにも負けない勝利を与える」とここで約束されている訳です。

神様に従って永遠の命の恵みにあずかるのは、多くの苦難を経てであって、ピリピ1:29には、「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている」とあります。それによって、私たちは永遠の命にあずかることが出来る―――先輩たちが走った所もみなこの道であると語っておられる訳です。

使徒行伝14章22節、「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならない」と言われています。

私たちが、イエス様の足跡に倣って歩く時、神様から喜ばれます。神様は私たちを通してご自分のみ心を行われるのであって、クリスマスの夜、ユダヤの野で羊飼が聞いた御使の歌、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」のとおりです。

こういう話を聞くと、「これは大変だ。そんな苦難な中を乗り越えるなら、よほど覚悟しておかなければならない」と思われるかも知れませんが、それは必要ないことであって、私たちには信仰の導き手であり、完成者である方があります。そしてその方は、「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」と言われるからです。

私たちとしては、ただ従順に従って行くことで、あとは導いて下さる方が完成して下さいます。ですから信仰によってはっきりと感謝を申し上げる―――あかし会もそうですが―――そうして行くと、神様がその通りに実行して下さいます。お金を支払う時に、領収書を持って受け取りに来る人があります。そのようなも

ので、神様に対して先に感謝を申し上げると、その通りに報いて下さるのです。

ペテロ第一の手紙にも、苦難を通して全うされることが記されています（5章18節）。

聖書の記された目的は、「イエスは神の子キリストであると信じるためであり、またそう信じてイエスの名によって命を得るためである」とありますから、私たちがみ足のあとに倣うことを求め、あるいは求めようとするなら、必ず助け導いて下さいます。

◆今年、神様は「今は主のはたらかれる時です」とおっしゃいました。神様は聖会全体の主人公として私たちを導いて下さいます。神様のもとにどのような全体図が描かれているかは分かりません。私ははじめおぼろげながら教えられたとき、自分なりに絵をかきました。神様は、聖会が進むにつれて少しづつそれを訂正されています。私はその絵を机の上に置いて見ています。絵の中には筋道があり、最後にはすべてが、「いと高きところでは、神に栄光があるように」という栄光一色に塗りつぶされて行きます。素晴らしいことです。そのために私たち一同が用いられる———何と尊いことであろうかと感謝しています。

私たちはイエス様の足跡に倣らうように召されています。「善を行って苦しみを受ける」———イエス様に従って行くうちに、人から理解されない、気難しい主人（情けなき者）にも従わなければならないかも知れません。しかしイエス様は、自分を理解するどころか、妬み憎み陥れようとして錐で刺すようなことをして来る人たちに対しても、激しい言葉を出さず、神様に委ねて従いとおされました。

私たちがそのように従って行くと、私たちを助けて下さいます。私たちは何としてもその足跡に倣い、神様から大きな報いを受けると共に、神様の名があがめられるようにして頂きたいと願う者です。

いつも教えられるところですが、信仰は決してむつかしいことではないと思います。神様を敬い、尊ぶ時、神様がご自分のみ心を遂げられる———これは少しもむつかしい事ではありませんが、ただ自分を突っ張っていると従えません。苦

しい、むつかしい、失敗する、あるいは、逸れて行く、誘われる、などいろいろなことが起って来ます。

ですから、全く白紙になり、主によって生かされている者として、その足跡に倣って行く時、神様はその白紙にみこころを行い、素晴らしい栄光の姿を描いて下さいます。

その時にはどんなことがこの地上に起って来るか分かりませんが、私たちは小さくても、神様は力がありますから、大きなことを行って下さいます。ですから私たちは自分が小さいことも、弱いことも決して恐れることはいりません。大いに信仰の幕屋を張り広げてよいと思います。人間がただ大きなことを言うのは法螺吹きですが、神様を信頼して大きなことを望むのは、みこころにかなうことです。

「あなたこそ、どんなことでもお出来になる方です。あなたは全能者でいらっしゃいます」と告白して行くならば、神様は「そのとおり」とご自分の御旨を行われるにちがいありません。私は大きな期待をもって、今年を待ち望んで行きたいと願っている者です。ご一緒にお祈りしましょう。(1991.1.2.14:00 聖会５)

第６回〈1991年1月2日、午後7時〉

苦い根の源
（エジプトを慕う心）
（聖書＝申命記第２９章１８節）

【民族存立の基盤】　８９

【救は引き上げではなく落ち残り】　８９

【約束の国に入る備え】　８９

【苦い根は古い生活を慕う所から】　９１

【怖いもの見たさ】　９１

【エサウの俗悪】　９２

【軽んじる気持があればサッと奪われる】　９３

【恐らくは私を忘れるだろう】　９５

【神様との隙間がなければ苦い根は伸びられない】　９６

【安全の為に反復警告】　９７

【神様に対する深入りは徹底的に】　９８

【死んでいた者に栄光の務め！】　９９

「それゆえ、あなたがたのうちに、きょう、その心にわれわれの神、主を離れてそれらの国民の神々に行って仕える男や女、氏族や部族があってはならない。またあなたがたのうちに、毒草や、にがよもぎを生ずる根があってはならない」

（申命記29:18）

【民族存立の基盤】

◆今年与えられた左側の標語は、ヘブル人への手紙12章15節、「苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」ですが、冒頭の「苦い根」の元は、この申命記にあります。

イスラエル民族は 430年にわたってエジプトで奴隷生活を送っていました。神様は彼らの呻きを聞いて憐れみ、ご自分の僕モーセとアロンを遣わして、彼らを引き出されました。次々にエジプトに災が加えられ、一旦ひるんだパロが再び心を頑なにする度に、災が重くなって、遂に10番目には、エジプト中の初子という初子を殺されました。人間の初子は勿論、家畜の初子に至るまでみな打ち殺されましたから、エジプト中に大きな叫びが上がりました。その晩、イスラエルの民は、家の入り口の鴨居と柱に小羊の血を塗って、滅ぼす使に過ぎ越され、残されることによって救われました。それが「すぎこし」でした。

【救は引き上げではなく落ち残り】

◆救は、何かの中から引き上げられること、たとえば、溺れかかっている人が、そのままならば沈んでしまうところを、船から引き上げられて助かるというようなものではありません。イスラエルの民の救（私たちもそうですが）は、良いから引き上げられたのではなくて、全体が滅ぼされて落ちるべき時に、残される一一一これによって相対的に引き上げられたのです。こうしてイスラエルの民は救われ、その晩、神様の高らかな手によってエジプトから引き出されました。その後の壮年男子の計数から推測しますと、2-300 万という多数であったようです。

【約束の国に入る備え】

◆その後、40年間の荒野の旅を経て、約束のカナン一一一それは神様の約束された乳と蜜の流れる豊かな土地でした一一一に定着しました。

この申命記は、荒野において、「カナンの国に入ったならばどうすべきである

か」を教えられたものです。

また、申命記は、創世記から数えて５番目であって、ここまでを「モーセ５書」と言われます。それまでの４つの書物において各所で語られた律法を纏めて、繰り返しお話になっております。非常に素晴らしい書物です。

そして申命記の終りの方になりますと纏めがしてあります。27章は、神様と民との契約の更新です。28章は、従う者に対する祝福と、従わない者に対するのろいです。29章は、いよいよ契約に入らせようとして、最後の警告を与えられた所です。それがこの「苦い根から生ずる毒草やにがよもぎ」についての戒めです。

イスラエルの民はエジプトから出て来ましたが、まだ約束の国に入っていません。ですからかつての生涯（エジプト）から切り離され、今から入って行く土地（カナン）にもまだ触れていない、そこで40年の間に世代が変って行く訳で、その人たちにきちっと御旨を教えて特選の民とされた訳です。

28章には、祝福とのろいが対照してありますが、この29章には、のろいだけが記されています。それは「よく言っておくが、決してこののろいのようにならないように、わたしに背いて叱られることのないようにしなさい」と懇ろに戒められている訳です。

最も警戒されているのがこの16節からです。エジプトでどういう生活をしていたか、その後、諸民族の中をどのように通って来たか、そして彼らのうちに木や石、銀、金などで造った憎むべき偶像などがあるのを見、それに触れてきた訳です。そこで、「われわれの神を離れて、彼らの神々（考え方、生活習慣）を慕う者（個人で言えば心の中のある部分）があってはならない」と言われています。

偶像と言っても、形あるものばかりではありません。まことの神様を抜きにした生き方、考え方のすべてを指しています。そういう中で何世代も過ごして来た訳ですから、「それをきれいさっぱりと洗い流してわたしに従いなさい」と言われている訳です。「かつての神々を離れ、今後入って行く所の土地に満ちている神々を慕わず、このわたしに従いなさい」と厳しくお求めになった訳です。

◆「———毒草や、にがよもぎを生ずる根があってはならない」と言われてい

【苦い根は古い生活を慕う所から】

ます。「苦いものを生ずる根」は、古い生活を慕う所から起って来ます。人間は弱いもので、ちょっとした事にもすぐ深入りをします。聖書に「酒に酔うなかれ」（エペソ５章）とありますが、ある人は「それなら酔わないようにすれば飲んでもよいだろう」と飲むそうです。しかし酔って来ると自制心が外れて次第に深入りをして行き、最後には前後不覚になるまで飲むという事になります。ですから最初が肝心であって、ちょっとでも慕う気持があると、容易に引かれてしまいます。ですからそうならないように、「かつての生涯を慕う気持を全くなくしてしまいなさい」と言われている訳です。

【怖いもの見たさ】

◆箴言９章 17/18節に、「『盗んだ水は甘く、ひそかに食べるパンはうまい』と。しかしその人は、死の影がそこにあることを知らず、彼女の客は陰府の深みにおることを知らない」とあります。人間は誘惑に弱いばかりでなく、危険なものに近付きたいという欲望を持っています。「盗んだ水は甘い」というのですから、誰にも知られないでこっそり飲む水がおいしい、また同じように「ひそかに食べるパン」は特別な味がするという訳です。

13/16節には、愚かな女の誘惑について記されていますが、人は分かっていても深入りをします。死の影が付き纏い、陰府の深みにはまってしまう――最も恐ろしいのは、そんな所にいると気がつかない事です。

イソップ物語に、狐が罠に引っ掛かる話があるそうです。狐は大変利口で、人間が罠を仕掛けておいても、「ははあ、人間が罠をかけて捕まえようと思っているが、その手には乗らないぞ」と知らん顔をして通り過ぎるそうです。ところが罠に仕掛けてある油揚のおいしそうな匂いがして来るので、「近くを通るぐらいならいいだろう」と少し回り道をしてその罠の側を通ってみる。次には、「ちょっと匂いを嗅ぐぐらいならいいだろう」と匂いを嗅ぐ。「ちょっと嘗めるぐらいならよかろう」と嘗めているうちにたまらなくなって、「端のほうを少しかじるぐらいなら大丈夫だろう」とちょっとかじると、罠にかかって逃げられなくなるそうです。

私たちもこの話を笑えないのであって、危険と分かっていても引かれて行き、

遂にはそれに捕えられてしまう事がたくさんあります。ですから「それを慕うことがないように」と注意をされている訳です。

【エサウの俗悪】

◆その例として聖書が引いているのはエサウです。その箇所を読みましょう。創世記25章 24/34節、朗読。創世記には族長時代の歴史が記されており、物語として読んでも大変興味あるものです。アブラハムの子がイサクで、その子がヤコブとエサウです。ヤコブとエサウは双子ですが、何もかも違っていました。兄のエサウは体が赤くて、生れた時から全身が毛ごろものようであったのに対して、弟のヤコブは白くて滑らかでした。生れ出る時、弟ヤコブは兄のかかとをつかんでいたと記されています。

性質も生き方も違っていました。兄は野原に出て獣を取って来るのが上手でした。一方、弟は天幕にいて、家事の手伝いをします。ですから、母はヤコブが好きで、父はエサウが好きでした。

ところがある日、弟が例によってお母さんの手伝いをして豆を煮ていました。豆の匂いは大変おいしそうで腹にしみますから、兄が野から疲れて帰って来た時に、「それを食べさせてくれないか」と頼みました。ヤコブは「ではまずあなたの長子の特権をわたしに売りなさい」と言うと、エサウは「わたしは死にそうに腹がへっている。長子の特権が何になろうか」と言います。ヤコブは「それなら誓え」と言うと、「よし、神様の名によって誓う。わたしはこの弟にみんなやります」と誓いました。そこでヤコブは兄の求めたレンズ豆のあつもののほかに、パンを添えて食べさせました。兄は食べ終ると、「ああ、おいしかった」と立ち去ってしまいました。

これは何でもない兄弟のやり取りのようでしたが、神様の前には重大なことでした。この家庭は「アブラハム、イサク、ヤコブ」と言われるように、神様の祝福を受け継ぐ家系であって、兄のエサウがその権利を受け継ぐべきものでした。ところが彼はそれを軽んじました。つまり、「神様の祝福なんて、そんなものは大したことはない、俺はいらん」と考えた訳です。彼は「目に見えるもの」に注目していたのでしょうが、もっと大切なものがありましたた。神様は鏡のような

方で（詩篇18篇、参照）、エサウが神様（の祝福の権利）を軽んじましたから、神様もエサウを軽んじられました。行列の順番がちょっと繰り下がったというぐらいなら大した事はありませんが、彼は捨てられてしまいました。のちに、はっきりと宣告を受けた時に、彼は怒りましたが間に合いませんでした。エサウは自分が撒いた種を刈り取り、すべての祝福は弟に与えられました。

その出来事が27章に記されています。1/41節、朗読。これは非常に長い劇的な場面です。父イサクは目が見えなくなっていましたので、いぶかりながらも偽装した弟を兄エサウと間違え、祝福を祈ってしまいました。そのあと、本当の兄がやって来て祝福を求めました。確かに弟のやり方は悪かったのですが、かつて（25章において）エサウが家督の権を軽んじた結果が、自分の身に返って来た訳です。彼が「神様の祝福など大したことはない」と考えた信仰どおりになった訳です。

一方、弟のヤコブは、何としても兄の祝福を受けたいと考え、不正な手段に訴えましたが、その切なる願いに答えて逆転が起り、彼は願いどおりに祝福を受け継ぎました。

ヤコブという名前は「押し退ける」という意味だそうで、兄は怒って、「よくもヤコブと名付けたものだ。彼は２度までもわたしを押し退けた」と言い、「父ももう長いことはないであろう。父が死んだら弟を殺してやろう」と考えるようになりました。そこでヤコブは遠く母の郷里の地に逃れて20年を過ごすことになりました。

ヤコブは人間的にいうと問題はありましたが、神様の祝福を受け継ぎたいと切に願いましたから、これを軽んじたエサウから奪われて、彼に与えられました。ヘブル人への手紙12章を読むと、「エサウは不品行な俗悪な者であった」と書いてあります。神様の祝福を軽んじることは、俗悪であります。

◆神様の祝福を慕う気持がなくなると、エサウのように神様を軽んじることになりますが、そうすると悪魔からパッと奪われてしまいます。エサウは売り渡したのですが、軽んじる気持があると売らなくてもサッと逃げて行ってしまいます。

譬は適当でないかも知れませんが、真空パックをした缶詰に穴を開けますと、シュッと音がして空気が中に入ります。同じように私たちが神様の祝福を「何だ、そんなもの」という気持になると、ちょっと開いた穴からスッと空気が入って来るように、私たちの祝福はたちまち乗っ取られてしまうのです。

悪魔は、私たちが神様から頂いた尊い恵みをけなしたり、奪ったりします。ですから、しっかり目を覚ましていないと、すぐやられてしまいます。

悪魔のわざについては聖書のいろいろな所に記されていますが、創世記 2/3章に、エデンの園でアダムとエバが騙された事が記されています。そこでも、悪魔はソッと近付いて臭いボールを投げて来ます。それに対して曖昧なことを言っているとやられてしまいます。

最初に悪魔が言って来たことは、「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」ということです。エバは答えます、「そんなことはありません。私たちは園のどの木の実も食べることを許されていますが、ただ園の中央にある木（善悪を知る木）の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」と答えます。

彼女は悪いものと交わっているうちに、いらぬことを言いました。神様は「取って食べてはならない。それを取って食べるときっと死ぬ」とだけおっしゃったのですが、彼女は「触ってもいけない」とか、「死んだらいけないから」と曖昧な言葉を付け加えました。蛇はすぐ「いや、決して死にはしない。大丈夫なんだ。神様はなぜそんなことをおっしゃったかと言うと、お前たちが取って食べて神様のようになったら、神様が困られるから、それで禁じられたのだ。見てごらん、あのきれいなこと、おいしいぞ、賢くなるぞ、ほら食べてごらん」と誘惑しましたので、エバは遂にそれを取って食べ、夫にも与えました。

悪魔は２段階、３段階にわたって彼らを騙しました。彼らにすきがありました。神様に対するもっと真実な愛があるならば、彼らは決して騙されなかったでしょうが、たちまちやられてしまいました。

その他にも、悪魔のわざは各所に記されていますが、私たちのうちに神様を慕う心、神様と密着する姿勢が薄れて来ると、ほかのものが入って来ます。この世

の男女関係などでもそうでしょう。お互の愛が冷えて来ると、3角関係が起ったりします。しかし気持がいつも通じて密着しているならば、すきま風が入る余地はない訳で、私たちと神様の関係も同じです。

◆申命記8章 11/18節、朗読。ここに「あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう」とあります。

これは非常に大切な問題であり、私たちにとって恐ろしい所です。この申命記は、このあとカナンの国に入ってどう生活しなければならないかを教えられているものであって、それについては最も危ないことがある。はっきり言っておくが、「お前たちは本当に危ないのだ。恐らく馴れ侮ってわたしから離れて行く」と警告されている訳です。彼らは牧畜業ですから、牛や羊が増えると言われていますが、こんにちの日本で言えば、生活が安定し立派な家を建て、良い仕事についてお金が溜まった、子供も出来が良くてよい学校に入って心配がない———という訳でしょう。そうなって来た時に、「あなたがたの心はいつの間にか高ぶって、神様を忘れるであろう。だからそうならないようにしなさい」と言われている訳です。

「わたしはあなたがたをエジプトの奴隷生活から引き出してここまで来た。そして今後あなたがたを約束の豊かなカナンの国に入れるのだから、豊かになったからと言って、決してそうならないように」———そこで 17/18節に、「あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言ってはならない。あなたはあなたの神、主を覚えなければならない。主はあなたの先祖たちに誓われた契約を今日のように行うために、あなたに富を得る力を与えられるからである」と言われています。

◆出エジプト記13章には、神様がイスラエルの民をエジプトから引き出された

あと、この事を記念して、「これを、手につけて、しるしとし、目の間に置いて記念とし、主の律法をあなたの口に置かなければならない」と命じておられます。

手は自分の体の中で最も良く見る所です。また人に会って顔を見ると一番良く見えるのは目ですから、（お互いに）目と目の間にも書いておく。

また人間は物を食べるにも、話すにも口を使います。そこで口で神様をほめたたえる——「わたしはエジプトで滅びるばかりの民であった。しかし神様が引き出してこんにちまで導いて下さった」と、その事を決して忘れないようにと言われています。

イスラエルの民に対する神の国の憲法とも言うべき「十戒」の前文に、「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」と記されています。

（日本国憲法の前文について——省略）

私たちもまた、罪の中で滅びるべき筈の者でした。霊においても肉においてもそうです。イエス様が十字架にかかって私の罪を背負って下さったから、私は今生かされています。考えてみればあの病気も、この病気も、あの事故も、この事故も、たまたま運が良くて助かったのではないのです。癒されない筈の病気を憐れみをもって癒して下さいました。ガチャンとぶつかって死ぬべきところを、間一髪で免れたのでした。その事を決して忘れないならば、私たちは神様との間が冷たくなり、気持が離れて行くようなことはありません。離れなければ悪魔が攻撃をしかけて来る余地はありません。

ピッタリ密着したものはナイフを差し込もうとしても入りませんし、たとえ捏ねても、なかなか剥がれません。もし幾らかでも隙間があれば差し込んで捏ねると剥がれてしまいます。ですから、神様との間に気持が通じて密着している状態であれば、苦い根が生え入り込むすきはなくなります。このことは消極的な話のようですが、私共の周囲にあまりに危険が多いので、神様はよくよくこれを警戒させられていると教えられたのです。

◆ピリピ3章 1/2節、「最後に、わたしの兄弟たちよ。主にあって喜びなさい。

さきに書いたのと同じことをここで繰り返すが、それは、わたしには煩わしいことではなく、あなたがたには安全なことになる。あの犬どもを警戒しなさい。悪い働き人たちを警戒しなさい。肉に割礼の傷をつけている人たちを警戒しなさい」とあります。

これは悪い働き人に関する警告ですが、神様は私たちに対して、何度も何度も繰り返されることを、「少しも煩わしいと思われない」と言われます。これは愛の故です。たいがいの人は、「何度同じことを言わせるか。人の言う事をちゃんと聞け。知らんぞ」などと言いますが、神様は私たちに対して何度も何度も言って下さるのです。なかなか言ったことが分からない、しかもすぐ忘れるような私たちの安全を守るために、「苦い根がはえ出て恐るべき滅びに落ちないように」と繰り返し警告して下さいます。

私たちの周囲に、様々な苦いものが満ちている時代に、繰り返し警告しておられるのですから、よくよく警戒して、神様に対する心が冷めないようにして、いつも密着していたいと思います。

それにはいつも神様とお話（お祈り）をすることです。心が冷えると気持も離れます。お祈りもだんだんしなくなります。すると危険です。「もうこんなになってしまったから教会に行かれない」とか、「こんな冷たい気持で教会に行っても偽善者になるから」などと理屈をつけて教会を離れるようになります。

しかしどれ程離れたとしても、気付いて帰って来るならば必ず招いて下さいます。放蕩息子がどん底まで落ちて目が覚めた時、お父さんは走り出て抱きかかえて迎えました。神様はそんな方です。

「イエス・キリストの血は、すべての罪からわたしたちをきよめて下さる」とあります。どれ程離れたとしても、帰りさえすれば許して下さるのですが、神様の伸べて下さる手を拒んで、「もう十字架なんて私と関係がない」と言ってしまうと救われる道がありません。僅かな段差でコトンと転んだとしても、それで終りになってしまいます。

年取ってから躓いて倒れ、骨折して寝付いてしまう人がありますが、これは老人に限りません。私たちがちょっと躓いても、その時、神様に密着して十字架に

信頼していないならば、すぐ悪魔がやって来て、「そら見ろ、お前は大体そんな人間なのだ。お前は偉そうなことを言っているが、お前なんか救われない」と悪魔がグッと神様から引き離してしまいます。すると永久に帰れなくなってしまいます。そういう人は多いものです。

私たちと一緒にバプテスマを受けた人は9人でしたが、その中でも離れたまま帰って来ない人が何人かあります。

せっかく十字架の血をもって買い取った魂が、落ちて行くことに神様は耐えられない方です。「帰れ帰れ」と招いていらっしゃいます。ですから私たちは繰り返し招かれているお言葉に心をとめて、常に神様に密着している者でありたいと願います。

【神様に対する深入りは徹底的に】

◆申命記 29:18、「あなたがたのうちに、きょう、その心にわれわれの神、主を離れてそれらの国民の神々に行って仕える男や女、氏族や部族があってはならない。あなたがたのうちに、毒草や、にがよもぎを生ずる根があってはならない」———私たちの心に慕う気持があればサッと引っ張って行かれます。私たちが知らない間に毒草の種を撒かれます。雑草とは不思議なもので、屋根の上にごみが溜まって少し土が出来ると、誰も種を撒かないのに雑草が生えます。毒草はそんなものです。

私たちがちょっと心をゆるす、あるいは昔を慕う気持があると、すぐ雑草が生えます。世の中の人のやっている事を見て、「面白そうだな。神様、神様と言って、手ばかり洗うような生活をしてもつまらない」と思っていると、「そう、そう、そのとおりだ、来てごらんなさい、面白いよ」とサッと引っ張って行ってくれます。自分から出て行かなくても、ちょっと心を向け、あるいはちょっと開くとサッと引っ張って行きます。それが悪魔のわざです。そうすると、毒草やにがよもぎが生じます。それは勢いよく成長してたくさんの実を結びます。その種が落ちると更に激しく増え広がって、その人の生涯はすっかりだいなしになってしまいます。ですから原点が大切です。

イスラエルの民はしばしばエジプトを慕って罪を犯しましたが、実際は慕うほ

ど良いことはなかったのです。「何でも食べられた」などはとんでもないことで、やっと生きられるだけの惨めな奴隷でした。ところが荒野に来てちょっと苦しいことがあると、「ああ、あの時は良かった、肉鍋のそばに座っていた」などと言っています。人間は勝手なもので昔のことをすぐそんなふうに考えるものです。

しかし私たちはエジプトを決して慕わないことです。かつての罪の生涯に断じて帰ってはなりません。神様に密着して生きる以外に、私たちの生きる道はないのですから、神様に心をとめ、姿勢をはっきりして密着する生涯でありたいと思います。それは神様を敬い、集会に出席し、神様に仕えるというだけではなくて、生涯を全く神様にお任せして行く———そうするなら神様も私たちに密着して下さいます。

それは何よりも安全な生涯です。コマが勢いよく回っていると、何もかも跳ね飛ばしてしまいますが、神様に密着する生涯はそれと同じで、信仰から信仰にぐんぐん進ませて下さいます。その時は悪魔も手出しをすることが出来ません。

イエス様はバプテスマを受けられたのち、荒野で悪魔に試みられました。その時にイエス様は悪魔が何と言って来ても、神様のお言葉に信頼して動かれませんでしたから、悪魔はとうとう逃げ出して、代りに御使が来てイエス様に仕えたと書いてあります。

ですから、私たちは神様の前にはっきりしたいと思います。他のことにはあまり深入りしては危険ですが、神様に対する深入りは徹底的にしたらよいと思います。そうすると、神様は私たちに対してどんなに大きなことをして下さるか分かりません。それは自分一人のことにとどまらず、私たちの周囲にも、あるいはこの世界にも時代にも、神様の大きなお救いが及ぶでしょう。そのために私たちをお用いになるかも知れません。素晴らしいことではありませんか！

◆世の人は、自分のことだけ考えて生きています。私も勿論そうでした。しかしたくさんの人を生かすことが出来、神様の御用をすることが出来るならば、こんな尊いことはありません。僅かでも他人に傷を負わせたり、よその器物を壊したら、すぐ弁償しなければなりません。しかし人を生かし、あるいは望みを与え、

命を与え、死を恐れない生涯に導く———罪がゆるされて神様から喜ばれる生涯に導くことは、何と栄光に富んだ生涯でしょうか。

モーセはシナイ山で神様から十戒を与えらたあと、顔の皮が光っていたために、民はモーセの顔を見るのを恐れ、「モーセさん、顔にベールをかけて下さい」と頼んだと書いてあります。

十戒は人を生かすものではなく、むしろ人を殺す定めであったと言われます。十戒には「……しなければならない」という事が書いてあり、私たち人間は完全でありませんから、「しまった」と罪を犯すと、「御免なさい」と規定の献げ物をささげて罪を許して頂く———十戒は罪の自覚を与えるためのものです。

モーセはそのような死の律法を頂いたのに顔が輝いていたとするならば、人を生かす命の律法、つまりイエス・キリストの十字架の福音を伝えて人を生かし、「あなたはイエス・キリストを信じたから罪が許されました」と天国の鍵を開く務は何と尊い仕事でしょうか。「義を宣言する務ははるかに栄光に満ちたものである」と書いてあります(2コリトン3章)。

世の人は「人間一人生きて行くことはなかなか大変だ」と言います。あるいは「人並みに生きられたらまあよしとしよう」とやっと生きる人は多いものですが、私たちはそうではありません。生き方をはっきりとして、神様にピッタリ密着して行くならば、栄光に満ちた尊い生涯を送ることが出来るのです。これは何と素晴らしいことでしょうか。

神様は今年、「今は主のはたらかれる時です」と宣言して下さいました。主のはたらかれる時とは、神様が招いて下さる時であると思います。私たちはただ気持が少し晴れて来たとか、体が健康になったというだけで止まるものではありません。神様は私たちの上に全く新しい事を行い、多くの人の救のもととしようと考えておられるのです。

そのために神様は最も危険な「苦い根」を取り除こうとして、私たちに厳重な警告を与えて下さいました。私共はエジプトを慕うことなく、神様に密着し、「苦い根」ではなくて、むしろ素晴らしい「義の種」を育てて頂きたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　(1991.1.2.19:00　聖会6)

第７回〈１９９１年１月３日、午前１０時〉

苦い根の果実
（自ら清くなるように努めよ）
（聖書＝ヘブル人への手紙第１２章１５節）

【真理のひながた】　１０３
【信仰の導き手、完成者】　１０４
【弱い者を正しく歩ませるために】　１０５
【苦い根のはえる所】　１０５
【神様は悪魔をも支配される】　１０７
【栽培植物と雑草の力関係】　１０８
【悪の根の例（金銭）】　１０９
【エサウ（の子孫）の末路】　１１０
【罪も義もそれぞれ一粒から】　１１１
【清さと汚れの伝播方向】　１１１
【神様にご迷惑はかけていない？】　１１２
【小声の感謝は悪魔の標的】　１１３
【優しい言葉を厳しく聞く】　１１３
【繰り返し語られている間に】　１１４

「自らきよくなるように努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない。気をつけて、神の恵みからもれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」（ヘブル12:15）

◆ヘブル人への手紙は、迫害の中にあるクリスチャンに対して、正しい信仰を勧められた手紙であって、旧約時代の会見の幕屋における様々な献げ物や儀式が、イエス様によって完成された真理のひながたである事を示しています。

ヘブル10章1節に、「いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではない」とあります。そこで真理の影と光について幾つか例示します。

＜旧約＞	＜新約＞
幕屋に仕える者 モーセ（アロン）	幕屋を治める者 イエス・キリスト
地上の幕屋（45㍍×22㍍）	天の幕屋
レビ系の大祭司	とこしえの王（メルキゼデク）系の大祭司キリスト
次々に死んでは立てられる祭司	永遠の大祭司キリスト
動物の血によるきよめ	神の小羊キリストの血によるきよめ
罪を犯した度にあがないの供え物を献げなければならない	イエス・キリストがひと度献げられ永遠のあがないがなし遂げられた
肉体や器物（の外面）を清めた	良心までも清めた
大祭司が年に一度自分と民のために献げ物を携えて至聖所に入った	キリストの肉体なる幕を通して開かれた新しい生きた道により常に至聖所に入り得る

このような大祭司が私たちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられるという事が述べられていることの要点です。

◆では実際にクリスチャンとして歩むためには、どうしたら良いかを教えるために、まず11章において、「信仰とはなにものであるか」を示しておられます。そして、信仰のゆえに賞賛された先輩たちの模範がたくさん書いてあります。アベルからはじまって、エノク、ノア、アブラハム、サラ、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセーーーなどそれぞれは短い文章ですが、私たちの模範とされています。

12章になっていよいよ、「このような多くの証人に囲まれているのだから、わたしたちの馳せ場を走り抜こうではないか」と勧められています。しかし体を打ち叩いて、「さあ、頑張って行け」と言われるのではなく、信仰の導き手であり、完成者であるイエス様がおられて、私たちと共に（先に）走って下さいます。一流のスポーツ選手になると、有能な個人コーチがついて寝食を共にして記録に挑戦します。そのようにイエス様は私たちの魂の個人コーチとして幸いな指導をして下さいます。

人間のコーチの場合、同じスポーツ（種目）の経験者には違いありませんが、今は勿論、そんな力はないでしょう。しかし私たちのコーチであるイエス様は、いま私たちの先頭に立って下さる方です。そして私たちに「ついて来なさい」と言って下さいます。そのことは２節の後半から書いてあります。

イエス様は、「自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍ばれた」とあります。人間的に見るならば、イエス様は無残になぶり殺されたようですが、神様は大きな報いを与えられました。イエス様は陰府から引き上げられ神様の右に座するに至ったと書いてあります。イエス様は私たちを導いてその足跡に倣わせて下さいます。

ある人が、「してみせて、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かぬ」と言ったそうですが、指導には、まず自分がやってみせることが第１です。イエス様はご自分の生涯をもって私たちに模範を示して下さいました。そしてそれに倣った人たちの記録がたくさんあり、「イエス様に倣って歩く人たちに目をとめなさい」と言われています。私たちは孤独で走っているのではなくて、素晴らしい内外の応援者に囲まれ、助けられ導かれて走っている訳です。

【弱い者を正しく歩ませるために】

◆走り、あるいは歩くことについていろいろと戒められていますが、まず神様が私たちに対して訓練を与えられるということです。諺に「可愛い子には旅をさせよ」と言いますが、愛するからと言ってチヤホヤしていると逞しく育ちませんから、よそに出していろいろな苦労をなめさせるという訳です。神様は私たちの霊のまことの父として、愛するが故に訓練を与えて下さいます。箴言13章に、「むちを加えない者はその子を憎むのである。子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる」とあります。そのように神様は私たちを愛するがゆえに、しきりに鞭をあてて下さいます。これは後に至って平安な義の実を結ばせるためです。

その結果、私たちは生涯を清く守られます。人間は弱いもので、苦難がなければのんびりしてしまって道を踏みはずします。また何かに引かれて深入りをしてとらわれます。ですから神様は私たちに正しい道を歩かせるために、訓練を与え、「自らきよくなるように努めなさい」と鞭を加えられます。その場合、「嫌だ、痛い」と逃げるようではどうにもなりませんが、お父さんの愛を知ってその訓練を受けるようになると、子供は成長します。

そのようにして、清くならなければ主を見ることは出来ません。見ることが出来なければ当然そこに行くことも出来ませんし、入ることも出来ません。神様の恵みを受けることは出来ません。

そういう中で私たちに一つの大きな危険があると言われます。それは「苦い根」です。これがはえて来ると、自分自身を悩まし、さらに多くの人が汚されるようになる――だから決してそうならないようにと言われています。

そのあとには、天のまことの宮について、また天からの声を拒まないようにとの注意があります。

【苦い根のはえる所】

◆この「苦い根」はどこから出て来るか、その事が申命記に記されています。

申命記29章 16/20節、朗読。申命記はイスラエルの民が、約束の国に入る前、「今から約束の国にはいった時にはどうしたら良いのか」について懇ろに戒められている書物です。これはこんにち私たちが、聖霊に満たされ神様と共に生きるにはどうすべきかを教えて下さる大切な書物です。

ここで「苦い根」の元———どうしてそんなものが起るのかが記されています。私たちが畑に花を作ったり、作物を植えたりしますと、すぐ雑草がはびこります。種を蒔く訳でもないのに、どこから来るのか分かりません。しかも栽培植物よりも強くて、肥料がなくてもどんどん育ってたくさん実を結びます。

そのように私たちの魂の畑に、毒草やにがよもぎがはびこらないようにと戒められている訳ですが、どこから来るのか、ここにヒントがあります。

イスラエルの民はエジプトから出て来ました。その国には、金銀木石の偶像がたくさんありました。形あるものばかりでなく、神様抜きにしたその生き方、考え方もまた偶像です。彼らはその中に長い間暮らして来ました。そこで、それに帰って行って仕える男女、氏族、部族があってはならない———エジプト時代のことを慕う気持があると苦い根がはえて来るのです。

イスラエルの民は荒野を40年間歩む間に、水が乏しかったり、食べ物が乏しかったりした時に、彼らはしばしば、「ああ、われわれはエジプトにいた時のほうが良かった。あそこにいたら西瓜もニラもキュウリも、何でも食べることが出来たし、肉鍋のそばに座って飽きるまで食べることが出来た。それなのに今はこんなもの（マナ）しか無い。水もやっとだ」と言いました。マナとは、毎朝露が乾く時、野原に小さな鱗のようなものがたくさんに出来て、それを掻き集めて臼でつく、あるいは煮て食べる———そのようなものでした。彼らは「こんなものしかない、ああ肉が食べたい」と言いましたから、神様はうずらを降らせて彼らを肉に飽かせ、「欲心の墓」という所に多くの人が葬られたこともありました。

そのようにイスラエルは、「昔は良かった」と盛んに言いましたが、本当は良くなかったのです。最低生活ギリギリの奴隷でした。牛馬のように使われ、食べるものもろくろく与えられない、そういう中でやっと生きてきたのに、それを振り返ると、「肉鍋のそばに座っていた」などと言います。人間は不思議なもので、現状に不満を持つと、昔は良かったと錯覚するようです。「昔を今になすよしもがな」という歌がありますが、それが危ないのです。昔の事を言ってもどうにもならない、将来のことを言えば自分自身がどうなるか分からない、今だけが私たちの生きる時です。神様もまた私たちの「今」について責任を持って下さいます。

今年の標語に、「今は主のはたらかれる時です」とあったとおりです。神様は確かに、アルパでありオメガであって全地の支配者ですが、今ここで私たちに対して働いて下さる方です。

神様は、「出て来た所のエジプトを慕うのでもない。今後入って行くカナンの偶像を拝することもいけない。今ここで主であるわたしの声に従い、わたしを神としなさい」と厳しく命じられたのです。しかしイスラエルは過去の生活を慕ってエジプトにいつも心が向きます。極端な場合、「こんなモーセやアロンを頼っていてもはじまらないから、新しい指導者を立てて皆でエジプトに帰ろうではないか」と言ったこともありました。神様は、「それがいけない。それがあると毒草やにがよもぎを生ずるのであって、そこからいろいろなものがはびこって来る」と言われたのです。

【神様は悪魔をも支配される】

◆悪魔はこの世の支配者であって非常に強力なものです。私たちを神様から引き離し、自分の方に引き摺り込んで滅ぼそうとして働いて来ます。しかしこれも神様のご支配に逆らうことは出来ません。逆らおうとしても、神様が最後の決定を下されると、これを越えることは許されません。

ヨブ記 1/2章を見ると、悪魔がヨブを訴えて、「神様、ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼とその家およびその所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」と言って、彼の所有物を撃つことを許されました。しかし神様はそれに枠をはめられました。「彼のすべての所有物をあなたの手にまかせるが、ただその身に手をつけてはならない」と。

そこでヨブの持ち物は全部なくなりました。彼らの財産は家畜が主ですが、それが敵に奪われ、天災によって失われました。10人の子供が集まっていた家は竜巻で潰れて一度に死にました。ヨブは自分の体以外のものは全部失いました。すなわち、悪魔は彼の身に手をつけることは出来ませんでした。それは神様のおっ

しゃったとおりです。しかしそうなった時にもヨブは決して神様に対してつぶやきませんでした。

悪魔がまたやって来ましたから、神様は「あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うしたではないか」と言われますと、サタンはまた彼を訴えました。「いや、彼らにはまだ健康があります。また働けば何とかなると思っているからあんな事を言っていますが、健康を奪ってごらんなさい。必ずあなたに向かってのろうでしょう」と言います。神様はまた悪魔に条件をつけられました。「彼はあなたの手にある。ただ彼の命に触るようなことをしてはならない」と言われました。悪魔はヨブをひどい病気にしましたが、ヨブの命は守られました。

悪魔の力は今もこの地上に強く働いています。しかし神様はこれをも支配してとどめることが出来る方です。

【栽培植物と雑草の力関係】

◆悪魔の力は非常に強く、しかも執拗に絶えず働いて来ます。ですから私たちが、「悪魔さん、ちょっとあなたの所は面白ろそうだから行きたいと思います」と言わなくても、ちょっと心に思うだけで、サッと引っ張ってくれます。丁度人間のうちに罪の思いが走ると、やがてそれが言葉となり、実行行為となるようなものです。私たちの心にチラッとエジプトを慕う心が起ると、何の努力をしなくても、悪魔はサッとエジプトへ戻してしまいます。ですから、「そうならないように、あくまでも私を神とし、私に心を向け、私に密着しているように」と警戒されている訳です。

苦い根がはえると、それからいろいろなものが出て来ます。種を土の中に埋めると、最初に出るものは根です。その次に上に芽が伸びて行きます。そして成長して実を結びます。その時は一粒だけ実を結ぶことはない訳で、たくさんの実を結びます。良いものがたくさんならよいのですが、苦い種が実を結ぶと、毒草やにがよもぎがたくさん出て来て、たちまちのうちにはびこり、良いものを飲み尽くしてしまいます。栽培植物と雑草の力関係はそんなものです。ですから「決してそうならないように」ときびしく警戒しておられます。

◆ヘブル 12:15、「気をつけて、神の恵みからもれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」とあります。先程、申命記29章には、どこから苦い根が来るかを示されていましたが、ここでは「その根がはえ出て成長し、実を結ぶと、人々を悩ます」と記されています。

悩ますと言っても、どういう悩まし方があるか。悪の根の１例として、「金銭を愛する」ということがあります。１テモテ６章に、「金銭を愛することは、すべての悪の根である」とあります。これはお金を持っていてはいけない、お金儲けしてはいけないという意味ではありません。お金を活かして用い増やすことは大いに結構、また溜めることも結構ですが、それを偶像として仕えるならば悪の根となります。お金が一人歩きをはじめますと、とんでもない所に引き回されてしまいます。しかし大いに儲け、大いに溜めたものを、主の御用のために用いて頂くならば、お金が生きる訳です。すべての賜物を神様から預かっているのはそのためですから。

ルカ16章に、「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい」と言われています。そうするならば、神様の前に立った時に喜び迎えられるとあります。

これに反して悪の根である金銭がはびこって実を結ぶとどうなるか、「富はこれをたくわえるその持ち主に害を及ぼす」（伝道の書５章）とあります。また「金銭を好む者は金銭をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これもまた空である」と同じ章にあります。「お金がほしいから」と一生懸命に働いてお金が儲かったとします。それで幸福かというと、その人は満足できないと言うのです。我々日本人は、一生懸命に働いて物を作り、お金を溜め、贅沢をしていますが、いくら求めても満足することは出来ません。もっと刺激の強いもの、もっと大きなもの、もっともっとと言っていますと、よそから反対が起ったり、自然環境からしっぺ返しをされたりします。神様の手を越えて人間が貪ると、大きな悩みに会います。「あなたがたを悩ます」と言われるのはそういうことでしょう。

ソロモン王はこれらのことを３千年も昔に実験をしました。彼は王の権力と富を用いて、やってやってやり尽くした結果、「みな空であって風を捕えるようであった。その中に人の生き甲斐はない。人間は神様を恐れ敬いお言葉に従うのが本分であって、それ以外に生きる道はない」と言っています。もし人間が本分を尽くすことをしなければ、自分ばかりではなく他人をも汚染してしまいます。

この年末でしたか年始でしたか、日本の子供たちに対してアンケートしたところ、外国の子供に比べて将来に夢を持っている子供が非常に少ないという事でした。外国の子供は、物質的に貧しくても、「私は将来こんな働きをする」と希望を持っているのに対して、日本の子供は、「俺はもう駄目だ。どうせ偏差値が駄目だから自分は駄目」と早くから投げ出していて、全く希望を持っていないという事でした。確かにこれまで日本人はお金第１、品物第１で生きて来た結果、いま自分が悩み、よその人を悩ませ、自分の子供の世代までも毒してしまった――今後は長い苦悩を刈り取らなければならないのではないかと思いました。

【エサウ（の子孫）の末路】

◆ヘブル 12:16に、「一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい」とあります。このことは創世記25章、および27章に記されている、家督相続の事件です。

イサクは60歳になって始めて子供を持ちましたが、それは双子でした。兄がエサウ、弟がヤコブです。兄は神様の祝福の権利を軽んじ捨てられました。これは彼の「罪の根」であって、この世的な肉の満足を求めて神様を軽んじたのです。その後の時代になって、エサウの子孫は、神様に逆らう者として滅ぼされます。彼はその時も、後も大きな報いを刈り取った訳です。

そういう例を見る時、私たちは自らを清く保ち、神様の恵みから漏れることのないように努めなければならないと思います。物事が大きく波及して来る時、その始まりは必ず小さなものです。大きな火事もマッチ一本から始まると言われますが、すべてそうではないでしょうか。そのことについて読みましょう。

◆ロマ５章 18/21節、朗読。ここに「このようなわけで、ひとりの罪過によっ

【罪も義もそれぞれ一粒から】

てすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである」とあります。

はじめの人アダムが、エバと共に罪を犯し、その結果その子、またその子と次々に罪の性質を持って生れて来ました。そして彼らは悪から悪へ罪に深入りをして行きました。しかしイエス様ひとりの義なる行為―――つまりイエス様が私たちのすべての罪を負うて下さったことによって、命を得させる義がすべての人に及びました。

私たちはイエス様を信じて罪の生活から救われ清い者となり、それが多くの人に伝わって行きます。イエス様は最後に弟子たちに向かって、「全世界をめぐって、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」と言われましたが、その時の僅かな人数の働きから始まって、こんにちここまで福音が宣べ伝えられ拡大し、浸透して来ました。私たちはイエス様の恵みによって生かされ、天国の恵みにあずかっています。

ですから罪の結果がひとりのアダムから広がって来たように、義の結果もイエス様ひとりから私たちの所に及ぼされています。義の方が強く、罪を飲み尽くして私たちを変えてしまいました。

私たちが罪の根をもって、それをはびこらせるならば、自分ばかりではなく多くの人を汚してしまいます。しかし幸いなことに、私たちはひとりの義なる方イエス様によって、ことごとく救い清められ、いま神様の子供とされた訳です。

【清さと汚れの伝播方向】

◆罪と義のお互の関係について。罪と義の伝わる方向についてハガイ書に記されているところがあります。

ハガイ２章 10/17節、朗読。「『人がその衣服のそすで聖なる肉を運んで行き、そのすそがもし、パンまたはあつもの、または酒、またはどんな食物にでもさわったなら、それらは聖なるものとなるか』と。祭司たちは『ならない』と答えた。ハガイはまた言った、『もし、死体によって汚れた人が、これらの一つにさわったなら、それは汚れるか』。祭司たちは『汚れる』と答えた」とあります。

神様はハガイをとおして質問されました。「祭司たちよ、祭服のすそで聖なる

肉を包んで運び、そのあとそのすそがもし、パン、あつもの、酒、油、またはどんな食物にでもさわったなら、それらは聖なるものとなるか」と。祭司たちは「ならない」と答えました。「では、もうひとつ尋ねるが、衣服のすそが死体で汚れたとする。その着物をもって先程のいろいろな食物にさわったとしたらどうか」と。祭司たちは「その場合は汚れます」と言いました。神様は「確かにそのとおりである」と言われています。

清さは移って行かない、しかし汚れはスッと移動するということです。罪の根もそうでした。イスラエルが清くなったからと言って、エジプトの国が清くはなりません。しかし彼らの偶像や考え方がイスラエルに入って来ると、その場合は汚されます。ですから私たちは余程用心しなければならないのです。

しかしイエス様のあがないはその法則を乗り越えて下さいました。イエス様の義なる行為―――ただ一度の完全なあがないによって、私たちは全く清められて新たに生かされました。イエス様の救はそのような素晴らしいものです。

【神様にご迷惑はかけていない?】

◆エサウはあるいは言うかも知れません。「汚れ汚れと言うが、私は権利を放棄しただけで神様にご迷惑はかけていない」と。私たちもそうです。「私は別に良いとは思いませんが、神様にご迷惑をかけた訳じゃありません。自分が受けないというだけですから」と思いますが、ところがそうではありません。私たちが神様の恵みをいたずらにする―――恵まれるべき者が落ちて行くならば、神様は大変嘆かれます。私たちは聖霊の宮です(1コリント6章)。教会がイエス様の体であるように、私たちそれぞれは教会の構成分子として、神様の宮であり、聖霊の宮です。ですからそれを汚すことは決して許されません。

「私はこんな者です」と思いますが、神様が御覧になると、いずれも尊い聖霊の宮であって、神様ご自身を私たちに注いで生かして下さっているのです。それを私たちが汚してしまうことは、神様のものを汚す訳で、これは許されません。1コリント3章には、「神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう」とあります。ですからそういう事にならないように、常に気をつけて神様の恵みからもれないように、そのために絶えず神様に密着して、悪魔のつけいるすきが

ないようにしたいと願います。

◆私たちが信仰を持ったならば、感謝してグッと踏み出して行きます。すると神様が「あなたの信じたとおりになるように」と確認して下さいます。こちらがもし曖昧にしておくと、たとえば「感謝は感謝ですが、小さい声で感謝します——感謝したことにしておきましょう」などと言っていると、悪魔が「なに、お前ぐずぐず言っているが、はっきりしてないのだろう。神様もお前のことはまだはっきりしておられないのだぞ」と言って騙してきます。エバを騙した時のように、悪魔は狡猾です。

【小声の感謝は悪魔の標的】

ヘブル12章に、「あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない」と言われていましたが、イエス様はゲッセマネの園でお祈りなさる時、血のしたたりのように汗を流して真剣に祈られました。しかも同じ言葉で３度祈られたと記されています。私たちは神様の前になかなかそうしたはっきりした態度を表明しないのではないでしょうか。お祈りは声の大小や上手下手ではありませんが、気持をはっきり神様の前に出すと、神様もはっきりして下さいます。神様は鏡のような方です（詩篇18篇、参照）。

いつの頃でしたか、お祈りのことをいろいろと申し上げた時期がありましたが、どのような言葉が良いとか悪いとか言う問題ではなくて、自分の気持を神様の前に出して頂きたいということです。そのためにもしお祈りがしにくいとか、声が出にくいのであれば、「こうこうしたらどうでしょうか」と提案をしている訳です。神様がもし提案なさるならば、それは私たちに対する至上命令であって、詩篇81篇に「あなたがたがわたしに聞き従うことを望む」と言われているのは、実は私たちが命を賭けて守るべきことであります。

【優しい言葉を厳しく聞く】

◆「そうですか。神様は（優しく）そうおっしゃいますが、私は駄目な者ですから（できません）」と言えばそれまでです。神様のお勧めは至上命令であって、命を賭けて従うべきものです。ご命令ですから従おうとすれば、必ず出来ます。神様は力を与えて下さいます。すると信仰が大いに飛躍します。

もしこちらがそれを曖昧にして、「私には出来ません」とぐずぐずしていると、神様は「そうか、それでははっきりするまで待とう」と沈黙されます。私たちは突出するばかりが良いのではありませんが、神様が「そうしてほしい」と言われた場合は、ちょっとやってみて「出来ません」ではなくて、感謝して実行すると、それが出来るのです。イエス様は罪と戦って血を流すまで抵抗されたとあります。私たちにもまたそれを求められているのです。

神様は私たちに対していろいろと苦言を呈されることがありますが、これは霊の父の訓練であって、私たちが清さを保つために求められているのです。清さと訓練（悩み）は互に関係していると思います。神様が私たちを清さにあずからせようと鞭を加えられる、すると私たちは目が覚めます。

小さい子供を訓練する時、まだ言って聞かせても分からない時は、動物的に訓練をしますが、神様は私たちを訓練して、清さにあずからせようとしておられます。「清くなれ」と言われたら、「はい、清くなります」と従う、「苦い根がはえないように」「エジプトを慕うな」と言われたら、「はい」と神様を慕って密着して行く、そうしてはっきりして行くと悪魔はつけ入ることが出来ません。神様の恵みがはっきりして来ます。これは勝利の元です。

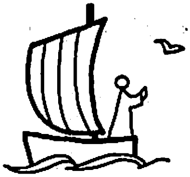
◆ヘブル12:15/17、「気をつけて、神の恵みからもれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい。また、一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい。あなたがたの知っているように、彼はその後、祝福を受け継ごうと願ったけれども、捨てられてしまい、涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかった」―――

エサウはたった一回のテストに失敗して捨てられました。神様は私たちに対して、「先に書いたのと同じことで繰り返すが、それはわたしには煩わしいことではなく、あなたがたには安全なことになる」と言われて、懇ろに私たちに勧めて下さいます。その時私たちが、「いや、私は出来ません。昔の人とは違います。私は大体こんな人間ですから」と言うと、神様は「そうか、それじゃもうお前に

は言わない」となったらおしまいです。ですから神様が私たちに訓練を与えられる時には、自ら励むことです。ピシッと鞭を加えられたらピシッとお答えして、神様に対して姿勢を整えて行く、これはすべてのお言葉についても同じですが、そうするなら命令した方が責任を持って下さいます。人間が思うところ、願うところよりも遥かに勝ったことをされるのが神様の道筋です。

神様は今、この苦い根について幾重にも警戒をしていらっしゃいます。私たちは神様に密着して、悪魔につけいられないようにしたいと思います。もし私たちにいろいろ問題があるならば、イエス様によって根こそぎ清めて頂きたい、そうするならば神様は私たちの生涯を必ずや良い実を結ぶ者にして下さいます。

「苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」と言われます。私たちが「はい」とお答えしてイエス様にすがって行くなら、確かに苦い根ははえ出ることがありません。私たちが悩むことも、人を汚すこともありません。むしろ人を清め、義を宣告する務めに召して下さいます。今日も霊の父のお言葉に従って、自ら清くなるように努める―――そういう生涯でありたいと願います。そして更にこの聖会を待ち望んでまいりたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　(1991.1.3.10:00 聖会７)



第８回〈1991年1月3日、午後2時〉

苦い根を伸ばさない為に

（宿主の死は寄生根の死）
（聖書＝ヘブル人への手紙第１２章１５節）

【先頭に立つ個人コーチ】　１１９

【懲らしめの鞭は愚かを追い出す】　１２０

【苦い根を防ぐ方法があるだろうか】　１２１

【宿主の死は寄生根の死】　１２３

【毒果は後世まで汚す】　１２５

【お金を儲けるのは悪い事ではない】　１２６

【世界を痛めるかも知れない】　１２７

【神様を求めない事がなぜ悪い？】　１２７

「気をつけて、神の恵みからもれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」(ヘブル12:15)

◆これは左側の標語です。ヘブル12章は、私たちの歩みに関するお勧めの言葉です。前11章には、義人たちの列伝がありました。彼らは私たちに対する証人であり、私たちの模範でもあります。そして主は、「さあ、あなたがたもこの道に走って行きなさい」と言われます。しかしただ私たちの尻を叩いて、「さあ行け」と言われるのでなく、イエス様が私たちの信仰の導き手となり、完成者となって下さいました。それは素晴らしい個人コーチです。

【先頭に立つ個人コーチ】

「いっさいの重荷を捨てなさい。からみつく罪をかなぐり捨てなさい。そして身軽になってまっすぐこの道を走りなさい。こういうペースで、こんなふうに——」と、イエス様は私たちの先頭に立って走って下さいます。イエス様は、ご自分の前に置かれた喜び、つまり神様の報いを望んで、全くみ心に従い、十字架の死に至るまで従い尽くされました。イエス様は罪人を忍耐して、神様にいっさいを委ねられました。これは私たちの模範です。

ある人は、「して見せて、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かぬ」と言いました。これは聖書と関係がありませんが、やはり指導者は、自分が実行して見せて、言って聞かせて、やらせてみて、ほめてやることです。イエス様がそのように先頭に立ち、ご自分がまず歩いて見せ、私たちを歩かせて下さいます。素晴らしい導き手であり完成者です。それによって、私たちが神様の前に喜び受け入れられ、誉を受けるようにして下さいます。途中で私たちを投げ出してしまわれる事はありません。

「お前は馬鹿だから、とても手に負えない」とは言われません。むしろ無きに等しい者を選んで、ご自分の栄光を現される方です。おっしゃったことは必ず遂げられます。

◆箴言22章15節に、「愚かなことが子供の心の中につながれている、懲らしめ

のむちは、これを遠く追いだす」とあります。霊の父が、様々な懲らしめをもって訓練を与えられる時に、「これを軽んじてはならない」と言われています。ある人は、「嫌だなあ、こんな事はなければよいのに」と逃げ出します。しかし苦労することによってあとから平安な義の実を結ばせると約束されています。

「訓練、懲らしめ」と「清さ」は関係があります。私たちはさまよって何かに深入りをしますから、神様は私たちに警告を与え、あるいは訓練を与え、鞭を加えられます。すると私たちは目覚めてまた正しく従うようになります。ですから訓練から逃れたりしないようにと言われています。そこでもう一つ大事なことは、「苦い根がはえ出て、信仰が汚されることがないように」ということです。

神様は今年、私たちの周囲にある様々な危険――私たちのうちに苦い根を植え付けて私たちを汚し、悩まそうとする悪魔の働きをよくよく警戒して下さっていると教えられました。「苦い根」の源は申命記29章にあります。エジプトを慕う心がチラッとでもありますと、悪魔はすぐに「そうだ、そうだ、皆やっているじゃないか。これが一番よいことだ。日本でクリスチャンなんて、誰もいやしないじゃないか」と私たちを誘います。

神様との密着した気持が冷えて、世の人の生活を羨むような気持がチョットでも起りますと、悪魔はすぐ私たちのうちに種をまきますから苦い根がはえて来て、それが実るとたくさんの種が落ち、次には爆発的に増えて行きます。ですから「そうならないように」と厳しく戒められているのです。

この戒めは、自分で頑張って苦い根を生やさないように努力せよといわれるのではありません。神様のお言葉に従って、「はい、清くなるように努めよとおっしゃるから、お言葉に従い、あなたの訓練を受けて、そのように清く歩ませて頂きとうございます。あなたがそうおっしゃるのですから、必ず遂げて下さいますから有り難うございます」と行くと、神様は確かに私たちを整えて下さいます。

人間が考えて、「こうして、ああして、こうして」と仕事や勉強のように段取りを考えて行くと、がっかりしたり投げ出したりしなければなりません。まず主が働かれるのですから、お言葉に従って委ねて行くことです。訳が分からなくてもとにかく任せて行く、従って行くことによって神様がおっしゃった通りになさ

って下さる訳です。

◆では苦い根を伸ばさないためにどうすべきでしょうか。神様はどういう事を教えていらっしゃるか学びました。

マタイ13章 24/30節、朗読。「また、ほかの譬を彼らに示して言われた、『天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである。人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。芽がはえ出て実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれてきた。僕たちがきて、家の主人に言った、「ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか」。主人は言った、「それは敵のしわざだ」。すると僕たちが言った「では行って、それを抜き集めましょうか」。彼は言った、「いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。収穫まで、両方とも育つままにしておけ。収穫の時になったら、刈る者に、まず毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけよう」』。」

この章は種まきの有名な譬話です。天国は良い種を畑に蒔いておいたようなものであると言われます。神様は私たちのうちに良い種を芽生えさせ、救に至らせようとされます。ところが人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦をまいて行きました。すると一斉に芽が出て、少し葉の形が違ったり、色が濃かったりしますから、「あ、あれは毒麦だ」と分かります。僕が主人に、「ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか」と言うと、主人が「それは敵のしざわだ」と言います。「では皆抜きましょうか」「いや、今抜こうとして良い麦も一緒に抜くかも知れない。だから収穫の時までそのままにしておけ。収穫の時に、まず毒麦を抜き集めて焼き、良い麦は集めて倉に入れよう」と言いました。

「苦い根」はエジプトを慕う心で、悪魔は人の心にこれを蒔き込みます。「眠っている間に敵がきて、毒麦をまいて立ち去った」とありますから、私たちが用心をして敵を近付けない事はなかなか出来ないようです。人間は疲れるとフッと眠り込みますから、その間に種をまかれる――神様と密着しているつもりでも、

その隙間に悪魔は爪をかけてバリッと引き離しては悪い種をまいて行きます。しかしそれに気がついて抜き取ろうとしても、ほかの麦を痛めますから、収穫まで待たなければならない。すると長い間場所はふさがれ肥料は吸われます。甚だ損害が大きい訳です。

種まきの譬ですから、農作業のことを考えて、何か方法はないかと考えてみました。

まず第1は、敵と戦うことです。何とかして敵を防ぐことが出来ないだろうか。それにはまず第1に自分のうちなる敵である「エジプトを慕う心」を取り除くことです。そのためには、神様に対して絶えず密着していること、それが小さくなりますと悪魔に付け入れられます。

次に種をもし蒔かれたと気がついたら、これを識別することです。福音の真理を識別する方法は、1ヨハネ4章に書いてあります。「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である」とあります。こんにちいろいろな異端があります。たとえば、「ものみの塔」「モルモン教」「統一原理」などがありますが、この識別法によるとはっきり分かります。そしてそれに引かれないようにすることです。

次に小さいうちに抜くことは考えられないでしょうか。芽が出ても、小さいうちに抜くならば、他の根を痛めることも少ないと思います。

次にはかなり成長しても、競り勝ってしまうことが出来ないでしょうか。人間の栽培する植物が勢いよくなって、野生種に勝ち、窒息させることは大変むつかしい事です。彼らの方が強くしぶとく、肥料がなくてもよく成長します。

次には大きくなってからでも根を痛めないで抜く方法がないだろうかと思います。しかしこれもまたむつかしいことです。余程ゆっくり気をつけて抜くならば、あるいは出来るかも知れませんが、そんなことを畑全体にしていたら、手が回りません。

13章のはじめにある種まきの譬は、種をまく側の話になりますが、落ちた種が4か所の土地に落ちるとあります。

①道端に落ちた種は、鳥がすぐ拾ってしまう

②土の薄い石地に落ちた種は、根が伸びられないからすぐ日に焼けて枯れる

③いばらの地に落ちた種は、いばらにふさがれて立ち枯れになる

④石を除き良く耕された土の深い畑に落ちた種は、多くの実を結ぶ

と言われています。そこで今度はそれを裏返して、悪魔から悪い種をまかれた時にどうしたらよいかを考えてみました。

①悪魔から悪い種をまかれた時に、すぐそれを拾って取り除けてしまうということです。先程の識別と同じです。

②石地のように、悪魔の種が根を張ろうとする時、ガンとしてそれを受け付けないことです。しっかりした信仰を持って拒絶するということ、あるいは普段から体（霊）力をつけておくということです。

③悪魔の芽に負けないように、霊の力をつけて苦いものを競り倒すことは出来ないだろうかとも考えます。

しかしどれも決定的なものではありません。コロサイ２章に、「ほしいままな肉欲を防ぐのに、なんの役にも立つものではない」とあり、人間が考えて、「これはなかなかうまいことだ」と思うことも、何の力もないと言われています。確かに外から人間に枠をはめ鞭を加え、「やったら承知せんぞ」と脅しても、中が変らない限り外は変りません。内側から変ると外も変って来ます。

◆ガラテヤ２章 19/21節、朗読。この20節に、「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」とあります。外から人間にどんなたがをはめ、鞭を加えても人間は新しくなることは出来ません。恐れのために一時耐えたり、あるいは真似することは出来ても、すぐにまた元に戻って、かえって爆発するかも知れません。確かに押さえているものはいつか反発します。どんなに誓っても、頑張っても駄目です。

たとえば、昔ダビデを苦しめたサウルがそうです。サウルはダビデを狙って追い回しましたから、ダビデは野山を逃げまわり、ある時は洞穴に入っていました。ところがサウルの一行が知らずにその洞穴に入って来ましたから、穴の奥からは

よく見える訳です。サウルたちが疲れて寝てしまった時、ダビデはサウルの上着の裾を切りました。サウルが外に出て遠くに離れた時、ダビデは大声で呼んで、「わたしがあなたを害しないことを知って下さい」と言った時に、サウルは「ああ、これはダビデの声か。あなたはわたしの命を救ってくれた。今後決してお前を害しない」と涙を流して誓いました。しかしすぐ後でまたダビデを追いかけ回しました。

今度はダビデが王様たちの野宿している所に忍び込んで、枕元に突き刺してあった槍と水のビンを取ってその場所を離れました。遠くから、「これを見なさい。私たちはあなたを害しようとしていないのに、あなたはどうしてわたしのようなノミにも及ばない者を追いかけるのですか」と声をかけた時、サウルはまた「ああ、これは悪かった。わたしは決してしない」と言いながら、またダビデを追いかけます。とうとうダビデは外国に亡命しなければならなくなりました。

自分が頑張ったり誓ったりすることはこんなものです。結局はまた元に戻り、もっと悪くなるかも知れません。１つの悪霊が除かれた人に、７つの悪霊が帰ってきて住むという話があります（マタイ12章、ほか）。

しかしイエス様が私たちのために十字架にかかって死んで下さった事によって、今や私たちは自分が生きて頑張っているのではありません。イエス様から生かされている者です。これは頭で考え、あるいは口で言うだけではなく、そのように生きることです。すると「苦い罪の根」から解放されます。

ある本によると、寄生とは、生物がほかのあるものにくっついて生きることで、場所を借りるだけのものもあり、その中に根を張って生活するものもあります。そこで寄生物をくっつけている方の本体を「宿主」と言います。生活の全部を依存している寄生植物なり寄生動物は、宿主が死ぬと自分も死んでしまいます。（場所だけ借りている小判鮫のようなものは、宿主が死んでも他のものに着く事が出来るでしょう）。

「苦い根がはえ出る」とは、宿主である私たちに寄生根がつくようなものではないでしょうか。たとえば、私たちの腸の中に寄生虫がついたとしますと、どんなに身振いしても取れないでしょう。しかし宿主である人が死んでしまえば、寄

生虫も皆死んでしまいます。同じように私たちが、「私はキリストと共に十字架につけられて、もう死んでしまった者です。いま私がこうして生きているのは、かつての私がそのまま生きているのではありません。キリストが私のうちに生きて下さっているのです」となりますと、苦い根は死んでしまいます。

昔の讃美歌に、「燃える心も、たぎつ涙も、罪をあがなう力はあらじ」とありました。どんなに私たちが涙をふり絞っても、サウルが誓ったように「絶対しない」と泣いても、また同じことを繰り返す者ですが、イエス様が「今は主のはたらかれる時」「今年こそは、あなたの命はあなたのものではない。あなたはあのとき十字架にかかって死んだ者であり、今はイエス様によって生かされている者である」とはっきりしますと、寄生虫がポロリと落ちて自由な身になります。

腸内に寄生する虫が駆除されますと、人間は非常に体力が出来ますが、私たちの内に寄生して栄養を吸い取り、命を吸い取って、汚いものを出し、私たちを汚染していた根が離れ落ちると、確かに霊肉共に新しくされます。

かつて私たちの先輩である柘植先生が、熱海で静養されている時、末期癌でしたが、「ある時、癌種が溶け落ちた」と言われています。昔のことでどういうことだったか分かりませんが、皮膚に出来たかさぶたがポロッと落ちるように、末期癌が溶け落ちたということです。実際に柘植先生は余命のいくばくも無い状態から、一転してその後1年間、力ある御用をされました。

神様が私たちの命を手に握られると、一切の罪、とがの根が取り去られて、神様の前に清い者とされます。そして苦い根を断ち切られたことをはっきり教えられるのです。

【毒果は後世まで汚す】

◆ヘブル 12:15、「苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい」――苦い根がはえ出ると、たくさんの実を結びます。第1に自分が悩み、人も汚します。こんにちの日本国は、これまでお金が第1、物が第1、生産第1で一生懸命に頑張って来ましたから、ある程度のことは出来るようになりましたが、ここに至って「さあ大変だ。人間の心がすっかり毒されてしまって、道徳が地に落ちた」と嘆く人が沢山います。

昨年末でしたか、世界各国の子供たちに将来の希望についてアンケートを取ったところ、外国の子供は、自分の国が貧しいなどは少しも気にしないで、「私は医者になる」「私は弁護士になる」「私はこんなふうにして人々の為に尽くす」などと言うのに対して、日本の子供はそれがなかったそうです。「まあ人並みにやっていればどうかなるだろう」ということでしょうか。もう早くから自分の希望を投げ出してしまっているという事でした。「私は偏差値が悪いからどこへも行けないし、もう自分の人生は見えてしまった」と言うことでしょう。これを整理した人たちも嘆いていましたが、私は日本国が豊かになったと言っても、それは束の間のことで、その代りに永い痛みと悩みを招いてしまったのではないかと思いました。

伝道の書に、「金銭を好む者は、金銭をもって飽くことがない」と言われています。お金を求めて一生懸命に働いて溜まったのですから、喜べばよい訳ですがそれが喜べない、「もっと、もっと、もっと」ときりがありません。しかしたくさんお金が出来れば、それを運用する経費がかかりますし、人を雇えば給料を払わなければなりません。ですから、たくさんのお金が動いて行くのをただ見るだけで、持ち主にとって少しも幸福ではないということです。もっと不幸なことは、お金が溜まると一人歩きをはじめ、それに引き摺られて刑務所の塀の上を歩くようなことになる――お金が人を引き摺ると人間はとんでもない事をやりはじめます。自分がお金を管理するのではなくて、お金から引き摺られるのです。

そうなると、(同じ伝道の書に)「富はこれをたくわえるその持ち主に害を及ぼす」とあるとおりになります。こんにち私たちの周囲にはそういうことがたくさん起っているのではないでしょうか。これらは金銭的、物質的なことですが、霊的に言っても、世を慕い、エジプトを慕って苦い根がはびこると、とんでもないことになります。

◆1テモテ6章6/10節、朗読。ここに「富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊に沈ませる。無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は

欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした」とあります。

ここにも苦い根があります。お金を儲けてはいけない、あるいはお金を溜めてはいけないという事ではありません。儲けるのは大いに結構ですし、また溜めても結構です。しかしそれを自分の偶像にする人があります。すると悪の根がはびこります。

そうではなくて、金銭は自分が管理する、神様から託せられたものとして、神様の御旨に従って用いる時、悪の根とはなりません。むしろ良い根となって多くの実を結ぶようになります。

◆このような悪の根があると、人は信仰から迷い出て、たくさんの苦痛をもって自分自身を刺しとおすとあります。今の時代、私たちの周囲はこればかりです。残念ながら日本にはまことの信仰というものがありませんから、何が人間の生きるべき目標であるか分からず、お金や物を神様にします。そうしたから、経済発展したのだろうと思いますが、豊かになって満足がありません。むしろ苦しく淋しい――これは聖書のとおりです。

【世界を痛めるかも知れない】

これは自分の苦痛であるばかりでなく、世界の苦痛にもなっています。世界において日本の存在が段々大きくなって来ていますから、何をするにも日本の意見を聞かなければなりませんが、その日本がとんでもないものであって、とてもこれは付き合って行かれないという事になって来ると、最後はどうなるでしょうか、恐ろしいようであります。まず私たちが神様の前に新しくされ、手を挙げて大いに祈らなければならないと思います。

◆ヘブル12章 15/16節、「気をつけて、神の恵みからもれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい。また、一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい」―――

【神様を求めない事がなぜ悪い？】

エサウは神様の祝福を軽んじました。「神様の家督の権なんかよりも、目の前

のおいしい食べ物一杯の方がよい」――これはこんにちの日本人とよく似ています。「神様なんて、そんなもの、それよりも経済発展してお金持ちになって贅沢した方が楽しい」と言います。しかしそれは神様の前に「俗悪で不品行」です。多くの人は、神様の恵みを求めないことが悪いとは思いません。しかし神様は人間を、神様を恐れ敬い仕えるように造られたのですから、それが動物のような生活に落ちて行くことは、神様のお嘆きであり、痛みであります。決してただではすまないことです。「聖霊の宮を汚すならば、神様はこれをこぼたれる」とあります。

私たちは「自分で生きて、自分がいろいろな物を持っている、こうして、ああして――」と思いますが、命は神様のものであり、またいろいろな持ち物は神様にお仕えするという使命のために預かったものであって、自分の物と考え違いすると大変なことになります。ルカ16章には、愚かな金持ちの譬がありますが、彼はどんなに悔いても追い付きませんでした。私たちもまた神様の最後の決定が下って火の中に投げ込まれるなら、どんなに叫んでも最早どうすることも出来なくなります。

今この恵みの時のうちに、私たちは神様の前に慎しみ、十字架の血によって清められ、苦い根を取り除いて頂いて、神様から喜ばれる良い実を結び、多くの人を義とするような生涯に入りたいと願います。イエス様がそうでした。「ひとりの義なる行為よって、多くの人を義とされた」とあります。私たちもまたイエス様に倣って多くの人を義とし、世界の人々を生かすような祈り手となりたいものです。

周囲を見る時、あれこれと思う事が多くありますが、このような中にあって神様は働こうとされています。私たちはその方を待ち望むことです。神様のご期待は、私たちの思いとはスケールの全く異なったものではないでしょうか。目覚めて偉大な神様のご期待に耳を傾ける者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　(1991.1.3.14:00 聖会８)

第９回〈１９９１年1月3日、午後7時〉

苦い根のために砕かれた主

（主のまなざしによる癒しと慰め）
（聖書＝イザヤ書第５３章4／6節）

【私たちの病を負われた主】　１３１

【悪魔の光←→聖なる光】　１３２

【弱いペテロを生かす主のまなざし】　１３２

【愛のまなざしがリバイバルを起す】　１３４

【慈しみ深い弱者の友】　１３４

【あなたのためにこの事をした】　１３５

【お任せすると主が戦って下さる】　１３６

【幾重にも包んでおいて
どうして捨てられよう】　１３６

「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った。彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた」

（イザヤ53:4/6）

◆イザヤ書53章は、苦難の僕であるイエス様の受難を預言されているものです。イエス様がこの地上にお生れになった時、ごく一部の人を除いて誰もイエス様と信じませんでした。またイエス様について預言された所を誰も悟り得ませんでした。

イエス様は、若木のように育たれました。若木というのは、切った草木の根株から出る芽、つまり「ひこ生え」とか、「また生え」というものです。渇いた土にヒョロヒョロと育つ根のように、見るべき姿も威厳も美しさもない形で、人の世の最低の所に生れて下さいました。多くの人はこれを侮り、イエス様を信じませんでしたが、イエス様は私たちのために捨てられ、悲しみを受け、病を知って下さいました。最悪の病気は癩病と言われますが、イエス様はそのように侮られて人に捨てられ、顔をおおって忌みきらわれる者のようにされました。私たちもイエス様を尊びませんでした。

イエス様を捨て、全く信じようとしなかった私たちに代って、イエス様が病の人となって下さいました。私たちの悲しみを担って、イエス様自身が悲しみの人となって下さいました。われわれのとがのために神様から砕かれ、われわれの不義のために十字架の上で死んで下さいました。

多くの人は「自分とは関係がない」と考えますが、実は私たちすべてのためにイエス様が死んで下さって、今この平安と癒しと健康が与えられています。私たちの不義のためにイエス様は無残に死んで下さいました。

今年、神様が最も警戒しなければならないと戒められている「苦い根」のため

にも、イエス様は死んで下さいました。テモテ第2の手紙2章に、「彼らの言葉は癌のように腐れ広がるであろう」と言われています。私たちのうちにこの「苦い根」がはえ、芽生えて成長し、広がり、あるいは転移をすると、私たちを倒してしまいます。しかしその恐るべき罪の根のためにイエス様が死んで、私たちを生かして下さいました。

【悪魔の光←→聖なる光】

◆私たちは、「罪の根」と聞いても、軽く「このくらいのことは当り前だ」と考えますが、私たちがちょっと罪に向かってまなざしを向ける――慕わしい気持があってそれを見ると、罪を犯します。チラッと見ただけですぐそれが入り込んで来ます。マタイ5章には、「心に抱くことは実行と同じ、その結果が出たのと同じと神様から見なされる」と書いてあります。

サムエル記下11章を見ると、ダビデは目の罪を犯しました。チラッと見た美しい婦人の姿を忘れられないで、彼は自分の所に引き入れて罪を犯しました。人間の目がチラッと見て罪を犯す――悪魔の怪しげな光が私たちをチラッと照すと言ってもよいでしょう――すると、私たちはたちまち引き入れられます。

箴言には、知恵のない若者が怪しげな女に引かれて行く姿を描いていますが、私たちの内に慕う心があればすぐ虜にされます。逆にイエス様の光とまなざしが私たちに向けられる時、私たちの魂には癒しと慰めが豊かに注がれます。

【弱いペテロを生かす主のまなざし】

◆ルカ22章 54/62節、朗読。「主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、『きょう、鶏が鳴く前に、3度わたしを知らないと言うであろう』と言われた主のお言葉を思い出した」とあります。

最後の晩餐のあと、イエス様はゲッセマネの園でお祈りをなさっている時に、捕えられ、夜明けにかけてあちこち引き回されて不法な裁判を受け、すぐ死刑が決定いたします。その途中で、大祭司の屋敷に引っ張って行かれた時、ペテロは遠くからイエス様のあとについて行きました。

夜明け方で寒かったのでしょう、中庭に火をたいて皆があたっていました。ペテロは顔見知りだったとみえて入り口で挨拶をして中に入り、その火にあたって

いました。すると女中さんが火に照された彼の顔を見て、「あんた、あれと一緒にいたね」と言います。「いや、知らない。そんな人は知らない」とはじめ否定しました。またひとりの人が「あんたもあの仲間のひとりだ」と言うと、「それは違う」と答えました。しばらくしてまた他の人が、「あんたガリラヤ訛りだからイエスと一緒だっただろう。確かにそうだ」と言いました。すると「なにを言っているのか、あんたの言っていることは分からない」とまた拒みました。

そのあとすぐ鶏が鳴きました。イエス様はあらかじめ、「きょう、鶏が鳴く前に、3度わたしを知らないと言うであろう」と予告をされていましたから、そのとおりになった訳です。丁度その時、イエス様は向こうの廊下を引かれて行く途中で、ペテロを振り返って見られました。その時にペテロはお言葉を思い出し、イエス様のまなざしを見てたまらなくなり、外に飛び出して激しく泣いたと書いてあります。

「主が振りむいてペテロを見つめられた」、この所が讃美歌の 243番、「ああ主のひとみまなざしよ」という歌です。イエス様はペテロを振り向いてなじっておられる訳ではありません。むしろ慈しみのまなざしをもって、「心は熱すれども肉体が弱いからである」と、ペテロの将来のために、「あなたが信仰を失わず、兄弟たちを力づけることが出来るように、あなたのために祈っているぞ」と言うお気持で振り返られたのです。ペテロはたまらなくなって激しく泣きました。

そのことが彼の心にとどめられましたから、ペンテコステのあと初代教会が誕生した時、彼は中心的な使徒としてエルサレム教会を指導した訳です。彼は事実、動揺している弟子たちのために、お互の足を洗うように努め、また多くの人々のために自らの命を注ぎ、遂に殉教しました。それはイエス様の慈しみのまなざし、また彼のために成し遂げられた「彼がわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになわれた」という事実が、ペテロを生かした訳です。彼の内から苦い根、つまり不信仰の根や、人間的なドタバタの悪しき根を取り去って、イエス様に対して忠実に従う僕と変えて下さいました。イエス様の慈しみのまなざしは、それ程の力あるものであります。

【愛のまなざしがリバイバルを起す】

◆最近、ある本を読みましたところ、昔イギリスのある地方でリバイバルが起った時、フィニーという伝道者がそこで大変恵まれて、別の地方に行ったそうです。彼はリバイバルの火に燃えていますから、多くの魂の姿を見て涙を流さんばかりに祈っていました。その地方のある繊維工場で、紡績女工さんがたくさん働いている所に行って、ある人に話しかけました。するとその若い女性はおののいて仕事の手がうまく運ばない、機械の糸が切れてもそれを繋ぐことが出来ないでドギマギしていたそうです。

そこでフィニイーが慈しみの目をもってこれを見ながら、彼女に話しかけたところ、彼女はたちまち悔い改めて、その波動が工場の中に次々に広がって行きました。そこで多くの人たちが悔い改めを始めたそうです。工場長は一時機械をとめて、「ぜひ集会をしてほしい」と求め、たくさんの人がそこで救われたと言う話でした。

確かにイエス様の慈しみのまなざしとその光は、ヨハネ福音書のはじめにあったように、「これに命あり、この命は人の光なりき」です。まことの光として来て下さった方が、その慈しみのまなざしをもって照される時、人を新しく造り変えて下さいます。造り変えられた人が、光となって更に多くの人を照して生かして行く———これは実に驚いたことであると教えられました。

【慈しみ深い弱者の友】

◆私たちは自分が駄目な人間であると知ると、イエス様は何か遠い所におられる怖い方であるかのように思いやすいのですが、イエス様は決してそんな方ではありません。

マタイ９章9/13節、朗読。 12/13節に、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」とあります。丈夫な人と言われたのは、パリサイ派の人たちに対する皮肉でしょう。彼らは「自ら行い正しい」と言い、「10分の１をささげ、断食をし、こんなにたくさんの奉仕をしています」という人たちです。イエス様は「そういう人たちにとって、わたしは用事のない存在である」と

言われるのです。しかし病人、つまり胸を打って悔い改め、顔も上げられない罪人を招いて義とするために来たのだとおっしゃいました。

イエス様は取税人、罪人の友、あるいは病人や弱者の友人ですから、私たちは決して、「自分は弱いから駄目」と力を落すことはない訳です。讃美歌 312番には、「いつくしみ深き友なるイエス」とあります。彼は「罪、とが、憂いを取り去りたまう」、「弱きを知りてあわれむ」、「変らぬ愛をもって導きたまう」と言われています。確かにイエス様はそのような慈しみ深い友となって下さいました。

ですから私たちは今の自分の状態を見て、「私は駄目でございます」と言う代りに、「そういう者を変えて救うために主が来て下さいました。それが主のはたらかれる時です」と言って、お言葉に聞き従いたいと思います。

私たちが勝手に救って下さいと言うのではありません。神様が私たちの苦い根のために、神の子を十字架につけるという尊い代価を払って下さったのですから、この方に従うのです。「イエス様を十字架につけて、私に新しい義を着せて下さいました。有り難うございました」とこのお方にお従いさせて頂きたいと思います。そうするならば神様はご自分のみ心を行って下さいます。それはクリスマスの夜の御使の歌に、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、みこころにかなう人々に平和があるように」とあるとおりです。神様の御旨が行われて、御名が崇められる―――それが神様のみ心です。

◆イザヤ書44章 21/22節、「ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。あなたはわがしもべだから。わたしはあなたを造った、あなたはわがしもべだ。イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」とあります。

これはイエス様が慈しみ深いまなざしをもって、私たちを顧みて下さっていることです。神様がもし私たちのもろもろの不義に目をとめられるならば、誰も立つことは出来ませんが、神様は、「あなたはわたしのしもべだ、わたしはあなた

を造った。あなたはわがしもべだ、わたしはあなたを忘れないぞ。あなたのとがも罪も雲・霧のように吹き消してしまったから、さあ返ってきなさい。わたしはあなたのためにこの事をしたのだ」と手の伸べて下さっています。

私たちは今晩、この主の慈しみのもとにある事を自覚して、有りのままで自分を投げ掛けて行きたいと思います。「こんな者でございますけれども、あなたがそのようにして私のために尊い代価を払って下さって、有り難うございました。こんな者ですが、あなたの手にお委ねいたします。どうぞよろしくお願いいたします」と行くと、神様は私たちをご自分のものとして引き受けて下さいます。

【お任せすると主が戦って下さる】

◆聖書には、自分に失望して全く神様の前に投げ出した時、神様が「これはわたしの戦いである」と立って戦って下さったことが記されています。たくさんの例がありますが、使徒行伝９章において、イエス様はご自分に信頼するクリスチャンを「わたしの民」と言われ、迫害者の前に立って、「わたしをなぜ迫害するのか」と言われました。

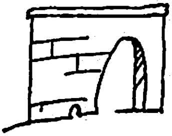
このようなお方が私たちの苦い罪の根をすっかり取り除き、慈しみをもって私たちを導こうとしていらっしゃいます。要するに、「わたしに全部任せてほしい」と言われるのです。一部に治外法権を残して、「これだけはちょっと神様にもお任せ出来ません」と言わないで、全部お任せすると、私共を引き受けて責任を持って下さるのです。

【幾重にも包んでおいてどうして捨てられよう】

◆イザヤ53:4/6にかえる。「あながった」と言われているのに、それに背いて行く———その背きのためにもイエス様は十字架の上に死んで下さいました。そんなにまでして下さった方が、どうして私たちを捨てられるでしょうか。私たちはすぐ自分のことを考えて、「私は駄目だから」と考えますが、こんなにまでして私たちのためにあがないを遂げて下さった方の事を思えば、決して捨てられないことは明らかです。

この章はイエス様のご生涯ですが、このキリストのあがないのうちには、すべての宝が隠されています。主は私たちの生涯の全責任を持って下さいます。これ

はとても言葉で尽くすことは出来ません。今晩、私たちは、全部をになって下さった方のもとに行って、素直に生涯をお任せし、神様の御旨を行って頂く者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　(1991.1.3.19:00 聖会９)



第１０回〈1991年1月4日、午前10時〉

怒る時にも憐れみを忘れないで下さい

（一人の魂も滅びないように祈る）
（聖書＝ハバクク書第３章２節）

【ハバクク書の位置】　141

【神様と対話した預言者】　142

【神様のご性質を引き出したモーセ】　144

【憐れみにすがる執り成しの祈り】　145

【時間・タイミング・命・使命】　148

【あなたがこの国に迎えられたのは
この時のため】　149

【祈りに答えて働かれる神】　151

【待つ者が答えを聞き取る】　152

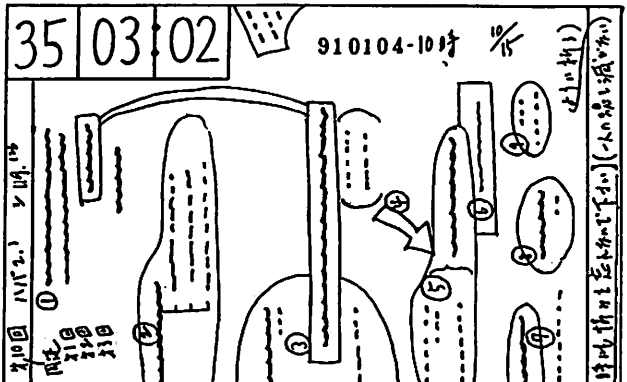
【心砕けた者の悩みを見過されない】　152

【この時代に遣わされた使命】　153

【施し散らしてかえって富む】　154

「主よ、わたしはあなたのことを聞きました。主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。この年のうちにこれを新たにし、この年のうちにこれを知らせてください。怒る時にもあわれみを思いおこしてください」（文語訳「このもろもろの年のうちに、汝のわざを生き働かせたまえ。このもろもろの年のうちに、これをあらわしたまえ。怒る時にもあわれみを忘れたまわざれ」）（ハバクク3:2）

◆預言者ハバククのお祈りです。このあと16節までは、裁きの神様がご自分を現される事であり、17節からは、ハバククの信仰と賛美が記されています。ハバクク書は、小さな書物で僅か数ページしかありませんが、南ユダ王国の末期に語られた重要な預言です。

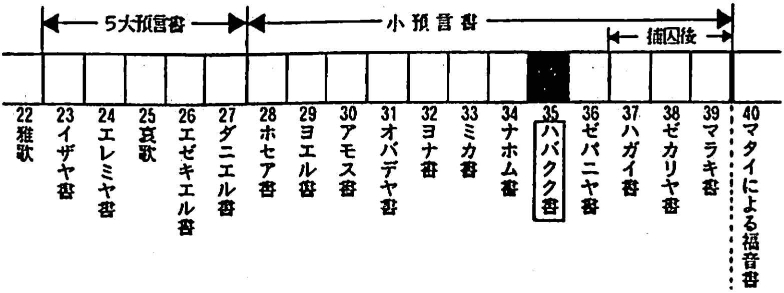


（B６判　0.2㎜ 厚の画用紙）

私の集会記録カードの整理法について。一定の書式に従ってカードの隅に聖書の箇所をしるします。その時に、書名そのままをしるすと繁雑になりますから、旧・新約聖書66巻を「01」から「66」まで２桁の数字であらわします。するとハバクク書は35番目ですから「35」とします。また３章ですから「03」、２節でしたら「02」、したがってハバクク書３章２節は、「350302」となる訳です。この

ようにして聖書のすべての節は６桁で整理できます。

ただ詩篇は 100篇以上ありますし、 100節以上の所もありますから、別の約束を作って、 100台はＡとし、 110はＢ、 120はＣというふうにしますと、たとえば詩篇 119篇 126節は、「19（詩篇）B9(119)C6(126)」とあらわせますから、「19B9C6」とこれも６桁にできます。これは最近売り出された「聖書データーベース」の整理法も同じです



旧約聖書は全部で39書ありますから、ハバククのあとに４つの書物があります。それは(36)ゼパニヤ、(37)ハガイ、(38)ゼカリヤ、(39)マラキです。

最後の３つは、イスラエルの民がバビロンに捕え移されたあと、捕囚時代の預言書です。

ホセアからゼパニヤまでは捕囚前の小預言書であり、イザヤからダニエルまでは比較的に分量の多い大預言書であり、年代はむしろ小預言書より遅いものもあります。

◆そういう時代にあって、ハバククとはどんな預言者であったか。ハバククは神様と対話をしたのです。対話と言っても、人と人が話すような対話ではありませんが、彼は生ける神様が確かにいらっしゃって、私に答えて下さると信じていました。

かつての私は、「神様とはよく分からないが、大自然の創造者だろう」と漠然と頭の中で考えていました。しかし真の神様は生きておられる方であり、神格をお持ちの方であって、呼べば答えて下さいます。ご自分のご意志をはっきりと宣

言なさる方であり、預言者を通して預言されたことは、そのとおり実行される方です。ご自身のみ心にかなうならば祝福を与え、かなわなければそのように報いられます。

ハバククは神様をそのような方と知っていましたから、ユダ王国末期の惨状を見て、神様に訴えました。問と答え、また問と答えと２往復しています。

※〈ハバククの問１〉「イスラエルのうちに暴虐が行われ、広義は曲げられています。あなたは助けて下さらないのですか」―――こんにちでもそうですが、悪い者が栄えて何の報いも受けないのに反して、一生懸命に苦しんで自分の手を洗うように身を慎んで生きていても少しも良いことはない。「こんなことが許されて良いのだろうか。神様は眠っておられるのではないだろうか」というような気持―――これは多くの人の抱く疑問でしょう。詩篇73篇の作者アサフがそういう気持を歌っています。ところが

※〈神様の答え１〉「分かっておる。わたしはカルデヤ人を起してイスラエルを懲らしめる」―――そこでハバククはまた疑問を感じました。カルデヤ人は大変悪く、残虐な民族です。勿論神様を信じません。そんな大変な人たちですから、

※〈ハバククの問２〉「暴虐かつ不敬虔な民が、神の選民をこれほど苦しめるのを黙っておられるのですか。こんなことが許されてよいのでしょうか」と問いました。すると

※〈神様の答え２〉「それも分かっておる。信仰によって生きる者が義人である（カルデヤ人であっても、イスラエル人であっても、このことにかなう者はわたしが「よし」とする）」―――このことは新約聖書にもたくさん引照してあって（ロマ１章、ガラテヤ３章、ヘブル10章）、新約聖書の中心的なテーマです。ルッターが宗教改革に挑んだ時も、このお言葉が頼りであったと言われます。聖徒パウロもしばしばこのお言葉を引いています。

そのあと対話形式ではありませんが、さらに

※〈高慢、暴虐の滅亡〉が２章5/20節

※〈ハバククの祈り〉が３章 1/2節

※〈神の顕現〉が３章3/15節

※〈ハバククの信仰と賛美〉が3章 16/19節となっています。

ハバククの対話は、自分の真剣な気持を神様に訴えて、答えて頂いたものです。そのお答えを拠り所にしてまた信頼して行きますと、神様の大きな奥義が開かれました。そういう意味で彼は後世の私たちにとって非常な功労者であると思います。

幼な子が母親の乳房を吸うと、乳が次々に出て来るように、私たちが神様に信頼するならば、神様はそれに答えて奥義を開いて下さいます。神様は生ける方であり、私たちに働きかけて下さる方であると教えられました。

【神様のご性質を引き出したモーセ】

◆モーセは神の人と言われます。神様に対して非常な信頼を傾けた人です。ほかの人と違って彼は、「彼とはわたしは口ずから語り、明らかに言ってなぞを使わない」と神様がおっしゃっています（民数記12章）。モーセの兄アロンと姉ミリアムが、「なに、モーセばかりが指導者じゃない」と言った時に、神様はこれを許されませんでした。それだけにモーセは神様に対して命を賭けて信頼しました。彼は民のために真剣な執り成しをしています。

モーセがシナイ山で神様から十戒を与えられた時、山は火で燃えゴウゴウと鳴り、激しい地震で民は恐れおののいていました。モーセは山に召されて40日40夜、神様の前にいて、遂に石の板2枚に十戒を刻んで頂いたものを持って山を降りてきました。

※前文は「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」です。

※第1項は「あなたはわたしのほかに、何ものをも神としてはならない」です。

※第2項は、偶像礼拝の禁止です

※第3項は、主の名を、みだりに唱えてはならないということ

※第4項は、安息日を聖とすべきこと

ここまでが神様に対する私たちのあり方で、そのあとが対人関係の6項目でした。

ところが山の下で待っていた民は、40日間にも及ぶ指導者の不在に動揺し、自

分たちの持っている金の耳輪や首飾りを集めて、金の子牛を鋳造しました。そして「これは私たちの神様だ」と淫らな祭を始めました。それを知って神様は大変お怒りになりました。それはその筈で、（十戒の）第１項が、「わたしのほかに、なにものをも神としてはならない」とあるのに、山の下の民はまさにその罪を犯していたからです。「早く帰りなさい。私の民はこんなことをしている」と言われてモーセが下って見ると、その有様ですから、あまりのことにモーセはせっかく頂いて来た石の板を投げ出しましたから割れてしまいました。

そういうことがあってのちモーセは、「この民を私はどうすることも出来ません。もしこの民を救って下さらないのなら、私の名前を命の書から消して頂きたい」と申し出ました。すると神様は、「わたしは罪を犯した者の名を消し去る」と言われました。ということは、モーセの命を取ることはされなかった訳です。出 32:14にはモーセの執り成しに答えて、「全員を滅ぼそう」と言われたお言葉を思い直されたことが記されています。

そのあとモーセは、「私たちをお遣わしになるのに、誰が一緒に行かれるかどうぞ教えて頂きたい」とすがると、「よろしい、わたし自身があなたと一緒に行こう」とおっしゃいました。これはモーセと神様との真剣な交わりの中で、神様の御旨の奥義を引き出してしまったものです。

更にモーセは、「信頼する者に、あなたのしるしを与えて頂きとうございます。確かな恵みを私に与えて頂きたい」と願うと、神様はご自分の性質を現されました。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ること　おそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神―――」（出34:6-)とご自分を宣言されました。これは神様の自己紹介であって、ほかの人はなかなか聞くことが出来ないものです。しかしモーセは神様との対話と信頼の中で、神様のみ心を引き出しました。この聖書を読んで、私たちもまた神様を知る事が出来る訳です。大変素晴らしいことです。

◆ハバククは神様との対話の中から、「義人は信仰によって生きる」という奥義を示されました。そのあと２章に、高慢、暴虐の者が滅亡すると書いてあるので、彼は一つのことを悟りました。

神様は「カルデヤ人がわたしに逆らうから滅ぼす」とおっしゃいません。「お前たちは神の民だから助ける」ともおっしゃいません。ただ「わたしの前に喜ばれる者とは、信仰によって生きる者である」とおっしゃった訳です。敵味方は問われません。

神様は、「すべての魂はわたしのものである」と言われています（エゼキエル18章）。

（会社や役所の組織図、ラインとスタッフについて―――省略）

そこでハバククは3章のお祈りをした訳です。3章2節、「主よ、わたしはあなたのことを聞きました。主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。この年のうちにこれを新たにし、この年のうちにこれを知らせてください。怒る時にもあわれみを思いおこしてください」です。

文語訳では少し違っていて、「このもろもろの年のうちに、汝のわざを生き働かしめたまえ。このもろもろの年のうちに、これをあらわしたまえ」となっています。3行目はあまり変りませんが、「怒る時にも憐れみを忘れたまわざれ」となっています。

「わざ」とか「これ」とは、「リバイバル（信仰復興）」のことです。神様は一人々々を問題にされる―――それなら、一人々々の信仰が神様によって新しくされなければ立つことが出来ない―――そこで彼は恐れたのです。

自分自身もそうですが、イスラエルの民が、「われわれは神の民だから」と安心したり、「われわれは神の民なのに、こんな目に会ってどうなるのだろうか」と恐れたりしないで、それより前に個人々々が神様の前で新しくされなければならないと彼は気がついて執り成している訳です。「神様、この一人々々が新しくならなければどうにもなりません」という訳です。

「私の家はこういう家系です。私の親戚はこういう者です―――うちの隣が教会でした」、そういうことは一切関係がない訳で、一人々々が1対1の関係において神様の御旨にかなわなければならない。ですからハバククは、「どうぞ、このもろもろの年のうちに―――早いうちに、どうかわが民の一人々々を新しくして頂きたい」と祈った訳です。

自分でいくら頑張っても、体を打ち叩いてもどうにもなるものではありませんから、「神様が一人々々の心の内に渇きを起し、新しいことを起して下さい、ご聖霊が一人々々の内に望んで、良き願いを起し、神様がこれを助けて頂きたい。このもろもろの年のうちに、これをあきらかし、あらわして頂きたい」と祈った訳です。

信仰復興は、神様の大きな祝福ですが、一面において裁きです。信ずる者はよしとされるが、信じない者は取り除けられます。お料理をする時、材料のうちで食べられない所を切り捨てて、食べられる所を調理します。全部一緒に扱う訳ではありません。神様が恵みを与えられる時には、そうでないものを切り除くという裁きが行われます。

そこでハバククは、「このもろもろの年のうちにこれを新たにして、信仰復興を起し、これを明らかに示して下さい。しかしそうすると、裁きが行われ、用意が出来てない人があるかも知れません。ですからどうか、もう少し待って頂きとうございます。憐れんで頂きとうございます。ずばりとやるのではなくて、もうちょっと待って下さい」と祈らなければおられませんでした。

一方において「早く、早く、何とかけじめをつけて下さい」と祈りながら、もう一方では「もうちょっと待って下さい、猶予して下さい、憐れんで下さい」と祈る———これは相反することですから、彼は「今」ということを言い切ることが出来ませんでした。「神様、どうぞ憐れんで、その時を神様がお決めになって下さい」ということです。

今年の標語の右側のお言葉は、「今は主のはたらかれる時です」です。「今」という時は神様が働かれる時であると私たちは教えられて来ましたが、その一つの意味は、ハバククの祈りのとおり、「時は神様の決断によります。今という時を決める事は神様にお委ねいたします」———「今」には違いないのですが、その「今」をどこで切るかについて、彼は神様にお委ねしました。

ですから「今は主のはたらかれる時です」は、「執り成し憐れみにすがるお祈り」であると教えられました。新約聖書２ペテロ３章に、神様は憐れみの祈りに答えて、「千年を一日のごとく、一日を千年のごとくに待たれる」とあります。

千年は随分長いと思います。イエス様がお生れになってからこんにちまで千年がふたつ過ぎました。しかし神様のお気持からすると、千年を一日のごとく待たれるというのです。憐れみの故に、聖徒の執り成しに答えて神様が時間を引き伸ばされる―――「もう少し伸ばして、ひとりでも救われるように、むざむざ滅びる者がないように、もう少ししたら悔い改めるかもしれない」と神様は忍んでおられます。

勿論、人形を引きずるようにグイッと引っ張ることも出来ますが、それでは「義人は信仰によって生くべし」となりません。強制されていやいや格好だけやったのでは駄目です。自分から進んで、「ああ、そうです。神様、私はあなたによって生かされている者です。あなたからこの地上に使命をもって遣わされ、この短い人生を走り抜いて、やがて御国に帰るべき者です。その間、使命のためにお預かりしたこの命は自分のものではありません」―――私たちがそのことに早く気がついて、「これは全部あなたのものです。命もあなたのものです。どうぞあなたのみ心に従って生かして頂きたい」となると、神様は「よし」と私たちを義人として受け入れて下さいます。神様が私たちを「よし」として受け入れて下さる時に、私たちの人生は具体的に大きく変って来ます。

こうして「もう一日、もう一日」と待たれて、とうとうこの２千年が過ぎてしまいました。しかしこれは永遠から永遠にわたる神様の手の中には決して長いものではありません。しかし短くもありません。一日を千年のごとく思って、「今日か、今か」と待たれていたのですから。

私たちはそういう時代に置かれている事を心にとめなければならないと思います。私たちにはハバククと同様な使命が与えられているのではないかと教えられました。

◆時間というものは、ただ流れて行くものではありません。スポーツの競技などで時間を計る時に、時計係りが「用意ドン」でストップウォッチを押します。ゴールに入る時にもう一度押します。すると経過時間が分かります。

神様は「わたしはアルパでありオメガである」とおっしゃいますが、ダラッと

時間が流れて、「このあたりから、このあたりまで」とおっしゃっているのではありません。スタートと同時にストップウォッチが押されるように、神様がストップウォッチを押された時に時間ははじまりました。そしてもう一度ストップウォッチを押されると時間は終りになります。時間は決して永遠ではありません。時間を定められた方が自由に設定する事が出来るものです。伸ばすことも出来れば、短くすることも出来ます。

またある人々は、時間の終りまで行かないうちにグルグル回るような事を言われます。つまり「輪廻（りんね）」です。しかし人間は死んだり生れ代ったりする事はなく、「人は一度生れ、一度死に、そして裁きを受けることによって終る」（ヘブル9章）と書いてあります。人間ばかりではありません。宇宙も地球もすべてのものは一回限りの命です。人がたとえ百年生きても神様の前には瞬間です。

（宇宙カレンダーで人間の命は 0.2秒しかないと言われること———省略）

ですから人生において時間の長さは無いに等しく、ただタイミングがあるだけではないでしょうか。神様は私たちに使命を与え、「今」という時に派遣をして下さいました。それだけ微妙なタイミングを計られているということは、はっきりした派遣者のご意志があるということです。

（ハレルヤコーラスのタイミングについて———省略）

（心臓の鼓動に非常に厳粛さを感じること———省略）

（毎朝目覚める度に、神様の使命を感じること———省略）

（人間は進化の末に出来た変てこなものだという人———省略）

（人間が生れて来た目的なんてありはしないという人———省略）

◆エステル記4章 12/17節、朗読。ハバクク書などは預言書であったのに対して、これは歴史書です。エズラ、ネヘミヤ、エステルは捕囚時代の歴史書です。イスラエルの南北両王国は滅びて、アッスリヤにバビロンに捕虜となって行きました。しかしその中から高く引き上げられる人が出て来ました。このエステルもその一人で、彼女は 120余州を支配する大国ペルシャの（アハシュエロス）王妃となりました。

（先の后が廃せられたことについて———省略）

（エステルが王妃にあげられた経過について———省略）

王妃になったあとしばらくして、ユダヤ人に対する迫害が起り、「ある日を定め国中のユダヤ人を皆殺しにせよ」という法律が発布されました。これは悪い大臣が王様の印鑑を借りて作ったものでした。それを聞いてユダヤ人たちは大騒ぎになり、エステルの養父であるモルデカイは、エステルに「王様の所に行って命乞いをしなさい」と言い送りました。

ところが王様の所には誰であってもずかずかと入って行く事は許されておりません。王宮の最も内側に内庭があって、そこを通り過ぎないと王様の所に行くことが出来ないのですが、入口に警備員がいて誰であっても、たとえ王妃であっても許可なくそこへ入ろうとすれば必ず撃ち殺される規則になっていました。そう言ってモルデカイに返事を送ったところ、モルデカイが再び言って来ました。「行きなさい。あなたがこの国に迎えられたのは、この時のためでなかったとだれが知りましょうか」と。

そこでエステルは、「分かりました。私がこの国に王妃として迎えられたのは、この時のためであったと、私は信じます。だからたとえ身の危険を犯しても王様に直訴しましょう。あなたがたはわたしのために祈ってほしい。私たちも祈ります。そして３日後に行きます。もしわたしが死ななければならないのなら、死にます」と決心しました。

こうして内庭に入ろうとすると、王は王妃を見て憐れみの手を伸ばしました。「エステルよ、何事か。それ程までにしてわたしの所に来ようとするには余程の願いがあるに違いない。たとい国の半ばでもあなたに与える」と言いましたから、命は助かりました。しかしその時は、「すぐここで申し上げる訳にはいきません。どうぞハマン大臣と一緒に今日、私の設けた宴会に来て下さい」と申しました。

王とハマンが来ると、「明日、わたしが設ける宴会に来て下さい。その時に申し上げます」とまた招きます。そしてついに「ハマンがユダヤ人殺害の首謀者であり、私たちは何も悪い事はしていないのに、こんなことをしています」と訴えると、王様は「それはいけない。わたしは知らないで王の印（指輪）を貸したが、

お前たちにこれを預けるから、先の法律を取り消しなさい」と命じました。そして更に進んでユダヤ人が殺されると定まっていた日に、逆に陰謀者たちを滅ぼすという法律が出されました。

この大逆転が起ったきっかけは、エステルが「自分がこの国に迎えられたのは、今この時のためであった」と信頼して踏み出したことにありました。「時」は、自分と関係なくただ向こうをずっと流れて行くだけのものではありませんでした。

同じように私たちが神様の使命を受けて、「私はこの時のために来ました」と踏み出すと、時はその人の時となり、また主の働かれる時となって、偉大なことが行われます。それによって神の民は救われ、敵対する者が滅ぼされたのです。

◆ほかにも例があります。

ヨエル2章 12/14節、「『今からでも、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け』。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである。神があるいは立ち返り、思いかえして祝福をその後に残し、素祭と灌祭とをあなたがたの神、主にささげさせられる事はないとだれが知るだろうか」とあります。

この時代は極端に困難な時代でした。断食と嘆きと悲しみをもって神様に帰り、衣服ではなく心を裂く、そして神様にすがるならば、神様が思い返して祝福を残される事がないとだれが知るかと言われています。これはすなわち、「今がその時なのだからあなたがたはその使命を受けた者として踏み出しなさい」と勧められているのです。

私たちの「時」もそうだと思います。「私はこういう時に生きています。いついつ生れたから、平均寿命があと何年ぐらいはある。それまでは大丈夫」「時間はただ過ぎて行くだけ、私はこんな者ですから仕方がないじゃないですか」と言っていればそれまでですが、神様の「今」と言われる時がどんな時であり、神様はどんな事を行おうとしていらっしゃるか、ハバククのように、神様の事を聞いて恐れ、積極的に問うならば、私たちは当り前の時にいるのではないのです。

神様が大きなことをなそうとして、私たちに期待しておられる———私たちが人間的な頑張りをする訳ではありません。私たちの信頼の祈りに答えるという形で神様が働かれます。祈りと待ち望みの無い所へ俄かに神様が答えられると、恐れて、「さあ大変だ。逃げろ」という事になってしまいますが、「何とかして神様のわざを起して頂きたい、この時代に、この時にリバイバルを」と待っている時に神様がドッと働かれると、これは非常によく分かります。神様があがめられます。その時には必ずしも大きな音がしなくても、よく分かります。

【待つ者が答えを聞き取る】

◆ある捕虜収容所で、捕虜たちが自分たちの意志をお互に通じるために、いろいろな通信手段を考えたと言います。タオルを引っ張ってバシッという音に意味を持たせる、あるいは何かをカツッと叩くと、それがまた意味があるというようなことでした。

彼らはやむにやまれずに考え出した訳ですが、私たちが「今」という時代に責任を感じて神様の前に執り成し祈り、「憐れみを忘れたまわないように」と待っている時に、神様が一つのことを行われるならば、驚くべき真理が示されるのではないでしょうか。

ニュートンは林檎が落ちるのを見て「万有引力の法則」を発見したと言われますが、林檎の落ちるのは多くの人が見ている訳で、あらかじめ問題意識を持って待っていた人、考えて考え抜いた人は、音もなく林檎が落ちるというありふれた出来事によって、宇宙の大真理を見ることが出来た訳です。

【心砕けた者の悩みを見過されない】

私たちは神様の前に、「今という時、私はここに生かされています。今日一日生かされているのは、この時のためでなかったと誰が知るでしょうか———いや、このために私は今日、この時に来たのです」と踏み出すならば、神様は明らかに答えて下さいます。ハバククは「これをあらわして頂きたい」と祈り待ちましたから、特に大きな音が起らなくても、ハバククには分かった訳です。

◆ハバクク３章にかえる。「主よ、わたしはあなたのことを聞きました。主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。この年のうちにこれを新たにし、この

年のうちにこれを知らせてください。怒る時にもあわれみを思いおこしてください」――この祈りは神様を動かします。神様はこれを聞いてじっとしている事が出来ない方です。

士師記10章 10/16節、朗読。「イスラエルの人々は主に言った、『わたしたちは罪を犯しました。なんでもあなたが良いと思われることをしてください。ただどうぞ、きょう、わたしたちを救ってください』。そうして彼らは自分たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた。それで主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなった」とあります。

士師記は、イスラエルの民が神様に信頼して恵まれるが、それに馴れ、やがて神様を侮って落ちて行く。すると神様によって起された敵が侵入して来て極端な苦しみに陥ります。そこで「神様、助けて下さい」と叫びますと、また助けられる。その繰り返しが10回以上も書いてあります。

これはそのうちのひとこまで、イスラエルはペリシテ人およびアンモン人によってしえたげられ、苦しみの中から、「神様、どうぞ憐れんで頂きたい」と祈って、異なる神々を捨てました。「自分はこれさえあれば良い」と言っていた者をみな離れて、「神様、どうぞ救って下さい。あなた以外に望みはありません」と柔らかな心で信頼しましたから、「主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなった」と記されています。

神様は永遠の存在者でありますが、無人格の方ではなく、神格を持った方であり、言うならば非常に人間的な方であると思います。柔らかい心になって涙をもってすがると、「見るに忍びない。救ってあげよう」と、すぐエフタという士師が起され、イスラエルは救われます。

◆こんにち私たちの住む時代はハバククの時代とよく似ているのではないでしょうか。国の中は乱れています。日本人の徳性が地に落ちたと言われます。子供たちまでがすっかり望みを失っており、外国の子供に比べて全く活気がないと言われます。早くから自分を投げて諦めてしまっている状況です。

その上、外国からの様々な圧力が加わって来ます。これはハバククの当時、カ

ルデヤ人が起されたような状態かも知れません。しかし神様はあの時と同様に、「義人は信仰によりて生くべし」とおっしゃいます。私たち個人々々が神様を恐れ敬い、そのお言葉に従う、そしてイエス様によって救われるという福音を頂戴し、信頼して生きることがすべての基礎になる訳です。

人間は様々な活動をしますからこの世は相当複雑なように見えますが、整理をしますと、「人間が神様を信用するならば、神様も信用して下さる」ということです。ですから、日本国がぜひそうして頂かなければなりません。そのために私たちは今生かされ、（自分がはっきりするために祈ることは勿論ですが）、時代のために、祖国のために、広く世界のために、全人類のために、祈るように立てられていると教えられたのです。

◆ハバクク3:2 にかえる。「主よ、わたしはあなたのことを聞きました。主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。この年のうちにこれを新たにし、この年のうちにこれを知らせてください。怒る時にもあわれみを思いおこしてください」―――私たちは「自分がまだまだだから、人のためにお祈りするなんて、とても出来ません」とか、「そんながらではありません」という人がありますが、決してそうではありません。

神様は私たちの状態に係わらず、「大いに人のために祈ってあげなさい」と求めておられます。家庭に子供が生れますと、小さい兄や姉は、出来ないながら赤ちゃんの世話をして自分も成長して行きます。

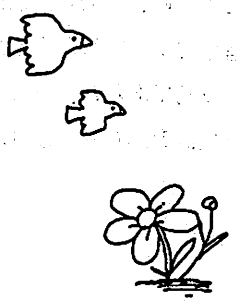
そのように私たちがたとえ幼な子であっても、神様は使命を与え、「まず第1に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい」（1テモテ２章）と言われています。この時代に生かされている使命がそこにあると教えられました。「この年のうちに、あなたのわざが行われますように―――今は主のはたらかれる時です。あなたはそう約束されたではありませんか。どうぞ私のうちにもそうですが、すべての人のために、あなたのわざを起して下さい。家族のためにも、職場の人のためにも、あるいは祖国のためにも、どうぞわざを起して頂きたい」と祈るの

です。

日本国は世界から「顔がない」とか、「経済１流、政治３流」などといろいろ言われますが、そういう事も含めて神様の憐れみを祈りたいと思います。そうすると自分も恵まれます。箴言11章に、「施し散らして、なお富を増す人がある」とあるとおりです。しかしもし、「いや私はそんながらではありません。お祈りなんか出来ません。私のために祈って下さい。私は乏しく貧しいです」と言っているならば、ますますじり貧になってしまうかも知れません。神様のお言葉に従って自らを顧みず大いに祈る事によって、かえって富むようになるのです。

イエス様も「受けるよりは与える方がさいわいである」とおっしゃって、自分自身がそのとおりに生きられました。神（の子）として富める方であられたのに、人としてどん底まで下り、ご自分を与え尽くして下さいました。それによって神様から天の高みに引き上げられ、神様の右に上げられました。すなわち、最も富める方となった訳です。

ヨブが一旦その富を失ったのちに、２倍の祝福を受けたように、私たちが神様の前に自分を無にして、お言葉に従って行きますと、豊かに満たして下さいます。ですから私たちは今がそういう時であると自覚し、これを私の時として、一歩踏み出して行く―――そういう生涯を送らせて頂きたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。 (1991.1.4.10:00 聖会10)



第１１回〈1991年1月4日、午後2時〉

万物を生かす主の息

（信仰に始まり信仰に至らせる）
（聖書＝詩篇第３３篇６節）

【神様が言われた事はその通りになる】　１５９
【主の口の息によって生かされる】　１５９
【創造の始めに与えられた使命】　１６１
【影絵の舞台裏を見るように】　１６１
【神様のご職業？】　１６２
【主の名によって注がれる命の息（聖霊）】　１６２
【神様の賜物をわたくししたら】　１６４
【信じたとおりになるように】　１６５
【信じ仰ぎ、ただ頼る】　１６６
【いつも神様の息吹を感じながら】　１６７

「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」（詩篇33:6）

◆これは神様の主権を歌った素晴らしい詩です。殊に「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」「主のはかりごとはとこしえに立ち、そのみこころの思いは世々に立つ」とあります。

【神様が言われた事はその通りになる】

神様は誰からも妨げられることのない方でいらっしゃいます。人間はいろいろな事を考えます。まわりの状況や上の人の意向などに妨げられて、「やはりこれは駄目だった」ということが少なくありません。重要な法案が国会で出されても、審議未了で廃案になる事があります。

ところが神様が「こうしよう」と言われたことが廃案になる事はありません、必ず遂げられます。もし人がこれに逆らおうとするならば、神様はこれを従わせられます。

老祭司ザカリヤが、ヨハネの誕生を告げられた時に、「こんな老人に子供の生れる筈はありません。妻も年をとっています」と言いますと、神の使は、「神様のおっしゃったことは必ずその通りになるものであって、あなたがもし信じないならば、その事が起る日まであなたは物が言えなくなる」と宣告されました。

ザカリヤはそれきり物が言えなくなって、１年後に子供が生れ、御使の言われたとおりに「ヨハネと名付けなさい」と黒板に書いた時、彼の口はサッととけて神様を賛美したと記されています。

神様は、人の口を封じ、手出しする者を押さえてでもご自分のおっしゃった事を遂げられる方です。これが神様の権威です。

【主の口の息によって生かされる】

◆今年神様は、「今は主のはたらかれる時です」と聖会にお立ち下さいました。私たちのために何をして下さるか、どんな働きをして下さるかについて、私は一つの面から教えられました。それは神様が、「主の口の息によって私たちを生かされる」ということです。

６節の２行目に、「天の万軍は主の口の息によって造られた」とあります。

「造られた」とは、人が神様の命の息吹によって生かされる者となった意味です。これは創世記２章、人間の創造の物語の所にありますが、土の塵をもってご自分の形に造られ―――それだけではまだ泥人形ですから、それに命の息を吹き込まれました。そして人は生きる者となりました。文語訳によると、「人すなわち生霊（生ける者）となりぬ」と書いてありました。「霊」とはフワフワとした取りとめのないものではなくて、生き働いて下さる御霊です。すなわち、神様の口の息が、私たちの聖なる宮の中に吹き込まれて、私たちは人間として生きる者となりました。

神様が私たちのうちに働らかれるわざは、私たちをみ言葉によって立たせ、口の息によって生かすことです。私たちは昔から生きていると思います。確かに人間は、創世記において、土の塵に命の息を吹き入れられた時から生きていますが、その時の命がそのまま保たれている訳ではありません。何十年か前に親から生れた私たちですが、生れた時のままの状態が今続いている訳ではありません。その時はまだ体も小さかったし、顔形も多少は違っていたと思います。しかしその時から何億回か分かりませんが、息を繰り返し、食物を取り、いろいろな生活の必要を満たされて今に至っています。酸素を吸い込み、炭素を燃やして熱を造り、循環によって養われ、老廃分が捨てられて、とにかく絶えず生命活動が営まれて、その結果として現在がある訳です。神様も私たちを造られて、「これで何十年か生きなさい」と投げ出された訳ではありません。

「今は主のはたらかれる時」とは、私たちがそのようにして毎年々々と言うか、毎日、毎日、今、今を生かされなければ、本当に生きて行くことは出来ないという事です。ミイラのような生ける屍のような生涯、あるいは本能のままに生きる動物のような生涯―――そこには何の希望もなく、肉塊がしばらく存在して、また消えて無くなったという生き方もあるでしょう。しかし神様はそんな生き方をさせるために人間をお造りになったのではありません。ご自分の形に尊く造り、ご自分のために使命を果たさせようとされたのです。

◆創世記１章 26/31節、朗読。ここに「神はまた言われた、『われわれのかた

ちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう』。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ』」とあります。

ここは神様から任命を受ける非常に厳かな所です。神様は天地創造の最後、創造の第6日目に人間をお造りになりました。そして「地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」と使命を与えられました。

神様は主人公ですから、すべてのものに命と息を与えてご支配になっておられるのですが、私たちに、「ご自分の代りに治めよ」とおっしゃいました。神様の代理者として、神様の権威を受けて、それぞれに所を得させ、それぞれが神様に仕えるように、祈って助けてあげなさいという使命です。

ある人の言うように、「突然変異か淘汰によって、進化の末に、人間のようなヘンテコなものが出来てしまった」ということではありません。神様がご自分の形に造り、他の動物よりすぐれたものとして命の息（魂）を吹き込んでお造りになりました。命の息の件は2章7節に、「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった」とあります。人体は物質的に言えば、いろいろな元素で出来ていますが、命の息は化学記号であらわす事は出来ません。造り出すことも出来ません。命のあらわれである体の仕組みとか、働きを説明する事は出来ますが、その基本システムについて人間は何も説明できません。「凄いなあ、不思議だなあ」と言うばかりです。

◆人間は一生懸命に研究して、「ここまで分かった。あそこまで分かった」などと言いますが、神様は逆の方向（上）から、「わたしが全部造ったのだよ」とおっしゃっています。私は影絵のようなものだと思います。影絵は観客席から見ると、人形の影が真っ黒に映っているだけです。ところが舞台裏に入って見ますと、ライトが照っていろいろなものが動いています。動かしている人もいます。いろいろな小道具もたくさんあります。それらがすべて見える訳です。

人間は「真理を探求するな」どと言いますが、それはあくまで人間の側から見て探っているものであって影にすぎません。しかし神様の側から真理の光を照らされると全部分かります。人間の考えることと、神様のなさることとは全く違うのであって、「私は猿の子孫だ」という人はこちら側から見ている訳です。しかし神様の側から光を照らされると、人間は人間として造られ、猿は猿として造られました。

彼らは目に見えない神様を敬うことは出来ません。鍵を開けた猿がいるそうですが、それは目に見えることの真似にすぎません。また、イルカなど海獣は非常に頭がよいと言われて、いろいろ芸をしたり、なかには字を書いたりするなどと言いますが、彼らも決して目に見えない方は分かりませんし、永遠という時間も分かりません。頭をちょっと撫でられて餌を貰うと喜んで言われたとおりにする、ということです。これは私たちとは全く違ったものです。

◆神様は私たち人間を「すべてのものより遥かに勝れた者」として造られました。人間はいろいろな仕事を持っていますが、神様のお仕事は何であると言えるでしょうか。神様についてこんな事を申し上げて恐れ多いのですが、神様は私たちを生かすことがお仕事であると思います。私たちの霊的、肉体的健康の保持者であり、癒し主です。「わたしは主であって、あなたがたをいやす者である」（出エジプト記15章）とおっしゃいました。癒す方であり、生かす方です。また私たちを立てる方であり、植える方であります。許す方であり、慰める方です。平安を与えて下さる方です。神様のお働きはそのようなものです。

◆私たちが生かされるのは、あくまでも主権者からであり、命の息を下さるのは他の誰でもありません。医師は人口呼吸器をつけて人体に若干の手助けをしたとしても、何も無い所に命の息を与えて生かすことは出来ません。

この主権者は、私たちに対して何をもって生かして下さるか―――それは「息です。「息」は、神様が「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」とおっしゃった宝のうちの一つです。そしてそれは最も勝ったも

【神様のご職業？】　【主の名によって注がれる命の息（聖霊）】

のです。

「知恵と知識」というと、計算が早かったり、商売の企画が上手な人、何かの天才、ノーベル賞でも貰うような人のことかと思いますが、神様の知恵の最も素晴らしいものは、「主の名によってわたしたちに賜わった助け主、すなわち、真理の御霊」であります。

ヨハネによる福音書にそのことが何箇所も書いてあります。まず14章 16/17節、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である」とあります。

神様の命の息は御霊です。「父は別に助け主を送る」と書いてあります。主権者である神様から私たちに与えられるもので、私たちは人間の常識で、「分かった、これが御霊だろう」「何か不思議なことが起った、これが御霊だろうか」などと考えますが、それは御霊そのものではなく、御霊の働きであって、神様が送って下さる御霊そのものは、人間が「これ」とか「あれ」とか言う事の出来るものではありません。そのまま「有り難うございます」と頂戴すると、御霊のあらわれが出て来ます。

ヨハネ 14:26、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」とあります。

ここにも、これをなさって下さるのは「父」と書いてあります。「父がわたし（イエス様）の名によってつかわされる」とあります。私たちが「有り難うございます。イエス様が私のために十字架にかかり、死んで甦って下さったことによって、この名による聖霊を私に下さるから、有り難うございます」とお受けすると、すべてのことを教え、すべてのことを思い出させて下さるのです。

次にはヨハネ 15:26です。「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう」とあります。

これもはっきり主権者は「父」と書いてあります。「父のみもとからわたしが

遣わす」「イエス様の名によって遣わされる聖霊、すなわち、真理の御霊」です。こんにち私たちが御霊を注がれて生かされるのは、イエス様のお名前によるのです。もしそのお名前がなければ、私たちはもともと神様と関係がなかった者です。召され選ばれたイスラエルの民ではありませんから、私たちは全く関係がない者でした。

しかしイエス様が来て下さったことによって、アブラハムの時に約束され、イスラエルが受け継いで来た祝福が異邦人に及びました。そして私たちが信仰によって約束の御霊を受けることになったのです（ガラテヤ３章）。

そのようにして私たちは今、絶えず生かされています。私たちは３秒か４秒に一回呼吸をしていますが、そのようにいつも命の息を与えられる事によって、私たちは生きています。「生きていれば呼吸をするのは当り前、寝ていても自律神経が内臓を動かしているから生きている」というのは説明であって、私が思うには、一つ々々の息は、実は神様の憐れみによって「生きなさい」「もうひとつ生きなさい」「もうひとつ」と次々に生かされているものであると思います。生れてこのかた何億回息をしたか分かりませんが、決して当然ではありません。一つ々々がイエス様のお名前によって注がれ、お名前によって生かされている尊い命です。その事を今年は教えられて大変感謝しました。

しかもそれは私がお願いしたからではありません。神様のほうが憐れみをもって目をとめ、「生かして下さる」とおっしゃるのですから、私たちのなすべき事は、ただ「有り難うございます。そんなにして生かして下さいますから有り難うございます。ひと息吹き込んで下さるから、私はそれを吸い込みます」———意識して息を吸い込む人はありませんが、本当は吹き込まれるものを「有り難うございます」「もうひとつありがとうございます」と一息々々吸い込む———こういう気持で神様と直結した生き方をすることが出来たら、こんな素晴らしいことはないのではないかと思います。

◆エゼキエル書16章には、「あなたの生れた日に、へその緒は切られず、水で洗い清められず、塩でこすられず、布で包まれなかった。あなたはきらわれて、

野原に捨てられた。それを見てわたしはあなたに、『生きよ、野の木のように育て』と言った」と書いてあります。

これは私たちのことでした。成るほど私たちは親から生れ、保育をされた者ですが、神様が私たちの霊も肉も整えて成長させ、飾って下さったものです。麗しい霊の飾りをもって飾って下さいました。それらは全く神様の賜物であって、使命のために預けて下さったものです。それをもし「これは俺のものだ。もう少しこうしてほしい。神様、もっとこんなふうにして下さい。私の言うことを聞いてくれたら、あなたに幾らか上げましょう。聞いてくれなかったら、さようなら」、そういう事を言う人があるそうで、とんでもないことです。神様から生かされ、飾られた者が、よそに行くなら、これ程いやなことはありません。これは罪であり姦淫です。「あなたがたに対して容赦しない」とおっしゃっています。

（失敗例―――ルカ16章、愚かな金持）

◆そのようにして生かされていることを自覚したならば、日に日に神様の前に感謝したいと思います。「そのようにして生かされている者です。有り難うございます」と行くと、神様が「そのとおり。お前が信じたとおりに、わたしはあなたを生かし、支えているのだ」と事実を見せて下さいます。私たちは籤を引くように出鱈目に事に当るのではありません。神様が「あなたが信じたとおりに」と事実があらわれて来ます。

「あなたの信じたとおりになるように」とイエス様はおっしゃっていますが、私たちが身分を自覚してそうされた者として生きて行くからそれが出て来るのです。目に見えない神様の事はそっちのけで、「何かひとつうまい事を当てて下さい」とお賽銭を投げ込んで拝む人は多いものです。僅かなお金で今年は大もうけをしますように」とはずいぶん虫の良い話ですが、虫がよいというより出鱈目です。そこには何の約束もありません。神様の約束を知ろうとしない、神様のことを聞きもしないで、全く寝言のような話です。

神様は事実、私を生かして下さっているのですから、「有り難うございます」と信頼して行くと、それを実際に見せて下さいます。神様の約束があり、私たち

の信頼がある時、それが形になるのであって、形だけがフワフワと漂ってくる訳ではありません。「信じる者に救を得させる神の力である」とあり、それによって私たちを、「信仰から出て、信仰に進ませる」と言われるのです。

◆ロマ 1:16/17、「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」

「神様は信じる者に救を得させる」と言われます。いま私たちはお話を聞いたからよく分かりますが、信じる事がなければ、見えません。信じると実際の救が見えて来ます。私たちに恵みを与えられる訳です。それが神様の力です。それによって私たちに信仰とは何であるか、神様の前に喜ばれる義人とは、信仰によって生きる者であると教えられます。

神様を信用して、まだ何も見えないが、私を生かして下さっていると信じる――「そうです。私は生かされています。有り難うございます」と生きて行くとそこに見えて来ます。それが私たちの信仰の実です。それによって私たちは、信仰に始まり信仰に至らせられます。信仰が成長するとはそういうことです。「成長」とは、長い間聖書を読み、パッパと聖書を開くことができ何でも分かっている――これが成長した信仰ではなくて、神様を信頼するから、それが実際に自分の身に体験できる、だからもっと大きく信頼する。すると大きく体験できる。このようにして次々に信頼して行きます。それが信仰の成長であり、高みであり決して年限でもなければ、人間の上手下手でもありません。

年が若く、信仰年限が短くても、私たちより遥かに信仰の高い人がある訳で、私たちに対して、「すべて信じる者に救を得させる」「信仰に始まり信仰に至らせる」というのが神様のみ心です。そこにおいてはすべてのものは癒され、生かされ、植えられ、立てられ、慰められ、神様の力を知ることが出来るのです。

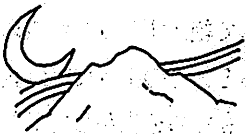
神様の恵みの時とは、私たちが何かを待っていて、籤引きに当たるように何かが降って来る――「これは良かった」と喜ぶようなものではありません。あく

までも神様に信頼して行くと、信頼したように私たちに見せて下さる――あるいは体験させて下さる、簡単明瞭なものです。

◆詩篇33:6、「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」――神様は万物をご自分の口の息によってお造りになりました。「光が、いでよ」「山が、いでよ」「水はここまででとどまれ」と神様はお口の言葉によって造り、お口の息によって私たちを生かして下さいました。土の塵をもって神の形に造った泥人形に、「生きよ」と命の息を吹き込まれました。

イエス様は弟子たちに向かって、「聖霊を受けよ」と命の息を吹き込まれたと書いてあります。私たちに対して絶えずそうした口の息を注いで生かそうとされるのが、今年の主の働きであると、そのように私は教えられました。

今日もこの口の息によって、私たちを生かして下さいました。更に生かして下さいます。私共もこの地上にある限り、肉体の命ばかりでなく、霊の息、つまり神様の息吹をもって生かされる――神様の息吹を受けるのですから、すぐそこにおられて私を助けて下さる、その助けは自分の都合によるのではなく、神様のみ心に従って助けて下さるのです。すると、私たちがいま目の前であれこれと考えている事などは、雲のごとく、霧のごとく解決して下さいます。今日も天の万軍を造られた神様の息吹を感じながら、生かして頂きたいと願う者です。ご一緒にお祈りしましょう。　　(1991.1.4.14:00 聖会11)



第１２回〈1991年1月4日、午後7時〉

神のすべてをもって満たされるように

（聖書＝エペソ書人への手紙第3章１８／１９節）

【神のすべてをもって満たされるように】　１７１

【「知る」は「領る」】　１７２

【神様にお仕えすると自分がはっきりする】　１７３

【全体を満たす方が満ちている！】　１７４

【明け渡すと楽になり強くなる】　１７５

【己が死ぬと苦い根も死ぬ】　１７６

【想像を絶する神様のわざ】　１７８

【神に栄光があるように】　１７９

「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるようにと、祈る」（エペソ3:16/19）

◆ 14/21節、朗読。これは神様の栄光の富であり、御霊の切なる祈りです。エペソ１章にも、教会のうちに満ち満つる方が、どんな偉大な方であるかが記されていましたが、その方が今年、私たちのうちにご自分のすべてを満たそうとしておられるということです。

「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」と言われる方は、あらゆる点において無限の富をお持ちになっておられる方で、そのすべてをもって私たちが満たされるようにと祈って下さっているのです。神様のご期待は私たちの想像以上のものです。

そのために神様は御霊によって、私たちの内なる人を強めて下さいます。私たちは強くされないと、神様の恵みを受け取ることが出来ません。神様が下さるとおっしゃるのですから、ただ貰えばよいと思いますが、信仰によって頂戴することも力を要することです。「はい、そうです。確かにあなたは私にそうして下さいます。有り難うございます」と求めることは、魂が健康でなければ出来ません。内なる人を強くし、イエス・キリストを心の内に住まわせて、愛に根ざし、愛を基として生活させ、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さを理解させて下さいます。

人間関係でもそうですが、生活を共にすると口でいちいち説明の出来ないことまで全部知る訳で、イエス様を心に宿し、主人公としてお仕えして行くと、イエス様がどんな方であるかよく分かります。何も聞かなくても「成るほど」と分かって来ます。

昔、いろいろな師匠について修行する弟子たちは、最初は水汲み、薪割り、子

守り、炊事、洗濯などしたものですが、今頃は「そんなことで人の訓練が出来るものか。それよりも立派な教室でも作り、教材を充分に準備して、大勢一緒に教育したらよい」と言います。

しかし昔のように生活を共にして絶対服従を修行することは、必要なことであって、それによって主人を知り、また従うことを訓練され、その上に本来の技術なり、武芸なりを受け止めていった訳です。

「広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、人知をはるかに越えたキリストの愛を知り、神に満ちているもののすべてをもって、満たされる」―――この順序に意味があると思います。私たちがイエス・キリストの愛を知ることによって、神様のすべてを満たして頂くことが出来ます。

【「知る」は「領る」】

◆2ペテロ1章 2/3節。「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである」とあります。

神様とイエス様を知ることによって、恵みと平安ばかりでなく、いのちと信心（敬虔）とにかかわるすべてのことが、私たちのものになると記されています。何でもそうですが、何かを自分のものにしようと思えば、まず見学をします。そしてやり方を習って、言われた通りにしているうちにその奥義を自分のものにして行くことが出来るようになります。

イエス様を知ることは、イエス様によって恵みと平安を豊かに満たされ、またいのちと信心にかかわるすべてのことを与えて頂くことになります。

辞書をひいてみますと「知る」ことと「領（し）る」は同じ意味で、「知る」ことはすなわち「自分のものとする」ということになります。信仰の上でも、イエス様を知ることは、イエス様のご性質にあずかることで、神様のすべてを知ることは、そのうちに満ちているすべてのものを知り、私たちのものとすることになります。

師匠に弟子入りした人が、師匠のことを知り、いろいろな技術を知ります。習っているうちにやがてそれを自分のものとして跡を継ぐようになって行きます。「お前もひとつこれをやってみなさい」と大事な仕事を任せられるようになりますし、そうして行くうちに師匠以上のものを生み出して行くことになります。伝統の世界ではよくあることです。

神様は私たちに対して、きちんと説明をして「分かったか」と言われる訳ではありません。人の知恵では訳の分からないようなことを言われるかも知れません。（人間の知恵で神様を知ることは許されません）。この点では昔の職人が弟子を養成するのとよく似ています。黙って理屈抜きに習わせます。「駄目なものはもう駄目」と言われているうちに、ある時、悟ってそれを自分のものとして行く訳です。

◆そのあとには大変素晴らしいことが書いてあります。2ペテロ１章４節に、「また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである」です。

この世は、私たちを欲のために滅ぼそうとして盛んに働いて来ます。私たちはそれ程危険を知りませんので、気安く何でも触れて行きますが、霊的に見ると非常に危ないものがたくさんあります。そういう中で清く守られ、しかも神様の性質にあずかるようになるとは、実に驚いたことです。

神様と共に生きると言いますと、人が一生懸命に努力して何も悪いことをしない、他人を感心させるような生活と思いますが、自分の努力によるのではなくて、実際に神様のご性質にあずかってしまうのです。私たちの主人公が入れ代ってしまう訳です。自分という主人が相変らず王座にすわって、神様の言われる事を聞いて、「じゃあ、少し良いことをして見ようか」と考えるのではありません。私たちの中身が変ってしまって、イエス様が主人公となって、私たちを生かして下さいます。

それは私たちが操り人形のようになって、何も考えずにフラフラ生きる意味で

はありません。私たちはちゃんと人格を持って生かされており、ご主人のお言葉に従って私が決断をして生きて行く———それによって、神様は私たちをご自分のみ心を行う者として下さいます。また私たちの祈りに答えて、ご自分の力を現して下さいます。

更にそのあとに、「信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい———」とありますが、こうしていく時、私たちは「イエス様を知る知識について、ひとつも欠けることはない、身を結ばない者とならない」と言われるのです。

イエス様を完全に知って実を結ぶ———イエス様が主人公となって下さって、イエス様がなさったように神様の栄光があらわれます。私が良いことをして見せるのではなく、イエス様が働いて下さるのです。ある所には、「キリストに従う者には、キリストの香りが放たれる」と書いてあります。それは命の香りです。説明は出来なくても、「あの人は確かに主と共に生きている人だ」と分かってきます。

その土台は10節、「兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない」です。私たちが自分の身分を自覚することは、すべての行動の出発点です。それがはっきりしなければ何をしてよいか分かりません。神様は私たちを愛をもって召し、実を結ばせようとして下さっている、と自覚してお仕えして行くと、神様はご自分を知らせ、そのご性質を満たし、必ず実を結ばせて下さると言われるのです。

◆エペソ１章 15/23節、朗読。23節、「この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない」とあります。

教会の頭としてイエス様が与えられました。私は二重三重に円を描いて見ましたが、神様は確かに宇宙の果から、人間の小さな体の細胞の世界、また遺伝子の世界、もっと小さな世界に至るまで全部ご支配になっていらっしゃいます。その

全部のうちに命を満たし、あらゆるもののうちにすべてのものを満たしておられる方が、また私たちのうちに満ちみちて下さる―――これはもう表現の仕方がありませんが、それが教会であると言われます。
私たちは教会の構成分子として、私たちのうちにも神様が同じようにすべてを満たしておられます。それは丁度、私たちの体を構成する50兆個の細胞のひとつひとつに厖大な遺伝情報が詰め込まれているのと同じようなものです。
1個の細胞は非常に小さいものですが、決していい加減に造られているものではありません。極めて精巧なもので、その素晴らしさは想像する事も出来ません。

◆神様が私たちの主人公となり、私たちにすべてのものを満たして下さっているのですから、私たちはもはや治外法権―――これだけはちょっと神様にも公開出来ませんというもの―――を持っていることは出来ません。神様は皆知っておられますが、隠そうとするものを「見せなさい」とはおっしゃいません。しかしその部分は神様のご支配が出来ないようになってしまいます。神様を締め出すと私たちは不幸になります。
ですから、私たちはすべてをご存知の方に対して、すっかり裸になってしまうことです。すると神様が主人公となってご支配になって下さいますから、非常に楽になります。
犯罪捜査などで、被疑者が調べられるとき、最初は嘘をついて非常に苦しんでいますが、どこかで話の辻褄が合わなくなって、遂に「恐れ入りました。実は―――」と全部白状してしまうと、非常に楽になって、その晩はぐっすり眠るそうです。
私たちは犯罪者とは違うと思いますが、神様の前に治外法権を作って、「これだけは隠しておこう」とやっていると、いろいろすり合わせが大変になってきます。「ここは神様に従ったことにしておこう」、あるいは「ここは内緒」「ここは別」と、そんなことをしていますと、本当に大変になってしまいます。
私もかつてはそんなことを考えていましたが、神様の前には隠れる所がないと知って、全部裸になってしまいました。すると神様が責任を持って下さいました。

自分のことを考える必要がなくなりますから、神様の御旨に従ってどんどんとやって行けばよいので、非常に積極的になります。

人間は「細く長く」とか、「太く短く」とかいろいろ考えますが、なかなか計画通りにはいきませんから心配が絶えませんが、それも全部明け渡して神様が知って下さるということになると、太かろうが、細かろうが、長かろうが、短かろうが私とは関係がなくなります。私は力一杯を尽くして行くだけになります。すると神様は確かに新しいことを行って下さいます。まだ結果まで見えなくても非常な確信を与えられます。ある人は「私の目の黒いうちに」などと言いますが、私はたとえ見届けなくても大丈夫、神様はそのあとにでも必ずやって下さるのですから、今は私がここで力を尽くすだけとなります。そうなると、恐ろしいものはなくなってしまいます。

聖徒パウロは実にしぶとい生涯を送りましたが、私が神様に対して力一杯従って行くと、聖徒と同じようになってまいります。個人々々は違う点も勿論ありますが、道筋は同じであることを悟らせて頂くのです。

◆エペソ3:19、「人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る」———

御霊の祈りは、私たちに対する悲願のように、何とかして満たそうとしておられるのですが、私たちの方がいろいろな妨げを置いて拒むことがあります。それが「苦い根」です。このうちにはすべての毒素が隠されています。それはイエス様のうちに知恵と知識とのすべての宝が隠されていたのとは逆です。この毒素はいろいろなものを汚し、人のうちに悪いものを注入します。良いものを拒み、私たちが満たされようとすると妨げて来ます。

ですから神様は、私たちの苦い根を取り除こうとして下さいます。私たちが「これはいけない、主イエスよ、御血によって清めて下さい！神様、いま離れます！」と自分に死ぬと、ポロッと悪の根も死んでしまいます。こちらが生きていると悪の根は寄生してグングン伸びますが、私たちが死ぬと彼も死んでしまいます。

寄生虫は主（ぬし）の体についてそれから養分を吸収して生きています。ですから宿主（しゅくしゅ）が死ぬと死んでしまいます。ただ付着している小判鮫のようなものは、主が死ねば離れて行って他のものに着きますが、体の中に寄生している虫は、主が死んでしまえば死ななければなりません。

同じように私たちがイエス様のお言葉、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とあるとおり、己に死んでしまいますと、寄生根（苦い根）は生きることが出来なくなってしまいます。

今年、神様は何としても私たちの内にご自分のすべてを満たそうと願って、これを受けてほしいと願っておられます。その時、私たちが苦い根をもって、「そんなことをおっしゃっても、私は100%開放する訳にはいきません。ここは私の大事なもので、あなたには見せられません」と言うと、それが残されてしまいます。根が残るとまた生えて来ます。どんなに草の芽を積んでも根が残っていれば生えて来るように、その根が生きていればどうしても私たち自身が苦い実を刈り取らねばなりません。

イエス様は、私たちのために十字架にかかって死に、私たちを生かして下さいました。「有り難うございます」と私たちがイエス様の愛を知って、主人公としてお受けする時に、私たちはもはや自分で生きているのではなく、主によって生かされる者となります。するともう寄生虫（苦い根）は寄生することが出来ないで逃げて行ってしまいます。あるいは死んでしまいます。

荒野の試みにおけるイエス様もそうでした。40日40夜、断食ののち悪魔がやって来て、「お腹がすいたでしょう。この石をパンにしてあがってごらんなさい」と言いましたが、「人はパンのみにて生きるものにあらず」と退けられました。

「高い宮の頂上から飛び下りてごらんなさい。神様は支えると書いてあるでしょう」と言って来ます。そのときイエス様は、「『汝の神を試みてはならない』と書いてある」と答えられました。

また非常に高い山の上からこの世のすべての栄華を見せて、「もしわたしをひれ伏して拝むなら、皆これをあげよう」と言います。イエス様は、「『主なるあ

なたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある、サタンよ、退け」と断固として彼を退けられました。悪魔はイエス様に寄生しようとして来た訳ですが、イエス様が完全にご自分に死んで神様のお言葉だけに従われたので、取り付く島がなくなって逃げ出してしまいました。その代りに御使が来て仕えたとあります。

苦い根が溶け落ちて行くと、命の芽が芽生えてきて、豊かな実を結ばせて下さいます。それが一旦成育すると、もはや苦い根がはびこる余地はなくなってしまいます。ある植物が完全に繁り合ってしまうと、他のものが入る余地がありません。雑草が強いと言っても、他のものが完全に張り詰めた所には入って行くことが出来ません。

今年、神様は「今は主のはたらかれる時です」とおっしゃいました。私たちはかつていろいろの苦い根をはびこらせて苦労しましたが、神様が私たちを占領して主人公となり、イエス様に満ちているもののすべてをもって満たして下さると、苦い根は侵入してはびこることが出来ません。今年は神様がそういうことを私たちのうちになそうとして立ち上がって下さいました。

イエス様は「私のために十字架にかかって下さった」とおっしゃるのですから、そのまま「はい、そうです。有り難うございます」とお受けする時に、その事実を知るようになります。考えて分かるのは人間のことであって、神様の場合は考えても分かりません。神様は受ける者に対して次々に満たして下さるのです。これが神様の知恵であり御愛です。ですから私たちはイエス様の愛をお受けして、愛を基として生きることにより、その一つ々々を知り、それによって神様に満ちているすべてのものを満たされ、再び悪の根がはびこって自ら苦しみ悩むことがないように、強固な者として頂きたいと願うのです。

◆エペソ 3:20/21、「どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたに、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように、アァメン」───私たちがお言葉に従って行くと、神様は私たちの想像をはるかに越えたことをなさって下さいます。それはその筈です。神様の

道は人間の道よりもはるかに高いからです。

私たちは「よく分からない」とか「痛い」とか「苦しい」とか「嫌だ」とか考えますが、神様ははるかに高いことを準備して下さって、私たちのうちに満たして下さいます。するとすべてのことを知って、「なるほど、これは素晴らしい。あんなことを言って申し訳ありませんでした」―――神様の前でヨブが手を口にあてて恥じたように、私たちがツベコベ言っていると、あとから恥じなければなりません。恥じるだけならよいのですが、ザカリヤのように、「そのことが成るまで物が言えなくなる」と言われるかも知れません。神様は刑罰を加えられる訳ではありませんが、「恵もう」とおっしゃっている時に、「いや、そんなこと」と言っていれば、口を封じられるかも知れません。

しかし考えて見れば幸いなことで、旧約時代でしたらツベコベ言う者はパチッと滅ぼされるところでした。そんな時代に生きていたら私たちは大変ですが、今はイエス様の憐れみによって、神様は私たちを罰することが出来ません。私たちのすべての罪はイエス様の上に加えられましたから、「お前に加えるものは何も無い」とおっしゃいます。しかし「憐れまれるから、何をしてもよい」ということは出来ません。むしろ慎んでお従いするのが私たちの道であります。

御霊の祈りは、「神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように」であって、これは私たちに対する御旨ですから、そのままお受けして、「有り難うございます。こんな者のうちに神様のすべてを満たすとは！」とお受けする。

またペテロ第２の手紙にあったように、「神の性質にあずからせる」とおっしゃるのですから、「何という驚いたことでしょうか、有り難うございます」とお受けして、再び苦い根で苦しまないように、むしろ神様の命の恵みによって生かされ、癒され、人をも慰め、あるいは生かすような、そういう生涯を送る事が出来たら、どんなに感謝でしょうか。これは神様の喜びたまうところでもあります。

◆エペソ3:21、「教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように、アァメン」とあります。

私たちの言うことはこれだけになってしまいます。「神様はほむべきかな。神様は素晴らしいことをして下さった」とほめたたえるだけです。

クリスマスの夜、天使たちの歌に、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」とあったとおりです。それが神様の最終のご目的です。

今晩、私たちはこんなに大きな熱い思いをもって満たそうとしておられるお言葉をそのままお受けして、処女マリヤのように、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」とお受けしたいと思います。苦しいことを与えようとされるのではなく、素晴らしいことをして下さるのですから、なおさら私たちは喜んでお受けして、神様の前に明け渡す者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　(1991.1.4.19:00 聖会12)

第１３回〈1991年1月5日、午前10時〉

心を全うする者の為に力をあらわす

（祭司の祈りを求められる）
（聖書＝歴代志下第１６章9節）

【神様の目からは愚かなこと】　１８３

【心を全うする者のために力をあらわす】　１８４

【アサ王に臨んだ戦争とは】　１８４

【当り前であるかないか】　１８５

【主の足跡に倣ってほしい】　１８６

【最も勝れた大祭司】　１８７

【主に倣うことの第一は執り成しの祈り】　１８８

【他の神を選ぶ者は悲しみを増す】　１８９

【お祈りに必要なこと】　１９０

【人の祈りと神様の働きの関係】　１９１

【多くの人の命を預けられている】　１９３

「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」(歴代下16:9)

◆ユダの王アサは41年という長い王位についておりました。その終り頃になって、イスラエルの王バアシャが攻めて来ました。イスラエル王国も同じヘブル民族ですが、ソロモンの死後、神様によって南北に裂かれたものです。バアシャはユダに向かって攻め上り、エルサレム(アサの王都)への交通を遮断するためにラマ(要塞の町?)を築きました。

そこでアサ王は、「これは大変だ。そんな近い所に、敵兵に立て籠られてはたまらない」と、イスラエル王国の背後にいるスリヤの王ベネハダデに金銀を送って同盟を結び、「イスラエル王国の背後から攻撃をしかけてほしい」と頼みました。遠交近攻という訳です。

ベネハダデはアサの言うことを聞いて軍隊を出し、イスラエルの町々を後ろから攻め、イヨンとダンとアベル・マイムおよびナフタリの倉の町々を攻撃しましたから、バアシャはラマの建設を中止して急遽引き返しました。そこでアサは全国の人々を引き連れて、ラマの建設資材を運ばせイスラエルに備えてゲバとミツバという要塞の町を建てました。

これは外交戦略としては成功でした。しかし神様の目には良くありませんでした。神様は先見者(預言者)ハナニを派遣して、アサ王にきつく注意をされました。「あなたはスリヤの王に寄り頼んで、あなたの神に信頼しなかった。あなたは若い頃、エチオピヤ人ゼラが 100万の大軍と 300の戦車を率いて侵入して来た時、『主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることはありません――あなたはわれわれの神です。どうぞ人をあなたに勝たせないでください』と一筋に信頼して神様によって大勝利を得たではないか。それであるのに、今回は人間に頼った。あなたは愚かなことをした、この後、あなたに戦争が臨むであろう」と言われました。

アサが誤ったことは、

※スリヤを頼み、神様をないがしろにしたこと

※スリヤも主に背く民であって、いずれは滅ぼさなければならなかったのに、大きな借りを作ったので、あなたの手から逃げしてしまった

ということでした。

【心を全うする者のために力をあらわす】

◆このとき神様がお語りになった法則は、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる」という事でした。

これはその時に始まったことではありません。前からそうであって、前回同じアサがこの原則に従って心を全うしたから、神様が力をあらわし勝たせて下さいました。

今回も神様の原則は変りませんでしたが、アサの方が変ってしまいました。神様は外交的な勝利をほめられたのではなく、むしろ厳しく咎められました。「今回はあなたは愚かなことをした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」と宣告されました。

【アサ王に臨んだ戦争とは】

◆預言者からそう言われますと、アサは大変怒りました。昔のアサなら神のしもべである預言者に対して逆らったり、手出しをしたりすることは決してなかったと思いますが、この時のアサはハナニを怒って、「あれを留置場に入れてしまえ」と言いました。ハナニは捕えられました。「あんな奴の首を切ってしまえ」と言いたいところだったかも知れませんが、そうまでは言いませんでした。

またその頃、民のある者をしえたげたと記されています。神様のご支配になっている国において、王様が自分の権力をほしいままにすることは不幸のもとです。「あなたに戦争が臨む」と言われた「戦争」とは、外からの戦争ではなく、彼の内から起る戦争でした。先見者を投獄し、国民をしえたげました。

更にもっと身近な戦争が彼の体の中から起りました。詳しいことは分かりませんが、足にひどい病気が起りました。大変激しいもので、翌々年にはそのために亡くなりました。その時にも魔術師を求めました。医者と書いてあるのは当時の魔術師だそうです。まじないや魔術を求めることは、神様が最も嫌われることで

した。こうして彼は著しく神様から離れて行きました。はじめは立派な王とされていましたが、最後はこのように惨めに終ったのです。

これを見ると、神様の法則は、「この人は良い人だから、何もかも良しとしよう」というものでないことが分ります。また逆に、「この人は駄目だから、何もかも駄目だ」ともおっしゃいません。神様はご自分の原則をきちっとしておられます。それにかなうならばよろしい、かなわないならばお叱りを受けることになります。これは私たちも戒めとしなければならないところです。

【当り前であるかないか】

◆今年の標語、「今は主のはたらかれる時です」とある今の時、今の所はどういうものでしょうか。要するに私たちが今ここに置かれているのは当り前ではないということです。私がここにいる、これは当り前と思います。何十年か前に生れて、スーッと生きて来た、特に病気も怪我もしなかったから何とか生きている、これは当り前と思う。心臓は動いているのが当り前、あるいは冬に寒くなり、雪が降るのも当り前———このように思いますが、みな当り前ではないと教えられました。実はそうでない筈の者がそうされていると分ったのです。

その一方で、そうである筈の方が筈でなくなっています。丁度、シーソーの片方が上るともう一方が下がるようなものです。それは誰かと言えば、イエス様が私たちのために十字架にかかって死んで下さったことです。私たちのすべての病も悲しみも痛みも苦しみも背負って下さいました。このことはイザヤ書53章にはっきりと預言されています。

福音書を見ると、イエス様がどんなにお苦しみになって十字架にかかって下さったか、私たちのために、「父よ、彼らをゆるしたまえ」と祈って下さったかがはっきり分ります。

神の子の位を保つ筈の方が、その位を捨てて人となり、私たちのために死んで下さった———このことが一方にある訳です。それによって、神様に背き、世に流され、救とは縁のなかった私たちが顧みられ、病も罪も苦しみも悲しみも、全部取り除かれて、毎日感謝して生きることが出来るようになりました。

ある人が、「天国」と「地獄」とはどんな所か話していました。それによると、

「天国」とは、自分が入る筈でないと思っている所へ入れられて感謝している所、逆に「地獄」は、「私は大体もっと良い所におるべき筈の者なのに、こんな所に置かれて、まだ不足だ、もっとどうにかしてくれ」と言っている所だそうです。本当にそう思います。「筈であるもの」と、「筈でないもの」の関係ーーー私たちが神様から捨てられて、自分の蒔いた種を刈り取って苦しみ、滅びて当然な所を、イエス様がすべて背負って下さって、私たちが救われたのです。

◆中央の標語、「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」ーーーこれは神様が私たちに対して模範を示しておられるのです。すなわち「イエス・キリストの足跡に倣ってほしい」ということです。イエス様は理想の人間像です。イエス様は神の子の位を捨てて、私たちのために地上の、しかも最低の所に生れて下さいました。クリスマスの時にいつも読みますように、馬小屋の飼葉おけの藁の中に生れられました。旅館の部屋には彼らの入る余地がありませんでした。

それはたまたま混雑していたから仕方なくそうなったのではなく、神様が最も低い所に神の子を遣わされたしるしでした。御使も、「幼な子が布にくるまって飼い葉桶の中に寝かせてある。それがしるしである」と言われました。それには神様の深いみ心が込められていた訳です。

Oさんのお家のカナ（犬の名前）は今、専用の毛布の上に寝ています。しかしイエス様は毛布もありません。粗末な布に包まれて、飼い葉桶の藁の中に横たえられました。これは人間の世界でも最低の線です。イエス様はここまで下って、私たちのために死んで下さいました。

生れて来る子供は健康に育ってほしいと、どこの家庭でも一生懸命に育てられます。しかしイエス様は、健康になり幸福になるためではなくて、私たちの罪の身代りとして死ぬために生れて下さいました。そんな人は誰もありません。イエス様は私たちのしもべとなって仕えて下さいました。最後の晩餐の席で、イエス様が弟子たちの足を洗われたのはその証拠です。「あなたがたはこの意味が今は分らないが、あとで分る」と言いながら弟子たちの足を洗って拭かれました。神

の子が弟子たちの泥足を洗われました。

これは私たち全体の者の泥足を洗い、汚いものの始末をして下さるために来て下さった証拠です。ちょっとジャスチャーをして見せられたのではありません。実際に私たちのために十字架にかかり、最後まで苦しみ抜いて死んで下さいました。本当に自分の身を投げ出して実行されたのです。

それによって私たちは今、神様からすべての罪を許され、すべての病を癒され、こんにちのように支えられています。イエス様は今、私たちの目には見えませんが、神様の右にあって永遠の救主として絶えず執り成しをして下さっています。

◆ヘブル7章 22/25節、朗読。ここに、「しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」とあります。

イエス様は大祭司です。昔、神殿（会見の幕屋）で神様と民との間に立って執り成しをする人が祭司でした。神様のみ心を受けて民にこれを伝えます。また民の願いを神様に取り次いで執り成します。昔の祭司は人間ですから、次々に年を取って死んで行きますから、代りの人が立てられます。

しかし今はイエス様がただ一度十字架にかかって死んで甦られ、永遠の大祭司として神様の右に座っておられます。そういう方があることが私たちにとって最大の恵みです。旧約時代の会見の幕屋（神殿）における様々な制度は、完成された真理のひながたであって、天の幕屋においてイエス様はまことの大祭司となって下さいました。

ヘブル8章 1/2節に、「以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである」とあります。私たちのために、このような大祭司（イエス様）がおられるということが、私たちの福音です。

7:25に、「彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼

によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」―――これは、人間には出来ないことです。どんなに完全看護の病院と言っても、ベルを押してすぐ来てくれる訳ではありません。来られない時もあるでしょう。

しかしイエス様は、いつも私たちために生きていて、体も魂も全部支えて下さっています。こんな素晴らしい霊の看護人はありません。たとえ宇宙の果に行っても届く方です。どんな真夜中でも届く方です。どこの医者に見せても分らない奇病になったとしても、イエス様はそれを知り尽くし、また癒すことが出来る方です。こうして神様の所に来る人をいつも、極端にまで救って下さいます。

イエス様は私たちと神様の仲立ちをして下さる方ですから、私たちが「イエス様の名によってお願いします」と言うとサッと神様の所に届きます。またイエス様からサッと救がやって来ます。イエス様は「パイプ」と言っても良いかも知れません。電話線のように「線」と言うことも出来るかも知れません。こちらから話をすると、向こうからも来ます。祭司は神様と私たちの間を取り持って下さる―――それがイエス様のご生涯です。

◆私たちは今、イエス様によって天国の子供とされ、守られています。そしてイエス様は、「わたしの足跡に従ってきなさい」と求められています。中央の聖句はそのお勧めでもあります。

ではイエス様の足跡に倣うためにはどうしたらよいか―――それは私たちがイエス様の恵みにより、多くの人たちの執り成しによって救われたのですから、今度は多くの人々のために、神様の前に執り成し祈ることです。

テレビ番組などを見ていますと、「―――お祈りします」と気安く言う人がありますが、私は思わず「誰にお祈りするのですか」とテレビに問い掛けたいような気がします。言っている人は「そう願っています」という軽い気持でしょうが、あまり気安く言ってもらっては困ります。神様に向かって、しかもイエス様の名によってお祈りするのでなければ、単なる願望にすぎません。「―――なったらいいなあ」というぐらいのことで、決して力はありません。私たちはイエス様のお名前によって、罪が許され、今保たれています。イエス様のお名前によって多

くの人々のために祈ると、祈りに答えて神様の御旨が行われます。

救を知らずに苦しんだり迷ったりしている人は多いものです。

◆神様は、「わたしの所に来るには、イエス・キリストという道しかない（ヨハネ14:6）」とおっしゃっているのに、他の道を選ぶと、（一時的に良いように見えても）いつか後悔しなければなりません。人は神様の前に立って（必ず一度）裁きを受けなければなりません。いろいろな他の道を通っている人も、最後はこの神様の前を避けることが出来ません。それは駅のホールにたくさんの人がいても、改札口を通る時は一列になるようなものです。定期券を見せるなり、切符を出すなり、乗車証明書を貰うなり、とにかくひとりづつ通らなければなりません。

「『分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな』と言うではありませんか。私は一生懸命精神修養したからいいでしょう」と言っても、それは通じません。神様は、「イエス・キリストを十字架につけ、信ずる者の罪を許す」という道しか設けられませんでした。ですから他の道を選べば必ず後悔しなければなりません。

聖書に地獄の模様が書いてある所がひとつあります。それはルカ16章です。ルカ16章 19/31節、朗読。この愚かな金持は、神様から預かった物を、自分の物のように誤解しました。その報いを受けたのです。

※わたしは火炎の中で苦しみもだえています。ラザロの指先を水に浸し、私の舌を冷やさせて下さい→大きな淵が置いてあって越えることが出来ない

※父の家へラザロをつかわして、兄弟たちに警告して下さい→教会があり伝道者があって福音が語られている

※死人のうちから復活した人が行けば驚いて聞くでしょう→聖書に聞かない者は聞き入れはしない

と何ひとつ受け入れられませんでした。

私たちは、「日本にはいろいろな人がいる。勝手なことをしたければ、させておけばよい」と思いますが、本当はそうでありません。彼らもまた神様の前に立って裁かれることを知るならば、それに耐えられるように、はっきり罪の許しを

頂かなければなりません。それ以外に死の淵を乗り越えることは出来ません。いろいろな方の最後の様を見聞きすると、「私は業が深くて死ぬに死なれません」と苦しむ人がたくさんあります。

自分のやって来たことは、丁度ビデオを回すように神様が全部知っておられます。心の思いまでも映すビデオです。ですから曖昧ではすまされません。必ず神様の裁きの前に立たなければならないのですから、祈る時にはそのことを祈る——何としてもイエス様の十字架によって罪が許され、神様の前に立つことが出来るように、そして神様の前に終りを全う出来るようにと祈るのです。アサ王のように、最初は良かったが最後に惨めになってしまってはなりません。

◆お祈りする時に何が必要でしょうか。大きな声を出さなければならない訳ではありません。徹夜の祈祷会や連鎖祈祷会をする人がありますが、それだからと言って神様に届く訳ではありません。

歴代下16:9、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」とあります。

心を全うするとは、神様を全面的に信頼することです。それは自分の心のうちにある「人間の常識」によらないということです。更に言い換えますと、「苦い根がはえ出て、あなたがたを悩ます」ことのないようにする事です。自分の考えをもって、神様にちょっとお祈りしてみようか———おまじないを唱えるように「ムニャムニャ」と言ってみる———これでは聞かれません。心を全うするとは、神様が約束して下さったら、必ず答えられると信用することです。そうすると神様が力をあらわされます。

マルコ11章には、「だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう」と言われています。

これは大変なことです。どんなに自分が考えても山が海にはいるとは思われません。しかし神様を信ずる———「神様のみ心ならば、たとえ山が海にはいる事

もたやすいことです。神様は一言をもってすべてのものをお造りになった方であって、出来ないことがありません」と信頼する――ある所には、「このたぐいは祈りと断食によらなければ決して（悪霊が）出ない」とありますから、神様を信用して心を全うするならば、必ず力をあらわして下さいます。神様がみ心を遂げようとしておられるのですから、私たちが「そうして下さい。あなたはどんな事でもできる方です」と信じて求めるならば、「よし」とご自分の力をあらわされます。

◆１ヨハネ 5:14/15、「わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである」とあります。

自分で頑張って、「この山が動くと南側の日当りがよくて都合がよいから、どうぞそうして下さい」――これは出来ません。神様の御旨に従って願い求めるのです。「神様、あなたは天を裂き、地を震い、あなたが神であることをあらわすとおっしゃいました。どうか、あなたの力をあらわして下さい。そして、すべての人の心を翻すことをあらわして下さい」とエリヤのように祈ると、エリヤの時のように明らかに答えられます。

私たちが神様の御旨に従って祈り、すべての民がこの救に入れられることは、神様のみ心ですから、それを求めて行くなら必ずご自分の力を発揮して下さるのであって、これは百発百中です。

神様は「私たちが求めるとそれに答えられる」というよりも、神様はご自分が実行しようと思っておられることを、私たちの祈りに答える形で行われます。神様の力と人間の祈りの関係はそういうものであり、ここに道筋があると教えられました。

私たちが祈ることによって、神様が「それでは、そんなふうにしようか」と答えられる訳ではありません。神様が「こうする」とおっしゃることを、「神様、そうして下さい。あなたのみ心です」と求めるから、実行されるのです。むつか

しいことはありません。これなら必ず遂げられます。

神様はご自分のみ心を行われるにあたっては、ひとりも滅びないように、忍耐をもって待って下さっています。２ペテロ３章には、「一日を千年のように、しかし千年を一日のように」忍耐しておられると書いてあります。ですから私たちは、「神様、どうぞ、この忍耐しておられる間に、一人でも多くの魂が救われて、あなたの渇きが癒されるように」と求めるならば、神様がどうして答えられないでしょうか。「いまこの時にあなたがたが求めるならば、神様が答えられないと、どうして知るだろうか」とあるとおりです。「今、この時のために、私はこの人のためにまいりました」と言う信頼に対して、神様は必ず答えて下さいます。

私たちは自分の願いを無理やりにお願いする訳ではありません。神様の御旨が成るようにお祈りするのですから、遠慮することはいりません。ある所には、「あなたがたの天幕を張り広げなさい」と言われています。天幕は支柱を立てて両側に綱を張って土に支柱を打ち込みますが、引っ張り方が足りないと中が狭くなります。ピンと張れば大勢の人が入れます。また立って歩くことが出来ます。そのように、「あなたがたも祈りの天幕を広げなさい」と言われます。私たちが大言壮語するためではありません。「ひとりでも」とおっしゃる神様のみ心が行われるようにと祈るのです。

ある所には、「国の半ばでも与えられる」とあります。何百州という州のある大王が、「半分与える」と言うのですから大変ですが、神様はどんな偉大な王様よりも偉大な方です。世界の造り主であり、宇宙の支配者です。ですから、私たちが求めるなら神様はご自分のすべてを傾けて祈りに答えて下さいます。

これは空想ではありません。実は人間が造られたはじめ、神様から与えられた使命でした。「すべてのものを統べ治めさせる」と言われました（創世記１章、参照）。神様が力を発動され、すべてのものが生かされ、すべてのものが恵まれるように、すべてのものがそれぞれの所を得て、神様の前に使命を果すことが出来るように、と祈る――私たちの使命ですから遠慮することはいりませんし、「一度祈ったからもうこれでよい」ということも出来ません。何度でも繰り返し祈るべきではないでしょうか。

ソロモン王に対して、「何を求めるか」と言われた時、ソロモンが「この国を治める知恵を与えて頂きたい」と求めたように、私たちは「神様の御国が、神様によって統治されて、神様のお名前が崇められるように、どうぞ私の祈りに答えて下さい」と祈るのです。この祈りは必ず答えられます。ソロモンが神様からほめられたように、私たちも神様からほめられるのです。

◆1テモテ 2:1/5、朗読。ここに「まず第1に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい———」とあります。

「まず人のためにお祈りしなさい。それによってあなたがたは敬虔と謹厳とをつくして、安らかな静かな一生を過ごすことができる」———神様は私たちに対して良いことを勧めておられます。「まずお祈りすること」が私たちの務めであるならば、これを怠ることは出来ません。預言者サムエルは、「わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしない」と言っています。

私たちの祈りが聞かれ、神様によって多くの人の命が支えられているとすれば、私たちが祈りをやめることによって、人の命が危険にさらされます。ですから私たちは祈りをやめることは決して出来ません。

昔は潜水作業をする時、空気パイプを持って潜っていました。船上で手押しポンプをついて空気を送る訳です。その時、ポンプをつく人は必ず潜水した人の身内であったと言われます。それはたとえどんな事があっても、身内のためにポンプを押す手をとめないためであったと言うことです。

私たちが今、多くの人のためにお祈りする時、神様の命の息は私たちの祈りのフイゴを通して送られるものであると思います。ですから私たちがもしお祈りをやめて、「もうあの人のことは知らない」と言えば、それぎりその人の命はなくなるかも知れないのです。神様から捨てられると言っても、霊的な問題だから体は何ともないだろうと思いますが、そうではありません。魂の祝福を失えば肉体も滅びます。私たちは今、そういう重大な使命を与えられていると教えられまし

た。厳かなものです。

天国の鍵は、「あなたがたが罪を定めるなら、天においても定められ、あなたがたが罪をゆるすなら、天においてもゆるされる」というものですが、それに私たちの祈りが直接関与していると知ると、決してやめることは出来ません。これは義務というよりも、緊急事態であり、人の命を預かっている状態です。医者が患者の人工呼吸器を粗末に扱うことは決してないと思います。むしろ少しでもミスがないようにと、細心の注意をはらいます。空気のコックの切り替え角度を間違えて、ほかのガスが混入して死亡したなどという事になれば、重大な責任を取らされますから、一生懸命に医療行為をしますが、私たちは医療行為よりももっと責任の重い立場に置かれていると教えられました。

歴代下16:9、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」―――

今年は主が働いて下さるのです。その主の働きに私たちの祈りのフイゴや祈りのポンプが介在しています。ですから私たちはもう一度神様の前に心を全うして祈りたいと思います。

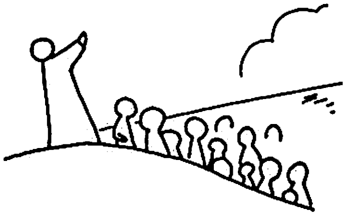
神様は、はなはだ枯れた骨を生かして、神の大群衆とされました（エゼキエル37章、参照）。私たちは少し困難な状態を見ると、「こんな人は救と縁がないのではないか」と思いますが、神様には出来ない事がありません。神様は「息を送って生かすのがわたしの心である」とおっしゃるのですから、祈りは必ず聞かれます。

私は今日、もう一度、姿勢を整え神様に向かって心を全うしたいと願います。神様はみ心を行われます。み心に従って求めるなら必ず聞かれます。私が良いとか悪いとか、出来る出来ないとか、信仰年限が長いとか短いとか、そんなことは関係がありません。神様の法則は、神様のご意志と力によって動かされます。

私たちが恵みの時代に置かれるだけではなく、多くの人も置かれるのが御旨ですから、そのことを祈り求めたいと思います。そうして行くとき神様は喜んで下さいます。大いに口を開き、大いに渇き求めたいと思います。

満員電車に乗ろうとして、入り口では「押せ押せ、もっと詰めろ」と言っていた人が、一歩中に入ると、「もう入らんぞ」と言う――これはよくあることですが、私たちは神様の前にそういう事をせず、あくまでも信仰をもって祈る者でありたいと願います。電車には限界があるかも知れませんが、天国にはたくさんの家が備えられていると書いてあります。ですから「神様、どうぞあなたの御旨に従って、すべての民を救にあずからせて頂きたい」と祈りたいと願います。それは私たちの祝福にも直結することです。ご一緒にお祈りしましょう。

(1991.1.5.10:00 聖会13)



第１４回〈1991年1月5日、午後2時〉

自ら敬虔を修行せよ

（自覚と任命の関係）

（聖書＝テモテへの第１の手紙第４章７／９節）

【自ら敬虔を修行せよ】　１９９

【修行（訓練）の益】　１９９

【永遠の命の約束】　２００

【主は自分の者たちを知る】　２００

【主に倣うとき苦い根は除かれる】　２０１

【つもりと本番は大違い】　２０１

【英国の影の内閣】　２０２

【今置かれている本番とは？】　２０３

【背水の陣】　２０５

【自分の責任で歩くほかはない】　２０５

【神様はタバコをやめさせて下さるでしょうか】　２０６

【あなたの信じた通りになる】　２０６

【神様の訓練を進んで受ける】　２０７

【神様から叱られるように努力している？】　２０８

【自分を清めるとは？（尊い器になる方法）】　２０８

「信心（敬虔）のために自分を訓練しなさい。からだの訓練は少しは益するところがあるが、信心（敬虔）は、今のいのちと後の世のいのちとが約束されてあるので、万事に益となる」（1テモテ4:7/8）

【自ら敬虔を修行せよ】

◆ここに「信心」という言葉が繰り返して出て来ますが、辞書によりますと、「信心」とは、「神仏を信仰して祈念すること、またその心」と書いてあります。私の印象では、何か分からないけれどもとにかく頭を下げようというような、はっきりしない感じがいたします。

昭和29年ですか、新約聖書の改訳が出た時、（文語訳の）「敬虔」に代る適当な言葉がなく、「信心」になったのではないかと思います。「敬虔」は、現代語としては少しむつかしいのですが、「敬い慎むこと」で、神様に対して「恐れおののいて従う」という意味です。「そのために自分を訓練しなさい」と言われています。

【修行（訓練）の益】

◆自分のしたいままで楽をしていては訓練になりません。やりたくない、苦しいのを乗り越えて努めるのです。学校の生徒は試験を嫌います。「試験なんかなければよい」と思いますが、先生は必ず試験をします。そしてその機会にギュウギュウと勉強をさせ、成績が悪ければ叱って励まします。そうした中で必死で勉強したことが身につきます。

スポーツの訓練でもそうだと思います。最初は何も分りません。道具を持って驚いている、そういう状態から、見よう見まねで始めてやっているうちに本気になって来ます。「お前はきっと良い成績が取れるようになるから、一生懸命にやりなさい」と励ます。それでも大選手の多くは何度かスランプを乗り越えて来たと言います。

体の訓練にしても、何か物を造るにしても、きびしい訓練をうける事は、たしかに益があります。大きな栄誉を受けるかも知れません。しかし神様を敬い従うことを訓練されると、神様から「今のいのちと後の世のいのち」を間違いなく与えられるというのですから大変なものです。

「神様を敬ったり仕えたりすることは心の問題であって、体とは関係がない」と考える人がありますが、そうではありません。私たちが神様に仕え、イエス様の血によって罪が許され、「よし」とされ、祈りによって多くの人々の命に係わる御用をするならば、神様から大いにほめられ喜ばれます。私たちの祈りに答えて、多くの人が恵まれ生かされるだけではなく、私たち自身が神様から報いを受けます。「敬虔は――万事に益となる」と記されています。

【永遠の命の約束】

◆宇宙カレンダーというのがあります。このカレンダーで1年とは、宇宙が始まってから今までの年数(150億年?)です。するとその中でいろいろなものの長さが決められます。たとえば人間の一生を 100年としても、わずか 0.2秒です。アッという間もありません。ですから人生の長さはほとんど意味がなく、ただタイミングがあるだけではないでしょうか。

地上の使命はすぐ終りますから、神様の所に帰ります。使命を終って帰るのですから、知らん顔をされる事はありません。子供をお使にやっても、帰ってくれば「ご苦労さん」と迎えます。神様は私たちを派遣されたのですから、「あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」と天国に迎えられるか、「悪い怠惰な僕」と叱られるか分りませんが、とにかく報いを受ける訳です。

「今のいのち」と言えば、今ここで私たちが報われ、あるいは私たちが祈った人が報われることですが、「後の世のいのち」とは、私たちのために備えられた永遠の命です。勿論、これは肉体の命ではありません。それ以上に素晴らしいもので、神様から永久に覚えられるものです。人間は自分が消え去っていくことに耐えられず、どこへ行くか分らない不安で死を恐れますが、神様から喜び迎えられ、永遠に覚えられる事を知れば死は望みの門となります。

【主は自分の者たちを知る】

◆ある人は子供が生れて以来、写真を撮り続けて、お嫁入りの時に2万とか3万枚の写真を持たせたそうです。これはお父さんにとっても大事な生涯の記念碑だと言われていました。しかしこれもいずれは忘れられ失われてしまいます。

ある人は石を刻みます。石は木や紙よりは長持ちしますが、いつかは崩れてしまいます。聖書にも、「小さな石が一つの石の上に、もう一つ乗っていないほど完全に崩れ去る」と書いてあります。目に見えるものも見えないものもみな崩れ去ってしまいますが、神様から覚えられるメモリーは決して消えません。私たちを「よし」と受け入れて下さったら永久に覚えて下さいます。これが永遠の命です。

お金が儲かったとか、儲からなかったとか言っても、この世のお金は天国では通用しません。健康も重要なものですが、救とは関係がありません。社会事業やボランテア活動、これも勿論、悪い事ではありませんが、神様は「なくてならぬものはただ一つ」と言われます。

「私のために主が十字架にかかって罪を許して下さいました。有り難うございます」――神様の前にはこれだけしか通用しません。これは最も確実で、そのまま信用できるお言葉です。

◆神様の前で自らが責任を持って生きることは、非常に大切なことです。神様は私に呼び掛けておられます。「お前について――今年はわたしが働く時だ。イエス・キリストを見なさい。彼のうちにはいっさいの宝が隠されている」と言われています。

イエス様の足跡に倣おうとする時に、苦い根を持っていてはなりません。イエス様によって罪をゆるされ、生かされている者である事を知ったならば、自分を捨てなければなりません。自分が死ぬと、寄生しているものも死んでしまいます。

私たちが苦い根をどうしても取り除くことが出来ないのは、自分で苦労して取り除こうとするからです。イエス様のお言葉に従って自分に死ぬと、宿っているものも一緒に死んでしまいます。イエス様の足跡に倣うと、イエス様が主人公となって私を生かして下さいます。そうなると苦い根の心配はなくなります。

◆自覚という事を考えて見ましたが、自分でそのつもりになる事と、実際になったのでは随分違います。よく「相手の身になって考える」という事が問題にな

ります。そこで、「はい、では考えます―――うーん、私があの人の立場だったら―――」と考えます。しかしそうして考えて見るのと、実際に自分がその当事者になって考えるのとは、大変違います。

（21年前の交通死亡事故の詳細について―――省略）

だいぶ前から車に乗っていましたが、その瞬間まで交通事故の当事者になるなど全く予想もしなかったことでした。しかし一瞬のうちに加害者(?)になってしまいました。勿論、相手方の過失（飲酒オートバイ）ですから、私の責任は問われませんでしたが、一切が片付くまで随分苦しい思いをしました。これらの事はほんの少し前までは予想も出来なかった体験でした。

私たちが何かを想像して、どれ程真剣にそのつもりになっても、実際になったのとは違います。たとえば「テレホン聖書」の原稿を作る時、ワープロの上で材料を集め、一旦、長い文章を書いて、あとから削り込んで行きます。そして何度も読み返して完全に出来上ったと思い印刷をして、いざマイクの前に立った時、そのまま読める事はほとんどありません。必ず大巾に修正をします。「つもり」と「本番」はそれほど違う訳です。

【英国の影の内閣】

◆２ペテロ１章に、「兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない」とあります。

私たちが自分の身分を自覚するにも、本当にその場に立つのと、そのつもりになるのでは違います。神様は本当に自覚することを求められていますが、人間にはなかなかそれが出来ませんから、時々は逃れられない所に立たせて（私の死亡事故もそうでした）、「さあ大変だ」となって訓練される事があるのではないかと思います。

イギリスのサッチャーさんは先ごろ辞任しましたが、イギリスには表の内閣と影の内閣があるそうで、影の内閣にも総理大臣、外務大臣、大蔵大臣と表と同じ大臣がいて、議会では向い合って討議すると言われます。

影の閣僚たちは、「今ここで私たちが政権を担当してるならば、こうするのだ

と討議をする訳です。国民もそれを見ていてこちらがよいと思えば、次には交代させる訳です。

しかしその際、「我々が政権を担当していれば」と考えるのと、現に担当しているのとは随分違うと思います。サッチャーさんはその意味でフォークランド戦争など、困難な中を11年間も政権を担当して来た訳で、大したものだと思います。

◆この事は私たちについても言えることで、私たちが神様から使命を与えられ、多くの人々の命を預かっている「つもりになる」のと、「実際にあの人の命はこの祈りで支えられている」と祈るのでは随分違うと思います。

そこで神様は時々そういう機会を与えて、私たちに実際の体験をさせて下さいます。人間の世界ならば、あやふやな人に本番を任せたらどうなるかと考えれば、なかなか出来ないところです。

事業をしている人が後継者に仕事を譲る時、どの段階になったら譲ることが出来るか、いろいろ考えると言われます。ここで任せれば、その自覚が出来てやれるようになるのか、それとも「私はすぐにでも代って、やれるようになっている」と言う自覚が出来てから任命するのか、むつかしい問題であると言われます。

神様は、自覚がまだはっきりしない者に対して、「やらせて見よう。そうでなければその気にならない」と思い切って私たちに任せて下さるのではないでしょうか。

ひとりでいる時は、朝寝坊で何をするのも怠けていたお嬢さんが、結婚して子供が生れると、眠いなんて言っていられない、風邪をひく間もないという程に逞しくなって子供を育てると言われます。娘時代も、「子供が出来たらどうしよう」と考えないことはないでしょうが、「実際その場に立つこと」と「そうなったらと考えること」はそれ程違う訳です。聖書に「婦人は子供をもつ事によって救われる」と書いてあるのもその意味であると思います。

イエス様は弟子たちに対してそうされました。あやふやな弟子たちに対して、「全世界をめぐって、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」と命令されました。しかしそうして任せられ、聖霊の印を押された時に、彼らは使命を自覚し、

御霊に従って大きな働きに踏み出してまいりました。

「私はこの日、この時のために来ました」とイエス様が言われたように、私たちも「この日、この時のために」置かれている者です。そのことを自覚してずっしりと自分の肩で感じるならばその人は変って来ます。

私もそうでした。最初に先生から「お話をしなさい」と言われた時はとてもおかしな事を言っていました。弟が私のことをいろいろ注意しました。しかしそれはすぐ直りました。なぜならば、実際に御用に預からせて頂くと、変らざるを得ないのです。

先程「テレホン聖書」の原稿のことを申しましたが、机の上で原稿を作っている段階では、勿論、「これ以上は出来ない」という所まで仕上げる訳です。ところが実際はまだそれ以上がある訳で、マイクの前に立つと、もっともっと変ってしまいます。修正が出来なければ何時間でも録音ができませんから、どうしても仕上げなければなりませんし、事実こんにちまで 300回近くそうして仕上げては原稿を読んで来ました。

お話でもお祈りでも何でもそうですが、神様の前に自分の責任をはっきり自覚すると変って来ます。仕方なくそうなるのではなくて、自分から進んでその中に入って行くのです。

パウロは、イエス様に従う時に、「わたしは何とかして死の様と等しくなりたい」と身を伸ばして進みました。普通の人なら危険にはなるべく近付かないようにと考えますが、彼は、神様に従ってむしろ死のような中に入って、イエス様が死人の中から甦られたように、私も甦りを体験したいと、進んでその中に入りました。

頭で考えたのではなく実際に入ったのです。入ったから彼はそのように生きました。パウロの凄まじいばかりの生き方については、「四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」とあります。彼は実際に自分の肩で神様の使命を受けたから変ったのです。

【背水の陣】

◆昔の戦争では、川を挟んで敵と向い合っている時、相手側に切り込んで後ろの橋を切り落としてしまうという事がありました。橋を残しておくと、帰ることを考える訳ですが、橋がなくなればもう帰ることは出来ません。進む以外にはない訳で、そうすると人間は強くなります。

神様の前において、私たちが困難を恐れず進んで入って行く、あるいは自分で橋を落す———これが信心（敬虔）のために自分を訓練するということです。訓練とは、進んでやるものであって、はじめ人から強制されることもあるでしょうが、そのうちに、「やはり自分がやらなければならない」と自分から訓練にいどむ訳です。

敬虔の修行もその通りで、自分から進んで橋を落して前進する———それが勝利の秘訣です。

【自分の責任で歩くほかはない】

◆「自覚」を辞書で引くと、「自分のあり方を弁える。自分の置かれた状況から使命とか義務を知ること」と書いてありました。自分で「私はこのために、この所に来たのです」というあり方を弁える———「それなら私は今、負わされたものを背負って行きます」とずっしりと背負うと、神様が力も知恵も与えて下さいます。「背負うつもりです。決して逃げはしません」というのも堅い決心ではありますが、実際に背負うのとは違います。

研究機関などで、新しいものを考えて行こうとする時、3つの条件があると言われます。

①お手本がないこと

②自分が考えなければならないこと

③期限が切られていること

です。この3つの条件があると人間はとんでもない事を考え出します。

私たちが神様にお仕えして、信心を訓練するのもそれと同じであって、「手本がない。誰にも頼むことが出来ない。私たちの命は明日も分らない」と自覚すると、私たちは変りますし、確かに大きな利益を受ける事が出来ます。

私たちが実際に使命を担って1歩進みはじめるならば、神様は「よろしい」と

派遣して下さいます。霊感賦74番に「われを遣わしたまえ」という歌詞がありますが、「私は特別何もしません（出来ません）。しかしあなたは何でもお出来になるのですから、私をどこへでもやって下さったらいいでしょう」―――そんなおかしな態度では神様は派遣されません。「私はあなたのお言葉に従って、いま踏み出しました。実際に肩で担っています。次の１歩を助けて下さい」となると、必ず助けて下さいます。

【神様はタバコをやめさせて下さるでしょうか】

◆昔、柘植先生の所へある人がやって来て、「先生、私はタバコをやめたいのですが、神様にお祈りしたら聞かれるでしょうか」と聞いたそうです。柘植先生はその人の心を見て、「それは聞かれないでしょう」と言われました。

「祈ったら神様は何でも聞いて下さるというのに、どうして聞いて下さらないのでしょうか」「それはあなたが本当にタバコをやめたいと思っていない。あなたはまだ飲みたくて仕方がないが、『神様がやめさせて下さったら、どうぞやってみて下さい』そういう気持でしょう。それでは駄目です。本当にやめたいのだったら、『私はやめます。神様が聖霊の宮として造って下さった尊い体をニコチンでくすべて申し訳ありません。私はやめます』、あるいは『私はやめました』と１歩踏み出すと神様は助けて力を与えて下さるのです。『飲みたい飲みたい、しかし神様、やれるものならやって御覧なさい』と言っていたら、これは駄目です」というような事を言われたそうです。

【あなたの信じた通りになる】

◆信仰の訓練も同じだと思います。神様が「こうしなさい」と言われたら実際にそうすることです。「そうすればいいんでしょう。分っています。その時になったらしますよ」と言うのと、「神様、あなたがおっしゃるから私は今踏み出しました。あなたが次の１歩を助けて下さらなければどうにもなりません」と真剣に信頼するのです。

またタバコの話になりますが、よく「煙管を折って捨てた」などと言う人がありました。しかし煙管はまた買ってくれば幾らでもありますから、それでは駄目です。張り紙をして「禁煙」などと書いても駄目です。神様の前に、「私はこん

な事をして尊い体を痛めて申し訳ありませんからやめます」と踏み出す———あるいは「やめました」と踏み出すと、神様が力を与えて下さいます。

神様の助けと救を受ける秘訣もそうではないでしょうか。「あなたの信じたとおりになる」と言われています。「はい、あなたは私を救って身も心もすっかり新しいものとして下さいました。あなたは力を与えて下さいますから、有り難うございます」「もう与えられていますから、私は与えられた者として生きて行きます」となると、神様は「そのとおりだ。私はすると言ったら必ずする」と遂げて下さいます。

◆1テモテ4:7/8 、「信心（敬虔）のために自分を訓練しなさい。からだの訓練は少しは益するところがあるが、信心（敬虔）は、今のいのちと後の世のいのちとが約束されてあるので、万事に益となる」———

神様の試みを「避けない」のではなくて、進んでその中に入っていいじゃないですか。神様が「訓練する」と言われるのですから、進んで訓練を受けるのです。そうして進み入る人と、嫌なことは避けようとする人は大違いです。

仕事にしても、何にしてもそうですが、進んで訓練を受けようと思えば、人はどんな事でも考え出します。たとえば、野球の選手が列車に乗ると、一番前に立って、枕木を見詰めるそうです。普通の人がぼんやり見ていると枕木が走って行くだけですが、野球の選手は飛んで来るボールを瞬間に止めて見ることが出来るように、枕木をギュッと睨むと言います。あるいは電車の揺れを利用してバランスを保つ訓練をする人もあると言います。

同じように神様が私たちに対して、「信心のために自分を訓練しなさい。今は貴重な時なのですよ。あなたは大きな期待をかけられているのですよ。あなたにはそれが出来るのですよ、やって御覧なさい」と言われたら「はい」とやる———出来なければ助けて下さるのですから。

そうして踏み出して行くと、神様は大きな利益を与えて下さいます。「万事に益となる」と書いてあります。この利益は何億円のお金よりも、あるいは叩いても死なないような頑丈な体よりも、何物よりも素晴らしい利益であり、報いです。

◆人はいろいろなものを求めて人生を走りますが、この世のものはまた消えて行きます。お金を一生懸命に求める人は、ある程度お金が溜まるでしょうが、それで満足は出来ません。「もっと欲しい、もっと欲しい」と考えているうちにお金に引き摺られて苦しみます。

大きな事業をしている人はたくさんのお金を扱いますが、そのお金を食う人もたくさんいる訳で、右から左にお金が動いて行くのを見るだけで、自分には何の益もないと書いてあります(伝道の書5章)。

またそのために眠ることも出来ないぐらい苦心して仕事をする———これも空しいことではないかと言われています。伝道の書においてソロモンはやれる限りを尽くしてみた結果、「空の空、いっさいは空である」と言っています。結局、神様の前に人間としての本分を果して、神様から報われる以外に道はないと言っています。

たしかに、神様の前に喜ばれるのは、「敬虔の修行———イエス様が私のために死んで下さって有り難うございます。私は神様から喜ばれるように努めます」、これがただ一つ神様から報われる道です。

多くの人々は、非常に努力して、神様から叱られる材料を積み蓄えているのではないでしょうか。もしそうなら気の毒なことです。「危ない!早くやめなさい」と叫びたいような気がします。霊感賦の71.72.73.74.75番あたりは皆そういう歌ですが、私たちは奥義を開かれたのですから、何としても多くの人々に警告したいし、また祈りたいと教えられました。それが使命ですから。

◆もう一つ読みましょう。2テモテ 2:20/21、朗読。「大きな家には、金や銀の器ばかりではなく、木や土の器もあり、そして、あるものは尊いことに用いられ、あるものは卑しいことに用いられる。もし人が卑しいものを取り去って自分をきよめるなら、彼は尊いきよめられた器となって、主人に役立つものとなり、すべての良いわざに間に合うようになる」———

カナ君の食事を見ていると、容器に「カナの鍋」と書いてありました。一軒の家にはいろいろな器があるものだと思います。お客さん用の器もあるし、大きい

鍋、小さい鍋などいろいろあって、それぞれ用い方が違います。

神様の家にも器がたくさんあると書いてあります。金銀の素晴らしい物もあるし、木や土の器、猫のお茶碗もあるかも知れません。私たちは器です。そこで「卑しいものを取り去って自分をきよめるならば、神様から喜ばれて尊いことに用いられる」と書いてあります。

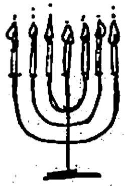
では「自分をきよめる」とは一体どういう事でしょうか。「私は悪い事はしないぞ、人の前にちゃんと良いことをして見せる」、それが自分をきよめる事でしょうか。私はそうではないと思います。

神様の手に自分を任せて、「今、この時のために私は来ました。今、この所のために来ました。この人のために私は今、派遣された者です。この人が救われるならば、それで私は死んでも悔いはありません」と言うぐらいに神様の手に自分を任せて行くならば、清められた器として神様から喜ばれ尊く用いられます。最上のものとして用いられます。「主人に役立つものとなり、良いわざに間に合うようになる」と書いてあります。

いま私たちはどんな器でしょうか。今までは汚れた器だったかも知れませんが、そのようにして自分を清め、神様の手に任せて行くなら、神様が尊い器として用いて下さいます。かつてはどんな器であったとしても、清められて尊いものとされるなら、金銀の器よりも素晴らしいものとして、最高のお客さんのために用いられるに違いありません。自分を訓練するとは、頑張りではなくて、自分の身分を自覚し、神様に自分を委ねることです。

１テモテ 4:7/8、「信心（敬虔）のために自分を訓練しなさい。からだの訓練は少しは益するところがあるが、信心（敬虔）は、今のいのちと後の世のいのちとが約束されてあるので、万事に益となる」―――

神様は特別に素晴らしい秘訣を教えて下さいました。多くの人はいろいろな妨げのためにここに近付く事が出来ませんでしたが、神様は特に私たちを召して秘訣を教えて下さいました。神様から喜ばれ、永遠に覚えられる者になりたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　(1991.1.5.14:00 聖会14)



第１５回〈1991年1月5日、午後7時〉

小羊の血とあかしの言葉

（悪魔の要塞を破壊する）

（聖書＝ヨハネの黙示録第１２章１１節）

【勝利宣言】　２１３

【現像したら定着するように】　２１３

【悪魔の要塞を破壊する】　２１４

【内なる人が強くされて】　２１４

【どこをつかまえればよいか】　２１４

－－－－－－－－〈あかし〉　２１５

「兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼らにうち勝ち、死に至るまでそのいのちを惜しまなかった」（ヨハネ黙示録12:11）

【勝利宣言】

◆これは悪魔と御使の最後の戦いです。巨大な龍（悪魔）とその使たちが、ミカエルとその御使たちに応戦したが勝つことが出来ず、遂に天から投げ落されました。

その時大きな声で勝利宣言が出されました。「今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者は、投げ落された」と。

悪魔はそれまで私たちを訴えて、「この人は何と言っても駄目ですよ。こんなことをして、あんなことをして、こんなひどい者が救にあずかる事が出来るものですか」と言って私たちを失望させ、神様から引き離し、汚そうとしていましたが、神様が「わたしは全部知っている。しかしそのために、神の子が十字架にかかって罪を負ったから、すべての罪は清められて彼はきよい者となった。いらん事を言うな」と言われれば、誰も私たちを訴えることは出来ません。

【現像したら定着するように】

◆これで完全な勝利を与えたられたのですが、私たちがその勝利を自分のものとし、はっきり定着して頂くためには、自分自身の口によるあかしの言葉、「私は確かにそうして頂きました。神様の救は遂げられ、こんな者でも救って下さるから感謝します——そのように救われたと信じます」と告白する。あるいは、「こういう問題について私は夜昼訴えられていましたが、最早彼は投げ落されてしまいました。私はどんな者であったとしても、イエス様の血によって罪が許されましたから、もう動きません」と言う——体にトゲがささって折れ込みますと、体に触れる度に内部がチクチクしますが、トゲが抜き取られると、もう揉まれても叩かれても何とも感じません。

その勝利の鍵は小羊（イエス・キリスト）の血と、私たちのあかしの言葉であって、それにより勝利が確実なものとなります。

私たちは今年、恵みの流れの中に置かれ、素晴らしいシャワーを浴びたように

恵まれましたが、それを今日、あかしするとサッと現実になります。それは丁度写真を定着するようなもので、現像しただけで置いておけば変色してしまいますが、定着したあと綺麗に洗っておけば、いつまでも変らない画像が得られます。

【悪魔の要塞を破壊する】

◆２コリント10章に、「わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわす――」

とあります。私たちは一時的にかろうじて勝利を得るのではなく、死に至るまでも命を惜しまず戦って、悪魔の要塞を破壊するほどの力が与えられます。私たちに与えられる勝利は、それほど素晴らしいものです。

【内なる人が強くされて】

◆エペソ３章 16/19節、「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る」とあります。

勝利のあかしをする聖徒は、その告白によって、内なる人が強くされ、神様に満ちているもののすべてをもって満たされますから、死をも恐れないで、戦い勝つのです。

もしそれをはっきり告白しないでおくと、曖昧になり、いつの間にか恵みが立ち消えになってしまうかも知れません。そうしなければ最後まで全うすることは出来ません。

【どこをつかまえればよいか】

◆あかしは決して長い必要はありません。また、美しい言葉も必要がありません。神と人との前にはっきり、「このように恵まれました」「今年は勝利を与えられ、身分が変えられました」「私はこの日、この時、このために来たと確信を得ました」のように、自分の受けたところを率直に申し上げると恵みが定着し、

そこから後退することなく、生涯全うして頂けるのです。

もしはっきり告白しなければ、神様は「どうなのだ。わたしは助けようと思うけれども、どこを掴まえて連れて行ったらよいか分からない」と言われるかも知れません。目の不自由な人と一緒に歩く時、半歩先を歩いて腕を貸してあげると、後ろからその腕を掴んで一緒に歩くことができます。すると、その腕の動きによって、その人の気持も、前方の障害物の様子もよく分かると言います。前を歩いている人が後ろの人を知ることも出来ます。そうしないと、一緒に行く人は非常に困る訳です。

私たちは大牧者からきちんと導いて頂くことが出来るように、私たちの態度をまずはっきりしたいと願います。こちらがはっきりすると、神様もはっきりして下さいます。電気コードを繋ぐ時にも、よく見て穴を合わせなければ繋がりません。殊にコンピューターなどの多極のコネクターになれば、正しい位置でないと、噛み合いません。今晩、神様の前にはっきり申し上げて、導いて頂きやすい者になりたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

================〈あかし会〉================

〈AAA姉〉

※聖会出席のために、昨年から待ち望んでおりましたところ、神様が一切を整えて下さいました。この５日間を通してみ言葉を受け取ることが出来て感謝です。

※神様が働いておられるから私はあれもこれも出来るし、生きることも出来る———神様がこれを私に下さったと感謝できるようになりました。私がするのではなく、神様がしてくださると思い定めて行こうと思います。

※キリストのうちに隠された宝の中には、イエス様の足跡があると言われました。私は３人の博士が宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬をささげた事を思い起しました。

※私の内には苦い根がいつも沸いて来ていました。しかし「キリストが私の内に生きておられる」とお言葉を頂いて平安を与えられました。祈りと言葉によってきよめられる恵みに置かれているのですから、そのように歩かなければならな

いと教えられました。

※私は人を生かすために、今生かされているのだ、と教えられました。「この年のうちにかなえて下さい」と願っています。

〈ＢＢＢ姉〉

※信仰が浅く弱い者です。しかし「弱い羊でも大牧者が導いて下さるから素直について行きなさい」という言葉が身にしみました。

※子供たちは毎年、家族でお宮参りをしていました。それが今年は教会の方に参らせて頂いたことは、私にとって本当に感謝でした。

※叔母が昨年暮れ入院したところ、主人が頼られて毎日博多まで通っています。夜は親戚から問い合わせの電話がかかって来るので、夜の集会に出にくかったのです。

〈ＣＣＣ姉〉

※今年は神様に密着取材して、いろいろな事を知り（領有し）「時」を自分のものにして行きたいと思いました。

※種蒔きの譬で、悪い種がいろいろな場所に落ちるという事を考えさせられました。悪い種が育たないようにしなければいけないと思いました。

※苦い根は心の隙間にすぐ忍び寄って来ることを教えられました。清さは移らなくても、汚れはスッと移る――こういう事に非常に注意して歩いて行かなければならないと思いました。

※「わたしはこの為、この時に至ったのです」というお言葉で、「この時、この所、この人のため」と自覚をして歩かなければいけない――その為には祈って行くことが最も大切であり、それが私の使命であると教えられました。

〈ＤＤＤ姉〉

※神様の御旨が開かれて、この恵みのときに私は何をなすべきか問われました。

※救われた今、神様に答えたいと思いました。

※自分の立場を知りました。私が祈っている方々は多いのですが、神様からその方々に通じるパイプを自分が持たせて頂ける恵みを知りました。本当にぼんやりしていた者です。執り成しの役目を果します。

※今年一年も、自分の頑張りではなく、神様のお言葉に素直になって寄り頼み、主のはたらかれる時を待ち望みたいと思います。

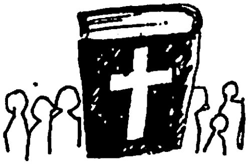
〈牧師〉

※過去の標語を振り返っても、戒め的なものは多くないと思いますが、今年は神様が「事はあまりに重大である」と、このみ言葉（左―――苦い根）を与えられたと思います。

※昨年末30日の礼拝でイザヤ書64章、「待ち望みたる者にいかなる神ありてかかることをせしや」を教えられました。そして、このあと１月６日の礼拝まで、一連の神様のみわざは実に麗しい絵巻物のような感じがしました。

※神様の命の息は、私たちの祈りというフイゴを通して多くの人々を生かします。また神様の命の恵みは、私たちのお祈りというポンプを通して一人々々に届くものである事を教えられ、非常に厳かな思いがしました。

◆頌栄 541番(910105-H15 感謝あかし会）



ーーーー新しい出発のためにーーーーーーー
〈１９９１年1月6日、午前１０時／日曜礼拝〉

主の真実こそ盾

（生ける神の陰に宿る幸い）
（聖書＝詩篇９１篇4節）

【よく見定めて積極的に】　２２１

【この平安の舞台裏は？】　２２２

【災となるべきものが益となる！】　２２２

【自らが傷付いて隠れたものを守る】　２２３

【一度言われた事を二度聞くように】　２２４

【［主が働かれる時］＝
［私たちが御用に与かる時］】　２２４

【盾の守りを体験する法】　２２５

「主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは大盾、また小盾である」（詩篇91:4）

◆詩篇91篇は信頼する者に与えられる安全のお約束です。イエス様が荒野で悪魔の試みに会われた時、悪魔は11節と12節のお言葉

「これは主があなたのために天使たちに命じて、あなたの歩むすべての道であなたを守らせられるからである。彼はその手で、あなたをささえ、石に足を打ちつけることのないようにする」

をもって立ち向かいました。しかしイエス様は「汝の神を試みてはならない」と彼を退けられました。

※1/2 節は避所とする者の幸い

※13節までは幸いな理由

※14節以降は民に対する約束です。

これを読ませて頂いた時に、ここに一つの信仰の道筋、あるいは法則が秘められていると思いました。

1/2 節の信頼する者の幸い、避け所とする者の幸いから分ることは、人間というものは弱いもので、何かに頼らなければ生きていかれないものであるという事です。自分は頼っていないように思っても、何かを頼りにしています。暖かくなって、朝顔の種を撒くと、蔓を伸ばして何かに絡まって伸びて行きます。自分の体（蔓）だけで真っ直ぐに立つ事は出来ません。

私たちの心もそれと同じで、何かを頼りにして生きています。頼りにするものが大丈夫ならばよいのですが、裏切られるもの、倒れてしまうもの、弱いものですと大変です。

しかし神様は「いと高き者のもとにある隠れ場に住む人、全能者の陰に宿る人」とあるように、すべてのものの造り主であり、全能者であって、どんな事でも出来るお方です。そしてすべてについて届く事がお出来になります。大きな世界から小さな世界に至るまで、肉体の問題でも心の問題でも、すべての事に完全に届き得る方で、私たちが積極的にその方に向かって頼るならば、素晴らしい報いを

与えて下さいます。

「わが避け所、わが城、わが信頼しまつるわが神」とは信頼の言葉ですが、頼りがいのあるものに頼って安心を得る事は実に素晴らしいものです。

【この平安の舞台裏は?】

◆目が覚めて見ると、神様の支えがどんなに偉大なものであるか、そしてそれが決して当然でない事が分ります。イエス様の血によって憐れまれて、こんにちこうしてある事ができるのです。体の仕組みのごく一部を考えてみても、生命現象が全くバラバラに起っているのではなく、一つのご意志によって統制されています。神様は「わたしは主であって、あなたがたをいやすものである」(出エジプト15章)とおっしゃっています。癒し主であり、健康の保持者です。神様はご愛の意志と、知恵と力をもって私たちを支えて下さっています。ここに大きな安心があります。

「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる」(ヨハネ14:27)とおっしゃっています。本当にそうです。世の中のものには、「今はよいが、明日はどうなるか分からない」という心配がありますが、全能者であり、いと高き方は永遠の支配者であって、私たちに「大丈夫」とおっしゃったら、決して間違いはありません。

【災となるべきものが益となる!】

◆3節以降には幸いな理由と体験が記されています。恐ろしいもの、矢、疫病滅び、災、悩み、獅子、蝮などが書いてありますが、私たちを損なおうとする力は非常にしぶといもので、正面からかかって来る事もあれば、裏からこっそり侵入して来ることもあります。あるいは病原菌を注射し、あるいは毒麦を撒く訳です。

「夜のおそろしい物、昼に飛んで来る矢」とありますが、「恐ろしい」とは欲望とか破滅という意味だそうで、私たちのうちに損なおうとするものが迫って来ますが、神様は私たちを羽をもって覆い、翼の下に避け所を与えて下さいます。ひな鳥が親の羽の下に入っている姿は可愛いものですが、これ程安全な事はない訳です。親は責任をもってひな鳥を庇います。

私は田舎で鶏を飼った事がありますが、鶏が外敵（犬猫など）に襲われると、物凄い剣幕で羽を広げて飛び掛かって行きます。何回も攻撃するうちに大きな犬猫も首をすくめて退散してしまいます。親鳥はそのようにして雛を守ります。神様は私たちを幼い雛のように、羽をもって覆い、翼に下に隠して下さいます。神様の真実はどんなに大きな盾よりも確かなものです。

現実に災があっても近付く事が出来ない、臨まないという訳です。たとえ自分の上にのしかかって来るように見えても、それが災にならず、恐れにもならない、むしろそれを踏み躙ってしまうという実に驚いた事になります。ローマ人への手紙８章に約束されているように、「万事を益となるようにして下さる」のです。

古い歌に、「戦うままに力は増して一一一」というものがありました。私たちにとって災ではなく、プラスにして下さるのです。

人間にとって恐れの最も大きいものは「死」ですが、神様の盾によって守られる時、死をさえ乗り越えて、それをむしろ益と変えられます。聖徒パウロは、ピリピ 1:21/22に、「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。しかし、肉体において生きていることが、わたしにとっては実り多い働きになるのだとすれば、どちらを選んだらよいか、わたしにはわからない」と言っています。私もそう思います。世は死を恐れますが、私は獅子と蝮とを踏み躙るように、それを乗り越えさせて頂きました。これは神様の最も素晴らしい支えではないでしょうか。

◆次に「盾」について教えられました。盾は陰にいる人を守る為に自分が傷付きます。弓矢を受けてカチッと跳ね返します。盾といっても無傷という訳にはいきません。もし完璧なものを造ったら重くて大変ですから、ある程度は自分が傷つき、あるいは突き通されても中にいる人に届かないように守ります。

イエス様は私たちの為に自らが傷つき、自らの体を裂き、陰にいる私たちを守って下さいました。そして私たちに獅子や蝮を踏み躙る勝利を与えて下さいました。それが神様の救であると教えられました。

【一度言われた事を二度聞くように】

◆実験・体得していくと、神様はそれに対して14節からの約束を与えて下さいます。私たちがそういう体験をして、「ああ、やっぱり」というのではありません。私たちの体験以前に、実は世の初めの先から神様のものとして選ばれ、イエス・キリストの救にあずかるべく備えられているとエペソ１章にあります。

信頼して体験する———そして「神様に信頼する者は幸いです」とほめたたえると、救が私たちの内に確認されます。ダビデが「神様は１度言われた。わたしは再び聞きました」（詩篇62篇）と言っているように、神様が生ける方でいらっしゃる事を教えて下さいます。

彼は「力は神に属することを。主よ、いつくしみもまたあなたに属することをと聞いて確信を与えられ、それによってまた信頼していく事が出来たのです。

【［主が働かれる時］＝［私たちが御用に与かる時］】

◆14節に神様が約束されている事は、「助けよう」「守る」「答える」「救う」「光栄を与える」「長寿をもって満ち足らせる」という事です。長寿といっても何百年という肉体の命ではなく、永遠の命の望みをもって私たちを満ち足らせて下さるのです。最後の勝利———何が消えても消えない永遠の望みをもって満ち足らせ、救を確認すると言われます。

「信仰にはじまり信仰に至らせる」とありますが、神様に対して自分を投げ掛けて行く時、そこで実験・体得し、更に神様をあがめる、神様が私たちを確認して更に進ませて下さる———これが神様の幸いな循環であると教えられました。

今年は「今は主のはたらかれる時です」とみ言葉を与えられました。今は預言の時が満ちて、終りを急いでいるが、神様から忍ばれており、人間の方法は尽きて、どうしても神様が働かなければならない時に至っています。神様はまさに働らこうとされており、私たちを働らかせようとされている———主人が奴隷を使うような意味ではなくて、神様がお力を発動する為に、私共をして待ち望ませ祈らせられるということです。

私たちの働きを期待されると言っても、神様のお力が足りない訳ではありません。私たちを憐れんで神様のお働きにあずからせて下さるのです。実際は神様がすべてを回していらっしゃるのですが、私たちに手を添えさせて下さって、あた

かも自分が回しているような気持にさせて下さる訳です。

山笠の周囲に子供がついて綱のはしっこを持ったり、担ぐ真似をしていますが、自分が担いでいる訳ではないのであって、自分が手をかけ、あるいは一緒に引いているつもりで歩く訳です。

それと同じように、神様が世界を創造し、歴史を導き、私たちのすべてを回していらっしゃるのですが、それに私たちをあずからせようとして、「祈りなさい。私に代ってすべてを統べ治めなさい」と言われました。これは私たちの力ではないのであって、イエス様の名によって憐れみを請い、祈りをささげる時に、神様がご自分の力を現して下さるのです。これが「今の時」であると教えられました。

◆神様のご真実である大盾、小盾を体験するのに、他に方法はありません。人間関係でも、相手の人の言葉に従って見ると、その方のお考えなり知恵が分るように、神様のお言葉に従うことによって知らせて頂くのです。

それは丁度イスラエルの民が約束の土地（カナン）を与えられたようなもので、彼らは全体の領有を約束されていましたが、実際の歩みにおいては一つ々々の（城の）町と全力で戦って、次々に占領して行かねばなりませんでした。彼らはこうして自分たちの領地を獲得して行ったのです。

私たちも同じで、神様を知る事は「領有すること」です。いろいろな事に当り、疫病、罠、恐ろしいもの、いろいろな物の引っ掛かり、あるいは激しい熱でうなされたり、恐るべき状態になるかも知れません。しかしそのような体験をして行く中ですべての災を過ぎ越させられ、覆い守られ、敵を踏み躙らせて下さる神様の真実を知るのです。

「そのまことは大盾、また小盾である」というお言葉を与えられましたから、何としても神様を知らせて頂く者になりたいと思います。「生ける神の陰に宿るさいわい」を一つ々々増し加えて頂きたいと願っています。

４節、「主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは大盾、また小盾である」―――

あとはこの真実なお方に頼る事によって、それを知るのです。盾にドンとぶつ

かる事によって堅さ、強さを知るように、神様のお言葉に信頼したいと思います箴言には、「神の言葉はみな真実である、神は彼に寄り頼む者の盾である」とありました。私たちの盾となって下さる方をいよいよ深く知ってほめたたえ、「わが信頼しまつるわが神」と一つ々々確信を増して頂く者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　　(1991.1.6 戸畑教会礼拝)

※基督伝道隊 戸畑教会について

【沿革】基督伝道隊は、英国人宣教師 B.F. バックストン師の信仰の流れを汲むもので、1923年柘植不知人師によって設立されました。
その後、福岡→八幡→戸畑と発展し、1986年 4月、当教会が設立されました。

====【定期集会】====

◆ 日曜学校 日曜日 8時半
（第二日曜学校） 日曜日15時
◆ 日曜礼拝 日曜日10時
◆ 伝道会 日曜日19時半
◆ 第一祈禱会 水曜日10時
◆ 第二祈禱会 水曜日19時半
◆ 金曜会 金曜日10時
◆ 早天祈禱会 火～土曜日 6時
◇テレホン聖書（終日）881-1059ﾃﾝｺﾞｸ

====【不定期集会】====

◆新年聖会
・1991年は 1月 1－5 日
・毎日10時，14時，19時
◆クリスマス礼拝
◆復活節礼拝など

◆聖餐式 ◆洗礼式
◆結婚式 ◆幼児祝福式
◆葬式 ほか

===========【出　版　物】============

※私の仕える主は生きておられる（A5判）
(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)
1982年以降の礼拝の中から一部を選び、ほぼ全文を収録

※戸畑教会新年聖会記録（A5判）
1987年版、1988年版、1989年版、1990年版、1991版
全集会のほぼ全文を文章化したもの

※私の使徒行伝（B6判）
(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)
1986年以降の各種集会の説教概要集 3-6ヶ月に一回発行

※テレホン聖書メッセージ集（A6判）
85/86 年版、86/87 年版、87/88 年版、88/89 年版
１年52-3回分の放送原稿から挨拶などを除いたものです
一回は150 秒弱のショートメッセージです
～～～～上記の各出版物を御希望の方は御連絡下さい～～～～

※当教会は、エホバの証人（ものみの塔）、モルモン教会、統一協会（世界基督教統一神霊協会）とは一切関係がありません。

【友好教会】 北九州市／基督伝道隊本部／八幡前田教会
福岡市／基督伝道隊福岡大濠公園教会 その他／出張伝道地

伊規須　太郎（いきす・たろう）
1926年（大正15年）福岡に生まれる
基督伝道隊戸畑教会　牧師

１９９１年新年聖会記録

1991年 3月31日発行

著　者　　伊規須　太郎
発行所　　基督伝道隊戸畑教会出版部
〒804 北九州市戸畑区小芝2-1-13
Tel　093(882)9266
Fax　093(881)5386
「テレホン聖書」093(881)1059テンゴク

（使用機：JW90HX他）